

天うつ浪

第二

幸田露伴

明治四十年一月 春陽堂

天あめうなみつ浪

第二

其一

『それからといふものは當人たうにんも、一旦いつたんし死ぬとまで云いつて遺よこして置いて死し損そこなつたんだから、流石さすがにきまりが悪わるいか差はづかしいかして、パツタリとおどさた音沙汰おんさたを聞きかせなかつたが、何なんでも後あとで聞きいた談話はなしの模様もようで考かんがへて見ると、一霎時しばらくの間あひだは茫然ぼううつと仕して居ゐたんだぞ。

そのうち其中そのうちに段々だん／＼氣きが鎮しづまつて、斷念あきらめが自然ひとりでについて來ると、源げんの事ことは捨すてたものと仕して仕舞しまつた様子やうすだが、さあ持前もちまへの氣性きせうのあるところへ捨鉢すてばちが加勢かせいしたから、輪わをかけてお狭きんになつたと見みえて、叔母おばが婿むこにと定きめた男をとこを嫌きらつて、——何なんでも其その男をとこが拵かせいで金錢かねを溜ためるよりほかにやあ何なにも知しらない。人ひとの情合じやうあひや意氣張いきはりも分わからない牛うしのやうな男をとこになると

いふのでだ、を捏ねたのだから、とう／＼大紛紜おほごた／＼が持ち上あつたのさ。叔母おばは昔風むかしふうだから嵩かさにかゝつて、妾わかしが可いいと定きめて先方むかふへも話はなしたのだから、今更變改いまさらへんがいは出来できも仕しないし、また金かねはあり人物じんぶつは堅かたし、婿むこにして不足ふそくのある男おとこでも無いのに、厭いやの嫌きらひのといふのは我儘わがままだと叱しかれば、男おとこの方はうからも喧やかましく逼せまつて來くるので、お龍りうも氣きの弱よわい娘こなら折をれて仕舞しまつて、其男それを婿むこにして身みを固かためるところだつたが、毅然しつかりとして分別ふんべつがあると云いふんでは無いけれど、妙めうに氣きの冴さえた、萎ひけて居ゐない娘こだから、たとへ金かねが無なくつて人物じんぶつが堅かたくなくつて一眼めつかりで跛足びつこで有あらうとも、其その心意氣こゝろいきさへ妾わかしの氣きに入りやあ、妾わかしあ亭主ていしゆにでも何なんにでもするが、味あじの無い石瓦いしかはらのやうな人ひとに添そふ事ことあ出来できません。第一だいいち妾わかしあ人の縁合えんあひの談はなしに、目上めうへの者ものが壓制おしつけわぎを仕しやうとするのは蟲むしが嫌きらつてなりません。大きな御世話おせわです。要いらない事ことです。妾わかしあもう人ひとの内君おかみさんなんぞになれなくつたつて構かまはない身體からだです。好きすきな人ひとになら妾わかしにでも情婦めかけにでもなつて與やる代り、嫌いやな人ひとになら奥様おくさんになれ御臺所みだいどころになれつて云いはれたつて嫌いやな事ことです。と恐おそろしい亂暴らんばうを云いつて叔母おばと舌戰ぜりあつたさ

うだよ。』

『なる程なア！。考へて見りやあ慙然なところが心底にはあるぜ！。しかし餘程異様な出來の娘だナ！。』

『マア左様さ。自棄から出て居る料簡なんだから云つて見りやあ慙然なところもあるのさ。それでも先方の男が氣が廻ら無くつて、話が中々壊れないので、そこで彼の娘は癩癩を起して、今年の三月に駿府を脱け出し、何といふ目的があつたのじやあ無いが、何をするにしても自分の勝手に世を送らうといふんで、ふらりと東京へ遣つて來たのさ。すると銀座の往來でもつて、ひよつくりと源に會つたゞらうぢや無いか！。』

『や、そりやあ大變だ！。おもしろい、面白い！。さうして、』

『源は只無暗に雑沓へ入つて逃げて仕舞つたんだが、其の時の様子を見て可怪いと勘付いたから、さあ彼娘は竊と源の様子を内内で搜つたんだね。すると源の心中が眞實に讀めたから、どんなにか口惜がつた事だらうさ！。』

『ン、道理だ、口惜かつたらうさ!。』

『甚く力を入れるね、可怪いよ。それからお前何處に何様して買ったんだか、人を騙して取りでも仕込んだか、袂の中に短銃を秘してね。』

『ヨーツー、凄いなア。』

『たしか銀鼠だつたと思つたが薄い色の頭巾を深く被つて、四日のお月様の丁度出て居た暮合の點燈頃を、源の家の横丁の角に立つて居たのが此の四月だア。ほんとに考へて見ると怖い事さア。』

『ン、ン、』

『それをちらりと見た妾の、銀座で會つたといふ話も源から聞いてたから、こりやあ氣取つて仕舞つて話を仕掛けて、其晩は吾家へ寝させて置いて、源夫婦に内通を仕て遣つたんで、何事も起らずに済んで仕舞つたんだよ。』

『ア、惜い事を仕た。ドンと遣らせりやあ好かつたのに!。』

『戲談ぢや無いよ、下らない!。源夫婦は怖がつてく、弟子のあるのを幸ひに仙臺へ竊と拵ぎに行つて仕舞つたのさ。それからいろく』

理解^{りかい}を云^いつて聞^きかせて、とう／＼宅^{うち}へ置^おくやうに仕^したんだが、左^さ様^うい
つた氣^き性^{せう}だからまた男^{をとこ}が好^すいて、段^{だん}々^ぐと妾^{めかけ}のためになり出^だしたね。』

『そりやあ左^さ様^うだらう、中^{なか}々^く値^ねの踏^ふめる奇^{しろ}貨^{もの}だわエ。』

『そこで前^{さき}途^ぐの考^{かん}案^がもあるから、すつかり妾^{めかけ}のものに仕^して仕^し舞^まはうと思^{おも}
ふんだが子^こ、まあ第^{だい}一^{いち}にチヤンと關^ひ係^{つかり}を切^きつちまはなけりやあならな
いのが叔^お母^{はう}の方^{はう}だ子^こ。』

『ン、そりやあ譯^{わけ}は無^なえ、乃^お公^れが法^{はふ}をかいて遣^やらあ。』

其二

『眞實に譯無く此方のものに出來やうか子。』

『出來るともさ！。併し戸籍までといふ譯にやあいかねえ。籍まで御前の娘にしやうと云ふにやあ、お前が岩崎の家を退いて仕舞つて一本立ちになるか、二人の子を順々に白痴か瘋癲かに云ひ立て、相續權の無いやうに仕舞はなけりやならねえが、そんな事は逆も出來るとぢやあ無え。』

『そんな事は損になるから詰らないや子。いくら氣に入らない子だつて何だつて、若い者あ何様に出世をするか知れや仕ないんだもの！、金錢が要らないなら其の親になつての方が利に當るぢや無いか。』

『ハ、ハ、繼子二人の親になつてのを、抽籤前の勸業銀行債券でも持つてるやうに思つてるのか。ハ、ハ、お前は眞實に伶俐だ、好い料簡だ、感心した。』

『お冷やかして無いよ、馬鹿にしてツ!』

『それだつて二人も子があるのに其上に又、あのお龍も眞實の養女に爲やうなんて、あんまり蟲が好さ過ぎるからナ。』

『ぢやあ何様すりやあ可といふのかエ。』

『何様するも此様するも要る事ぢやあ無い。つまり叔母といふ奴が頭さへ出して來ないやうにすりやあ好いのだらう。』

『左様さ!。彼女を囹にして穫つた禽を、他の手へ取られるやうな事さへ無きやあ畢竟いゝのさ。』

『だから譯は無えといふのだ、矢筈にかけるんだナ!。』

『矢筈にかけるつて、何様いふやうに?。』

『叔母のところへポーンと一本手紙を遣つて、斯様いふことを云つて遣るのだ。妾は師匠と弟子との縁で、其方のお龍さんを何月以來食客に仕てゐます。聞けばお龍さんは複雑んだ譯で、其方を無言で出て來たのださうだが、一季半季の奉公人でも、定めるところは確然と定める習いだから、何の定も無しに無際限に置く譯にはいか無い。當人の

料簡ぢやあ其方へは歸りたく無い、此地で藝の師匠でも仕て暮したい
と云ふ事だし、妾の目で見ても當人の藝の性質に見込があるから、若
し全とお龍さんを妾の娘分にして、妾の跡を襲がせても宣いと云ふの
なら、今までも世話を仕たが猶此上とも、立派に藝の成就るまでは何
年でも世話を爲やうが、そちらが左様いふ氣で無ければ此地でも困る。
たゞべんくとは世話も出来ぬから、今迄世話を爲た食雜用を入れて、
其方へ引取つて貰ひたいものだ。しかし當人は何様いふものだから、甚
く其方の事を悪く云つて、田舎へ返される位なら舌を咬んで死ぬなぞ
と、無茶を云つて居て眞に困ります。と斯様いふやうに掛合ふのだ。
遣すなら縁切にしろ、返せなら食雜用を入れろと、金額を大袈裟にし
てどうだくで責めるのさ。さうすりやあ大概姪一人捨てた氣になら
うぜ。』

『でも食雜用ぢやあ月十圓にしたつて知れたもんだから、大袈裟に爲や
うも無いぢや無いか。』

『智慧の無い事を云つたものだ！ 衣服や髪飾りを少し買つて遣つて置

きやあ、大した金額に註加が出来らあナ。』

『成程ネ。それでも連れて歸つたらば?。』

『その時はまた後で策を爲るとして、食雜用と縁切とで一吋暖まつて湯治とでも洒落たが宣い。』

『縁切とはエ?。』

『お龍が駿府へ連れて行かれると定つたら、お前が源の親父へ衝突つて、此方の息子さんが悪いのだから、空拳では話は濟みますまい、いくらかの手切金を御與んなすつて、彼の娘を駿府へ歸らせた方が宣うございましやう、左様爲ないと何時までも關係があつて、何様な事が起こるか知れませんか、と少し巧く口をきき、やあ必定取れらあナ。源の家ぢやあ怖がりきつて居やうから、出さうぢやあ無えか。其金を此方の懷中へそつくり入れて、お龍は叔母に連れさせて歸しちまふなぞあ、まんざら野暮ぢやあ無えか。』

『さうさねえ。成程野暮ぢやあ無えぢやあ無えかだろ。ハ、ハ、これだからお前は惡徒だつて云うんだよ。』

『笑はせやがる！。番毎に悪口だ。』

『ナニ褒めたんだよ。』

『碌でも無え褒めやうだナア、有り難くも無え。そりやあ其様とお龍はもう全く源に未練は無えか。』

『いろ／＼理解を云つて聞かせたから、今ぢや怒つては居るやうだが、思つては居ないぞ。』

『先刻の言の通り男にやあ懲りてるか？。』

『ナアニ彼様は云つてるが、今ぢやあもう、張りに来る若い男たちにちやほや云はれるのを、可笑がつて遊んで居る位だもの、そして又前々からの性分ぢやあ有るが、身だしなみを氣にして、髪なんぞも髪結に結はせる時の間にやあ、やれ何の、彼のと、流行を追つて束髪に異なるまで仕て、男たちに好いとか悪いとか可笑しいとか云はれて、おもしろさうに笑つて騒ぐのだもの、一寸氣に入つた男にでも逢つた日にやあ、合點で一ト苦勞して見やうと云つたやうな調子が見えるね。』

『フーン。』

『だから吾家へ来る若藏たちの中で、傳でも清でも關はないが、誰かと出来るやあ宣いと思つてゐるのサ。』

『解らねえナ、何故？』

『何故つて情夫が出来りやあ金銭が要るは子、金銭が要りやあ自然に欲しがるは子。金銭を欲しがらない我儘者にやあ困るけど、金銭を欲しがる奴なら何様な事でも爲せられるから子！』

『違無え！。其様な急處を捕へやうと思つて待構えへて居るのかエ？。オ、怖い！。何の事は無え、他の色戀は汝の餌食だナ。』

『ハ、ハ、云つて見りやあ其様なものだ子。一體流行も仕無い三絃の御師匠さんで、澄まして遣つて行かれるのは、餌食になる奴がザラに有るからだアネ。つまり男さへ見りやあべろつく娘や、女さへ見りやあでれつく男が、世の中に澤山有る中あ、下らない小説でも御客様は絶えないし、弾けも仕ないお師匠様でも斯様して御酒も飲めるんだから、フン有り難く出来てゐる世界さネ。ア、お龍も、う歸つても来るだらうし、物も持つて来て呉れりやあ水も汲んで呉れるといふ重寶な人達も

そろ／＼来る時分だ。お前一ト足先へまた寄席へお出でナ。妾もお龍を置いて後から出掛るよ。左様するとまた其場に居合せた若い奴に有り難がられるのだからをかしい!。」

住處も業體も明らかならぬ男は點頭きて去り、引違へてお龍は歸り來りぬ。

もとより色白の、特に浴上りなれば、少し上氣して紅潮したる面の一トしほ麗しく、嫣然と笑める頬に笑靨少しよりて、これが短銃を袂にして情無き男を撃たんとしたる恐ろしき女とは更に見えず、たゞこれ垂絲櫻の艶に咲きほこつて、吹けよ春風、吹かば狂はん、降れよ春風、降らば濡れんと、春は十分の花の色香に、溢るゝばかりの優しき情の浮めるを見るが如し。

夜は男弟子の世界なり。やがて清といへるが入り來れる時、女主人は稽古をお龍に托して、用事ありと云ひて寄席に去りしが、それより傳も來り勝も來り、誰も彼も來りて、皆お龍が機嫌とりぐに、富士の白く優しきを取巻く夏の山々と、いかつき身體の背をくゞめ頭を低く

してしほらしくしたるものをかし。

其二

其三

春蘭けたる上野の夜は深く人は稀にして、白き綿雲の地に宿れるが如く爛漫と咲き亂れたる櫻の梢に、おぼろ月の光薄りと照らして、一場の景色は夢のやうに淡し。

『あら源さん、酷いよ、御待ちつてば、御待ちつて云ふのに!。』

男は妾が言葉を耳にも入れず。振返りもせずして唯走りに走り去る情無さ味氣無さ。其の後姿は幾本の櫻の幹より隠れつ見はれつして、見るく遠く花の蔭の糢糊と白きが中に消え行かんとすれば、心も更に心ならず、御召縮緬の着物の生憎に足に纏繞はるを煩さしと苛ちながら、芝翫下駄も踏みかへしたるま、脱ぎ捨て、足袋徒跣の脛あらはなるさまの我羞しきを厭ふに暇無く、跳る胸の氣息苦しさを堪へ、

『源さん』

と又一ト聲呼ぶに、男は猶心強くも走つて已まず、返響のみ我が耳に、

『源さーん』

と悲しく聞こえて、天地は情無くしんく物寂しく、月もぼんやり、花も朦朧、何とも云へず只靜にして、我のみの騒ぎ悶ゆるを笑へるが如し。

『源さーん』

堪へかねて又一度呼べば、

『源さーん』

と花の間より返響のみ又一度繰り返したる其の聲の響くに連れて我が頭上なる花はちらく散りかゝりて、忽然として眞實の雪となり、見やる彼方には廣々としたる川原の見はれて、其處を流るゝ水の勢強きに、渡舟無く橋無ければ男は逃げまどひて、哀憫を乞ふが如く此方を振り返りぬ。戀しかりしは先刻の程なり、今は憎さ恨めしさのむらくと湧き上りて、思はずも手にしたる短銃の引金を引けば、どんと云ふ音の中に白煙ぽつと立つて、源は朱になりつ挫と倒れたるが、源の倒るゝと同時に其の身後に、記憶も無く名も知らぬ若き男の、

明らかに此方こなたを向むきて悠然いうぜんとして岸きしに立たてるが見みえたり。流石さすがに人ひとを殺ころしたる身みの罪つみに、心こゝろは度どを失うしなひて慄おそれ戦をのけるを、彼かの男をとこは寛大おほやうに清すいしき聲こゑして、

『赦ゆるす、赦ゆるしてやる。』

と優やさしく云いひたる其聲そのこゑの、何故なにゆゑとは無なけれど身みに沁しみて嬉うれしく、骨ほねも溶とくるやうに悦よろこばしと思おもふにつれて、忽地たちまち今までの妾わが振舞ふるまひのはした無なかりしが口惜くやしく慚はづかしく、顔かほに火ひの照てるおもひして、何となにか言ものいはん言いはんとすれば、舌したも結むすば、れ唇くちも動うごかず、有あり餘あまる胸むねの思おもひを現あらはすに由よし無く、苦くるしみくゝて氣息いき塞つまりたり。

『お龍りうちゃん、お龍りうちゃん、何様どうお爲しだよ。お龍りう。大層たいそう驚おどろされて居ゐるぢや無ないか。』

『ア、御師匠おしよさん!。』

覺さめたれども猶なほ茫然ぼうぜんとして、星眼せいがんうつとりと懶ものうげに動うごかず。

『汝おまへ何なにか怖おそろしい夢ゆめでも見みたかエ。お廉やすくない夢ゆめかなんぞぢやあ無ないか。』

『あらお師匠さん、嫌な！。何か言つて？。』

『何だか分らなかつたよ、妾も今日が覺めたんだもの。夢は五臓の疲勞だつて云ふぢや無いか。昨夜妾が寄席から歸つて、それからまたお五十の談やなんぞを遅くまで仕たもんだから、屹度お前五臓が疲れたんだよ。それで魘されたりなんぞ仕たんだらうよ。』

『そんな事かも知れませんよ。オヤツ、今朝はお師匠さんの代りに四ツ木へいつて御病氣見舞を爲る筈でしたつけ。斯様しちやあ居られないんでした、まあ起きましやう。しかし何だか可怪な夢を妾あ見ましたよ。』

起きんとして起きず、枕に俯臥して、美しき頸脚を惜氣も無く見せつ、名も知らず顔も定かならで聲のみを聞きたる夢の中の其人を思ふにやあらん、凝然として少時思想に耽りたるが、寐みだれる髪ほつてかゝれる横顔ふくよかに白くして艶なり。

其四

近く窓外を過ぐる物賣りの聲は尾を引いて長く、少し隔たりて聞ゆる
大通りの車馬の響は一ツになりてがやつき出す日本橋は本銀町あた
りの某の横丁の朝景色、建ちならべる家々に家々の聲あり物音あり
て、子供あるところは先づ騒々しく、若俊が多きところは笑多く、火
の燃ゆる音、水使ふ音、夜明けより一二時間ばかりが程の一トしきり
賑やかなるは家ごみの市中の常の態なり。

いつもの晏起には似ず今日は早起して、お關の家の朝食は疾に済みぬ。
既に髪を理め身じまひしたるお龍は、今また衣を更め帶を換へて、こ
れより四ツ木へ赴かんとはするなり。

女主人は帶止めの美しきをお龍に渡し、
『一寸と見ておくれ、此品あ妾が汝にあげやうと思つて取つて來たんだ
よ。昨夜直ぐあげやうと思つて居たが、つい忘れて仕舞つた。夜だつ

たもんだから、能く分らなくつて、今見ると色が何だか思つたやうぢや無いが、汝厭で無けりやあ締めておくれナ。』

と云へばお龍は嬉しげに見ながら、

『あら勿体ない、佳い色ですわ。ちつとも可厭な事なんぞありあ仕ませんが、ほんとに此品あ戴いても宜いの?。』

と、我を愛し呉る、女主人が情を、深くも悦べる其の眼色に、少からぬ感謝の意は表れたり。

『いゝともさ! お前にあげやうつて買つて來たんだもの!。それぢやあ御苦勞だけれども行つて來ておくれ。いゝかエ、吾妻橋から直瀨車に乗つて、鐘が淵といふので下りて右の方へ眞直に行きさへすりやあ造作ないんだよ。だけど田舎道だから聞き聞き行かないと損をするよ。』

『ハイ、ようく分りました。狐に魅されないやうに参りますよ。ホゝゝ。』

『ハゝゝ、ほんとに田舎道でまごつく位器量の悪い事無いからさ、よ

く魅^ばされないやうにお仕^しよ。ハ、ハ、。それから、あの、忘^{わす}れてもお五十^そのところへ行^いくんぢやないよ。傳^{うつ}染^つつた日^ひにやあ間^ま尺^{やく}に合^あはないから子^こ。たゞ水^{みづ}野^のつて云^いふのが世^せ話^わを仕^して居^ゐやうから子^こ、其^{それ}男^おに會^あつて見^み舞^{まひ}の口^{こう}上^{じやう}を昨^{けふ}夜^{ふべ}教^をへて置^おいた通^{とほ}りに云^いやあ宣^いいんだよ。つまり病^{びやう}人^{にん}は何^{どう}様^{よう}だつて構^{かま}はないんだが、その水^{みづ}野^のつて男^{をとこ}への義^ぎ理^りでもつて、お前^{まへ}に行^いつて貰^{もら}ふやうな譯^{わけ}なんだから子^こ。』

『ハイ、何^{なん}だか能^よく分^{わか}りませんけど、宣^いい加^か減^{げん}に申^{まを}して置^おきやあ宣^いいのでございましやう子^こエ。』

『ハ、ハ、左^さ様^{さう}さ、左^さ様^{さう}さ、それで宣^いいともし。妾^{わたし}が顔^{かを}を出^だしやあ何^い程^{いくらう}嫌^{いや}でも直^ぢ接^かにお五十^{いそ}を見^み舞^まつて遣^やらなきやならないんだから子^こ。平^ふ生^{だん}交^な情^わの悪^{わる}い奴^{やつ}の疫^{やく}病^{びやう}なんぞを、四^よッ木^ぎくんだりへ見^み舞^{まひ}に行^いくなんて、可^い厭^やな事^{こと}ちや無^ないか、馬^ば鹿^か々々しいわ子^こ。

だから妾^{わたし}あ寸^す白^{ぱく}が起^{おこ}つて居^ゐるんで出^でられないからとか何^{なん}とか云^いつて子^こ、娘^{むすめ}が生^いきても死^しんでも構^{かま}はないか、あんなりな人^{ひと}だと、水^{みづ}野^のに思^{おも}はれないやうに云^いつて置^おいて呉^くれさへすりやあ其^{それ}で宣^いいんだよ。水^{みづ}野^の

に悪く思はれないやうにして置くと、また好い事があるかも知れないんだから。』

『ハイ、宣しうございます。ぢやあ水野さんて仰あるのは、畢竟お五十さんの御婿さんになる筈の方なんですか?。』

『ナアに左様ぢやあ無いんだよ、何でも無いんだよ。お五十には散々に嫌はれてゐるのさ。』

『へエー、何だか譯が分らないの。それぢや御師匠様の方でお五十さんの御婿さんになさらうと思つて居らつしやる方なの?。』

『い、え、左様といふんでも無いんだよ。妾あそんな餘計な世話焼きなんか嫌な事た子。』

『へエー、妙子エ。些も譯が分らないの。そしてその水野さんて怖い人ですか。』

『何だ子。もう男を怖がる筈のお前でも無いぢやあ無いか。高が書を讀んでるばかりの書生坊で、柔かいんだか硬いんだか何だか、恰で赤小豆の煮えこじけたやうな變な可厭な男さ。』

『へエー、兎も角もまあ行つてまゐりましよう。ぢやあ食後片付けもいたしませんか………』

『い、よ、お構ひでない、さあ早くおいで。今朝桂庵が婢を連れて来る筈だから。』

『ぢやあ、行つてまゐります。』

『氣をつけておいで。』

見舞品にや風呂敷包の小きを持つて、街へ立出でたる色白のお龍が、小ざつぱりしたる着付、すらりとしたる姿は、忽ち往來の職人の眼を惹きて、

『吉や、見ねエ、小股の切り上がつた好い新造だナア。』

『ウン、打殺めて遣りてえナ。』

と叫び出さしめぬ。

其五

我が五十子にさしたる異狀無しといふ尾竹が言葉に心安堵きて、徐々に我が寓に歸れる水野は、主人の吉右衛門が老實なる注意に任せて、其夜は早くより臥床に入りけるが、疲れきつたるが故にや却つて睡りかねたり。

一ト間を隔てたる茶の室の燈の下に、老夫は悠々と煙草を喫せば、孫娘のお濱はまた一心に何の書をか讀めるさまの、折々其の煙草管をはたく音、書を開け翻す音の耳に入る度、いと明らかに思ひ遣られつ、それに打交へて五十子が病、島木が情、お澤婆が憎さ、觀音堂の朝の感じ、椎の樹蔭の夕の思など、廻り燈籠の其影像の如く繰返し々胸に現はるゝに、幾度か幾度か寢返り打ち寢返り打て睡らんとしても睡られず、ほとく自ら困じけるが、やがて何時と無く心鈍りて、天地を薄霧に包み行かるゝが如き思をしつゝ、辛くも我我をおぼえぬ境に

入りぬ。

疲勞は名殘無く一睡に消えて、明けての其の朝は我が心のいと清々しきに、お澤が許に置ける婢のお鹽といふより、五十子が病も平なりとの報知をさへ得たれば、水野は此頃におぼれ無く氣合冴々しく、先づ島木に當て、の謝狀を書き、次に羽勝に當て、過ぐる日の會に不参したる理由を書きて我が心の變り無きことを云ひ遣り、また五十子が繼母のお關に對つては、五十子が病狀の概略と手當の模様とを知らせやりて、さて朝食を濟ませて立出でつ、常の如く正しくおのが職務を執りぬ。

此の日は曇りたれども風無く、五十子の容態は晝も佳く黄昏も佳かりければ、水野は愁の眉をも聊か開きて、憂きが中にも心樂しさをおぼえ、特に明日は休暇日の土曜といふに、ひとしほゆつたりと氣を寛げて、夜は靜なる草屋の秋に、熒々たる孤燈の前、机に憑つて端座し、萬斛の胸の思を忘れんとてや、一卷の書に精神を潜めて、つくぐと讀み入つたる其の風情は、雷電こゝに落ちかゝるとも露知らで過ぐす

べき状態ありさまにて、身みは深山しんざんの岩室いはむろに入定にふちやうしたる昔むかしの權者ごんじやの、形骸かたちくず壞れず
在あるが如ごとくに動うごかず、眼まなこは寒潭かんだんに影かげを宿やどせる霜夜しもよの星ほしと光ひかり澄すみつ、
世よに何物なにもののあるをも忘わすれて、花咲はなさかば咲さけ、花はなをも眺ながめじ、雪ゆきふらば
ふれ、雪ゆきにも興きようぜじと云いはぬばかりに念おもひもつぱらを專せんにし、平生ひごろの水野某みづのなにがしの性もち
質まへを現あらはして、凍こほりたる水みづの流れぬが如ごとく、いつまでもかくてあるべき
様子やうすに見みえたり。

其六

『せーんせい!』

水野は振り返りて見れば間の襖は開き居て、そこに身體を半分此方の燈に見せつ、お濱は我が方を打護り居たり。

『あ、吃驚した!。何だね?、お濱ちゃん、突然に其様な大な聲をして!。』

頭髮を結ばずして後方に下げたれば、ひとしほ兒童らしく活潑に見ゆる面の、小さけれど清しき眼を出来るだけ見張りて、

『あら、先生くつて幾度呼んだか知れやしませんのに、ホ、先生が又夢中になつて居らしたんだは。』

と、お濱は憚り無く事實を語りて、却つて水野を難じ反しぬ。

『左様かエ、それぢやあ私が悪かつた、堪忍く!。そして何か用?、用ぢや無いの?。』

『御爺さんが子、番茶ですが出來ましたから御飲りなさいませんか御茶
うけしはくり
受は柴栗の燂でたのぼつかりですけれども、御茶でもあがつて、そし
て餘り根氣を御詰めなさらないで、もう御休息なすつた方が宜うござ
いましやうツて!』

『左様!。そりやあ有り難う!。それぢや其方へ行つて御馳走にならう
が、栗はお濱ぢやんが剥いて呉れるのかエ。』

『いやよ、ずるい事子エ先生は。ア、好いは、妾が剥いたのは先生にあ
げますから、先生も妾に剥いて頂戴ナ。』

互に戯れて言ひながら、お濱は紐るやうに水野の手を取つて誘へば、
水野はまた扶くるが如くお濱をあしらひて、共に直に茶の間に至るに、
果して焙じたる茶の香は一室に充ち満ちたり。

三人は一ツ燈の下に鼎に坐りて、互に其の清らに和しき心より溢る、
何とは無しの微笑を取り換しつ、言はず語らずの中に何事も無き此夜
の静さを相悦べり。

もとより廣からぬ家の事なり、吉右衛門は二人の應答を悉く聞きた

れば、

『また先生に甘つたれるよ。先生に剥いて戴いて食べやうなんて、お前のやうに遠慮を知らない女は有りやあ仕ない！。ハ、ハ、ハ、さあお茶を御あげ、栗も汝巧く剥けるなら剥いておあげ。』

と、一寸眞面目には窘めながら、叱るが矢張笑顔にて、更に叱るにはならぬもをかし。

『イヤ、ほんとは栗は剥いて貰はなくつても澤山だよ。お濱ちゃん！。危い手つきか何かでもつて剥いて貰つて、指でも負傷をされやうもんなら大變だから子エ。』

かくいふ間にお濱は其の香ばしき茶を茶碗に注ぎて、一個は水野の前、一個は祖父の前に差し置けば、

『ぢやあ御勝手に、』

と、小き箆籬に入れたる栗實の今燂で上げしばかりと見にて猶其の皮の蒸氣に濕れるに小刀添へて盆に載せたるを主人は差し出しぬ。

『い、わ、先生！ そんな事を云つて！。澤山でも何でも剥いて上げま

すよ。危^{あぶな}つかしい手^てつきだなんて云^いつたから猶^{なほ}剥^むいてあげるわ。さうして若^{もし}萬^{じふとけ}一^が負^し傷^けを仕^して血^ちでも出^でたらば、その血^ちの着^ついたのもあげるからいゝわ。』

『あゝ、もうあやまつた、怒^{おこ}つちやあいけない。私^{わたし}が二^{ふた}ツ三^みツ剥^むいてあげるから中^{なか}直^{なお}り中^{なか}直^{なお}り!。』

『ナアに優^{やさ}しくなさると猶^{なほ}増^{ぞう}長^{ちやう}します。そんな下^{くだ}らない事^{こと}を云^いつたのをとツこに、指^{ゆび}先^{さき}が痛^{いた}くなつて困^{こま}る位^{くらゐ}剥^むかせて御^お遣^やんなさる方^{ほう}が宣^ようございますのに。ハゝゝ。』

『ハゝゝ、憫^{かあい}然^{さう}に!。お濱^{はま}ちゃんも御^お爺^{ぢい}さんに會^あつちやあ敵^{かな}はない子^こ。』

『いやもう然^{さう}様^{やう}ではございません、此^{これ}女^{おやぢ}には老^{はう}夫^{ふう}の方^しが始^し終^{まつ}弱^{じやく}らされま^よす。談^{はなし}話^わをしる談^{はなし}話^わを仕^しろつて強^せ請^がみまして。自^じ分^{ぶん}が散^{さん}々^{さん}に書^{ほん}を讀^よんで置^おいて、まだ其^{その}上^{うへ}に其^{その}の談^{はなし}話^わを仕^しろつて責^せめるんですもの。』

『あら御^お爺^{ぢい}さん、そりやあ過^こ日^ひの晩^{ばん}ばかりだは。ありやあ書^{ほん}がむづかし^{くつて}妾^{わたし}にやあ分^{わか}らなかつたからだは。』

『一體^{いったい}何^{なん}の書^{ほん}だつたの?。』

『いやな書だつたの!。』

『嫌な書てまあ、何といふ書?。』

『お爺さん、黙つて居てよ。云はないで居てよ! 妾あたゝ本家から手當り次第に持つて來たばかりで、別に彼書を持つて來たんぢや無かつたんだから。』

『ハテナ、匿されると猶聞きたいが何の書だらう?。』

『イヤ新しい活版刷の西洋綴の書にやあ彼様なものはよもや入つて居まいと思つて居ましたが。飛んでも無い書が入つて居ましたのさ。あの帝国文庫とかいふ大な本にでさア。』

其七

『いや古い本が新しくなつて澤山出るからね。左様して其の書は何と云ふ書だつたの?』

『ナアニ、私なんぞが面炮の出で居た二才の時分貸本屋で借りて讀んだことのある人情本で、初は甚く嫌はれて居た男の、其の親切が通じて思ひ思はれるやうになるといふ趣向を書いた下らないものでした。』

『ハ、ア、それぢやあ二筋道といふのぢやあ無いか、そんなら何様してひやくねんまへ百年も前の古いものだから、いくら總傍訓があつたにしても、こりやあお濱ちゃんには些も分らなかつたろう。私等にさへ明瞭とは解らないところがあるんだもの!。』

『ハ、ハ、彼様な書がまあ左様ですか子エ。成程いくら物を知つて居らしても御若いから何様も仕方ありません、御維新此方物事が全然異つて参りましたから子。さうすると昔の人情本の精く分るのは、此

席ぢやあ私わたしばかりといふ譯わけですか。ハ、ハ、ハ、老夫おやぢもたまにあ貴下あなたより強いところがありますカマ。

『詰つまらない自慢じまんを仕して！。をかしな御爺おぢいさん！。どうせ御大名おだいみやうの行列ぎやうれつなんぞ知しつて居ゐるのも御爺おぢいさんばかりよ。』

『ハ、ハ、ハ、また此この老夫おぢいさんをやりこめるよ。どうも左様さう此頃このころのやうに威勢いきほひが強つよくなつては敵かなはないナ。もう談話はなしも何も仕なてやらないからい。』

『い、わ、あんな昔風むかしふうの御談話おはなしよりも、一昨日をと、ひから讀よんで居ゐる魯敏孫ろびんそんの御話おはなしの方がいくら面白おもしろいか知しれや仕しない。』

『魯敏孫ろびんそんの談話はなしつて、あの漂流記へうりうき？。』

『え、左様さうよ、あの魯敏孫漂流記ろびんそんへうりうきよ。』

『左様さう！。さうして彼書あれが其様そんなにお濱はまちゃんには面白おもしろいの？。』

『何故なぜ？。先生せんせいにやあ彼書あれが面白おもしろくないの！。先生せんせいは魯敏孫ろびんそんを偉えらいと思おもはなくてはなかつて？。妾わたしあ眞實ほんとに彼ひとの人が好きすきだわ。海うみの中の小島こじまに唯一人ただひとりで、立派りっぱに生いきて行ゆくなあ偉えらいぢやありませんか。妾わたしあ彼の書ほんを讀よんで斯かう思おもつたわ。』

『おもしろい子エ。何様な事を思つたエ。』

『妾も何様かした譯で其の島へ行つてゐ、さうして彼の魯敏孫と一處に棲んで、荒い事は魯敏孫に仕て貰ふ代り、こまこまとした事は妾が仕て遣つて、晝間は一生懸命に働いても、夜や雨の降つた静かな日にはお話なんぞ仕て遊んで居たらば、ほんとに何様なにか面白からうかと思つたのよ。』

『ハ、ハ、。また下らないことを云ひ出したナ。』

『ハ、ハ、こりやあ面白い面白い！。ぢやあお濱ちゃんも魯敏孫の夫人になりたいといふんだ子。』

『いやな先生子エ。夫人だなんて！。妾あ他の夫人になつたり、他の良人になつたりする人は大嫌ひだわ。妾あ唯魯敏孫の朋友になつて見度いつて云つたのだわ。』

『ハ、ハ、成程、分つたよ。面白いねエ。つまりお濱ちゃんは女魯敏孫になりたいのだらう。』

『え、左様なのよ。ほんとに左様なのよ。眞青で際涯の無い大な洋の、

塵も何も無い奇麗な島の中で、あの男兒らしい魯敏孫と、たつた二人で働いて居たら、妾あ何様なに好い心持だらうと思つて居るのよ。』

『これですもの、どうも、呆れて仕舞ひます！。此女は取り分け無茶なのでございまいやうが、大なり小なり明治の生兒は、悉皆斯様なのでございまいやうか、まるで昔の女兒とは異つて居ります。二筋道の話をして聞かせるのも異なるものでしたが、あんまり何様いふ譯だ何様いふ譯だと煩く聞かれましたから、ほんのざつとした筋だけを話して遣りましたのに、碌にも遂げては聞きませんので、詰らないと一ト口に云つて仕舞ひましたのも、一體が斯様いふ調子ですから無理ありません。實に世の中は變つてまゐりました。』

『だつて祖父さん！。二筋道の御話は、嫌ひな人が好になるなんで、馬鹿げて居るんだもの！。』

『でも其が人情つて云ふものなんで、まだ中々汝達にやあ分らないんだよ。』

『そんな、嫌ひなものが好になる人情なんて、そりやあお行列の時分の

人情ぢやなくつて？。』

『生意氣な！。何が小児の汝なんぞに未だ分るものか！。』

『だつて幾歳になつたつて、妾にや分らないわ。妾や幾歳になつたつて、屹度お澤婆は嫌で先生は好きだわ。先生が嫌でお澤婆が好きにはなりやあ仕ないわ。』

其八

『ハ、ハ。然様ムキになつて老夫に食つて掛ることは無いぢやあ無い
か。もう可い、可い。とても老夫は汝にやあ敵はないよ。しかし汝
がもう二三年も年をとつて、物事が善く解つて來ると、お澤婆だつて
其様に憎くは無く思ふやうになるかも知れないよ。先生だつて過日ま
でとは異つて、今ぢやあもうお澤婆を憎いとばかり思つては居らつし
やらないやうなもの。まあ何とでも云つて居るが宣い、人情といふも
のは年齢さへ老りやあ解る事だから。』

我が此上無く好きなる其人の、我が此上無く嫌へる其婆を憎しとのみ
は思ひ居らじと云へるを聞きて、お濱は且は驚き、且は訝り、疑惑の
眉を可憐らしく顰め頸を枉げて水野の面を覗き込みつ……、

『ほんとなの？、先生。先生あんな意地惡な惡らしい老婆が好になつ
たの？。』

と、さもく然らずといふ答を聞きて、改めて又我が祖父に對ひて勝ち誇りたげに尋ねたり。

水野は先刻より小刀をもて心長く叮嚀に栗を剥きつゝ、既に世に老いたる翁と未だ世を知らぬ少女との、彼方は經驗に頼り此方は空想に任せて、相和せぬ談を交ふるをば、おのづから催さるゝ微笑の間に聞き居たりしが、恰も此時奇麗に剥き終りし一箇の栗を、そつとお濱が掌の上に載せてやりつゝ、

『なにも好になつたといふ事は無いのだけれども、そりやあ憎いとばかりも思つては居ない。考へて見ると今では憫然でならないやうな氣さへする位だから。』

と優しく答へて、

『お濱ちゃんだつて今に彼のお澤の腹の中が合點が行けば、彼婆を憎らしいとは思はないやうになるかも知れないよ。』

と語を足したり。

水野が此語は如何ばかり思の外なりけん、お濱は呆れたる眼を睜つて

黙りけるが、吉右衛門は待設けしやうに言を挿みぬ。

『それ御覽、老夫の言ふ事も嘘ぢやあ有るまい。好きなものが嫌になつたりもすれば嫌なものが好きになつたりもする、それは皆人情といふものが爲せるんで、まだ中々汝達にやあ分らない事なんだよ。』

お濱は祖父が言を聞きもせずして、今貰ひし栗を無邪氣に食べながら、何事を思ひ廻らせるならん、あらぬ方に眼を留めて一寸考へ居れば、水野は又樂しげに栗を剥き居り、吉右衛門は煙草を深く吸ひて緩やかに其の烟を噴き出し居れり。

静寂なりしはたゞ一霎時なりき。お濱は何を思ひ得しにや忽ち嬉しげなる聲に淋しさを破つて、

『ア、妾分つてよ、妾分つてよ。五十子さんが今に快くなるとネエ、屹度大變に先生が好きになるんでしやう、ホ、ホ、それが人情つて云ふものなんでしやう。左様ぢやあ無くつて?、え、祖父さん!。五十子さんが先生を大好きになる、ア、左様なると好いわ、早く左様なると、妾五十子さんを姉さんに爲つちまふから、先生が兄さんで、五十子さ

んが姉^ねさんで、さうして妾^{わたし}が其^{その}傍^{そば}に貼^ついて居^ゐるんなら、ほんとに何^{なん}様に嬉^{うれ}しいか知^しれや仕^しないわ。左^さ様なれば妾^{わたし}あ魯^ろ敏^{びん}孫^{そん}の朋^{おとも}友^{だち}になるのは
靡^よして終^{しま}ふは。』

と、偽^{いつはり}ならず悦^{よろこ}びて云^いひ出^だしたる、面^{おもて}は晴^はれやかにして月^{つき}は雲^{くも}なく、
情^{こころ}は優^{やさ}しくして花^{はな}に露^{つゆ}あり。

されどお濱^{はま}は又^{また}たゞちに、

『だけれど、』

と云^いひさして祖^ぢ父^ふの面^{おもて}を見^みたり。水^{みづ}野^のはお濱^{はま}の言^{ことば}を何^{なに}と聞^ききしや、何^{なに}
氣^け無^なき風^{ふう}に身^みをも動^{うご}かさず、ひたすらに栗^{くり}を剥^むき居^ゐたり。

其九

『だけれども何だエ?。』

お濱の言ひ澱みたるを怪みて吉右衛門は軽く問へば、

『だけれども、何だか知らないけれども妾にやあ子エ、何様も左様なりさうも無いやうな氣が自然にするのよ。五十子さんは病氣が癒つたらば子、遠い遠いところへでも行つてお仕舞ひなさりさうな氣がするのよ。而して其後で松ちゃんと妾とが一緒に泣くやうな事がありさうに思ふのよ。あの椎の樹の暗い蔭に、たつた二人で淋しく残つて、泣くやうな事になりさうな氣がするのよ。』

と近傍關はず言ひ放ちたり。

嫩き心の前後を顧ずして、おのが胸に浮めるまゝを憚り氣も無く云ひ出したる其は、もとより取るに足らぬ空想ながら、戀に心の弱れる人には、幸先あしき如是一ト言の如何ばかり氣に障り胸に徹へやしけん

と、吉右衛門はそつと水野を見るに、幸にして今の言には別に心をも動かさざりしやうにて、猶黙々と栗を剥きつゞけ居れば、やうやく自分も安き思ひして、

『イヤ、老夫には其様な氣は仕ないよ。五十子さんが遠いところへ行って仕舞ふなんて、そりやあ汝が魯敏孫とかの書を讀んだせいで、そんな下らない事を思ひついたんだらう。老夫はまた五十子さんが癒つて、松ちやんだの、汝だの、島木さんだのと、みんなが賑やかに遊ぶ事が、あるやうに思つて居るよ。』

と老人の思ひ遣り深くも祝ひ直したり。

賢けれども猶年若ければ、言外の其意は汲みて知るに由無く、

『イ、エ、ちつとも漂流記の故ぢやあ無いわ。過日松ちやんと二人で、あの椎の樹の蔭で話を仕た其時から、何となく其様な氣が仕はじめたのよ。御爺さんこそ屹度二筋道が鼻負だから、彼の本のやうになるとばつかし考へて居るんだわ。』

とお濱が負けじ心に云ひ争ふ時、今まで傍目訝しきまで沈着に沈着き

居し水野は、

『どつちでもマア宣いぢやあ無いかお濱ちゃん！。明日の事は明日のお天道様が見せて下さるわ子。ハ、ハ、ハ。』

と悲しげにも無ければ嬉しげにも無く、もとより可笑げにもあらぬ聲して笑ひつゝ、制し、又その掌の上に剥きたる栗一ツを、食べよとばかり優しく置き遣りたり。

『コレ何だ！。剥いたのを先生に戴くといふものがあるものか。』

と吉右衛門が眼の見つけて叱れるは遅く緩く、

『いゝわ子エ、先生！、戴いたつて。』

と云へる答は短く捷くして、栗は既に満面に笑を盛れるお濱が口裏に隠れたり。

されど何としけんお濱は忽地にして、其の美しき眉を顰むれば、

『いゝ氣味、いゝ氣味！。蟲が居たと見える。』

と様子を見て取つて吉右衛門は可笑がりて笑ひ崩れぬ。蟲はあらぬ筈なるを不思議の事かなと、水野は氣の毒さにお濱を打護れば、お濱は

また物を捜るが如くに水野が手先に眼を注ぎ居しが、やがて口の中の物を嚥み終ひて後、水野が手をば突然取りて、

『先生、負傷をして居てよ！。痛くなくつて。』

と示したるを見れば、左の拇指の其腹に、鮮血いさ、かにじみて臙脂微に湧けり。何に心をとられて、何時の間にか過つて傷つけて、しかも今までは知らざりけん、全く聊か此血の着きたるにお濱は栗の味を怪みたるなり。

『ア、穢い事をした惡かつた！。堪忍しておくれよお濱ちゃん。ほんとに毫も知らなかったのだから。』

『ナアニ毫も穢かあ無いわ。最初妾が血の着いたのをあげるなんて、縁起でも無い事を云つたから惡かつたのよ。』

瑣細の事なれど、今まで賑やかに語らひし談話の腰はこれに碎けて、何となく淋しく白けたる一室の内には、今沸り初めでも仕たるやうに鐵瓶の煮ゆる音の幽かに響き出して、靜まりかへつたる村の夜の中を、澁江村との境界あたりにや狗の吠ゆるが、べうくとして遙に聞えぬ。

其十

水野語らず吉右衛門言はず、瞬かざる燈火の光白々と冷やかに照らすところ、お濱が眼の前に動けるものは、水野が指端を巻きたる白紙に、知れるか知れぬほどづゝじりゝゝと、浸潤み出して廣がり行く鮮血の紅色のみ。

淋しさは今人々を包みぬ。べうくくと鳴く狗の聲は、また遙かに遠くよりこゝに聞え來ぬ。

お濱は終に淋しさに堪へかねてや、心細くなる面色して、

『あの狗はほんとうに可厭な狗子エー。過日先生が出て行つしやつた夜も、矢張り彼の通りの聲をして、彼の見當で鳴いて居たのよ。そして其時しーんとして聞いて居たらば、妾なんだか悲あしくなつて、大變に妙な心持がしたのよ。』
と云ひ出せば、

『また何か下らない事をいふ!。』

と吉右衛門は打消し、

『妙な心持つて、何様な心持つ?。』

と、水野は談話に話し甲斐あらしめんと意ばかりに、問はでものこととは思ひながら問ひ返しぬ。

『あの子、疇昔子、妾がずつと小かつた時——まだ三歳四歳で、妾の眞實の御母さんが生きて居た時に子、妾がお母さんに抱かれてうとくとして居ると、遠くの遠くの方でもつて狗の鳴いたのが聞えたのよ。まあ左様いふことが有つたのだと思つて頂戴よ。それで子エ、過日の夜あの狗の聲を聞いて思ひ出して見ると、あの狗はやつぱり其の時の狗で、あの聲もやつぱり當時の聲で、而して彼の狗の聲を聞いて、可厭に淋しいと思つた其の心持だと、思へてく仕方が無かつたのよ。』

『なんだエ、また下らない!。そりやあ氣の所爲といふものだは。』
吉右衛門がかく云ひ終れる時、狗はまた遙にべうくと鳴けり。

『ほーら又鳴いてよお爺さん！。氣の所爲ぢやあ無くつてよ眞實の事よ！。今鳴いた彼狗は何様しても過日鳴いたのよ。過日鳴いた彼狗はまた妾が大變に小かつた時鳴いたのかも知れなくつてよ！。而して何だか妾あ、妾の前の世といふ時にも、矢張り此様な淋しい晩に、やつぱり彼様な狗の聲を聞いて、やつぱり妙な心持が爲たやうな氣が仕てならないのよ！。あ、何だか妾あぞくくするやうな心持がして、變に氣味が惡くなつて來て堪らないのよ。あらまた鳴くのネエ、あ、厭だこと！。萬一すると眞實に前の世つていふものがあるかと思ふと、何だか怖いやうな氣がするのネエ。先生は前の世のあるやうな心持は仕なくつて？。』

お濱がかく云ひたる時の其の面は、僞ならず惑を帶び怖畏を帶びて、まことに前世といふもの、空しからぬを感じて、其の恐ろしさに覺えたるが如し。

實に思へば人は或事にあへる時、かゝる事には往時既に一度逢ひたることのありしと、思はるゝやうなる心地の爲る事も無きにはあらぬな

り。既に兼好は幾百年の昔に、

『只今人のいふことも、目に見ゆるものも、我が心のうちも、かゝることの何時ぞや有りしかとおぼれて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心地のする』

とは云ひたらずや。

生れぬ前の世の有無などは、もとより凡下の身の何とも知らねば、吉右衛門も横合よりは吻を容れず、水野は物を思ひて猶語らざる時、ふたゝびべうくと鳴く、狗の聲は、

『我は方々の前の世より既に知りたまへる狗なるをや！』
と告ぐるが如くに聞え來りぬ。

其十一

偶然ぐうぜんの事こととすればそれまでなれども、奇あやしとすれば奇あやしくもあるかな。
かつて我わが讀よみし書しょの中に「幻ヴァイジョンと謎リッドルと」といへる一章いっしやうありて、其その
幽怪神異ゆうくわいしんいの趣味おもむきは、骨身ほねみに沁しみて忘れ難がたく、今いまに鮮明あざやかに心頭むなさきに遺のこれる、
其それをお濱はまの知しるべくはあらねど、其その言いふところを聞きけば、何ぞ彼かれの
記しるせるところと相似あひにたるや。たゞ彼かれは考慮かんがへに老おいたる人ひとの言葉ことばにし
て、これは何なんの思案しあんも無なき少女こどもの言葉ことばなり、彼かれは先づ思おもひて後のちに狗いぬの
聲こゑを聞きき、これは先づ狗いぬの聲こゑを聞きいて後のちに思おもひ起おこせるの差異ちがひこそあれ、
おのづからに此この年としゆかぬ娘この、誰教だれをしへぬにかゝる事ことを想おもひ出いだせる不
思議しぎさ！。月日つきひは誰だれの所有ものとしも無なければ、仰あふぐものは皆みな其そのの光ひかりを見
眞理まことは智者ちしやの造つくれるにもあらねば、婦女童兒をんなこどもの胸むねにも浮うかみて、我われから
とも無なく如かく是さは悟さとれるにや。そもくまた佛陀ほとけの教法をしえに、いつとなく
耳みみも心こころも染そまり居ゐて、それより然さる事ことをも思おもへるか。

其の因つて出でしところは兎まれ角かれ、前の世有りや將有らずや、如何にと問はれては此の我もまた、少ばかりの智慧學問の、果して有りや又無しやと蜘蛛手に働く其の下蔭に、私に前の世を有るものゝやう思ふ心地も實は爲るなり。

迷信なり、迷信なり、古き迷信なり、智慧の光輝の及ばぬ限には、其の闇さにぞ有らぬ現像の思ひ遣らるゝ、其を前の世とは云ひならはしたるならずや。さはあれど、彼の書に、

『爾見よ、此の刹那を。刹那の此の關より彼方には涯無き路の長路ぞ遙に亘れるなる。刹那の關より此方にも涯無き路の長路ぞ遙に亘れるなる。』

思へ爾、起りし事のかつて此路に起りし事ならぬやある？。思へ爾、爲されし事のかつて此路になされしならぬやある？。思へ爾、萬般の事、萬般の物、此の路に上り、此の關を過ぎざりしものやある？。

物の能く此の路に上るものは、復た必ず再度此の路に上らん。事

の能く此の關を過ぐるものは復た必ず二度此の關を過ぎん！。

やをらく月の光に這へる此の蜘蛛！。爾思ひ得ずや此の蜘蛛の

過去既に一度世にありしとは。月の此の光！、爾思ひ得ずや月の

此の光の過去既に一度世に在りしとは。

此の關に立ちて囁きて、共に限無く究無きものにつきて囁ける

爾よ我よ我よ爾よ、爾思ひ得ずや我も爾も過去既に一度世に在

りしとは。

爾も我も、爾と我との前なる路の、長々しき迷の路に復現はれ

て、爾もふたたび行き我もふたたび行き、さてしも限り無く究み

無き輪廻の路に千度百度往き返らでは叶はぬにはあらずや』

とありしも思ひ出されて、水野は拭へども拭へども沸きあがる蒸氣に、

我が心の鏡の曇り果てゝ、明らかなり得ぬやうの心地したり。

今こゝに我には尊き今の世のあらずや。有りても可く無くて宜きは

前の世ならずや。輪廻循環の談は枝葉の事のみと、水野は強ひて思ひ

棄てんとしけるが、生憎に猶物の思はるゝを如何とも爲難くて、答へ

もせず獨り空想に耽る折しも、何をか吠ゆる彼の狗はまた、べうく
と同じやうに高く鳴けり。

狗の聲は淋しさの中より起りて淋しさの中に消えたり。水野は狗の
聲の消え終りし時、ふと眼をあげてお濱を見れば、お濱もまた狗の聲
の消え終りし時、物おもふ眼をあげて水野を見たり。

生れぬ前を思ひやる眼は、生れぬ前を思へる眼と、ひたりと相會つ
て、はつと別れぬ。水野は忽然として、我が前の世に、我は猶今の我
の如く、お濱は猶今のお濱の如くして、しかも我が五十子もまた今の
五十子の如く、我は今と同じく苦みあくがれて、甲斐無くも長へに忌
み嫌はれたりし、其の事のまざくと存りしやうに思ひて、總身の毛
根動けるが如く、慄然と情無く堪へがたき心地したり。

水野の容態の常ならぬを見て、吉右衛門は急に言葉を出し、

『ハ、、前の世は何様でも宣い、今夜を好く寝さへすりやあ好いの
だ！。三歳や四歳の時の事を誰が知つて居るものか。前の世のあるな
んぞと思ふのは、皆ほんとに氣の所爲に定つて居る。もうそんな下ら

ない事は止めて寝ると仕ましようか。寝ると私なぞあ前の世が出て來て、いつでも若くつて、禿げて居ないで、いゝ若衆ですからおもしろい。ハ、ハ、ハ、ハ。』
と高笑ひして一座を動かしぬ。

其十二

世界は紛々たり、萬馬埒の内を駈り、人間は擾々たり、群蟻碓の縁を
めぐる、と君が此の冊子に書きし言葉もおもしろし、いざや、此の秋の
氣は清み風は快ければ、家の矮きより出でゝ山の高きに登り、せめて
は一日を埒の内より逃れ、少時は碓の縁を離れて、笑ひ傲らんもまた
可からずやと、絶えて久しき日方八郎、友情は深き島木萬五郎、特に
は懐かしかりし羽勝千造さへ打連れ來りて誘ふに、日頃の崩折れきつ
たる心も、雨に會いたる旱歳の草の、蘇り立つ思ひ、一議にも及ば
ず立出でしが、天を摩し雲に冲る山嶽の景色の、雄々しく崇きを打望
みて辿りし半途に如何は仕けん、圖らず三人とは相失ひたり。

『水野一ツ、』

と號令聲の烈しく叫べるは豪放なる我が日方の聲なり。

『オーイ、水野、』

と爽やかに喚べるは快活なる我が島木が聲なり。姿は何處とも見えざれど、聲は前途の高きにおいて、後れたる我を励まし促し、來れよ、上れよ、進まざるやと、二人が心を焦立て居れるは、其聲の色にもありくと知れたり。

草萊も無ければ、樸櫟も無く、たゞこれ圓き石塊のみなる荒涼たる山路の爪端上は、歩み行くにいと歩み辛けれど、上らで止むべき我ならんやと、水野は唇硬く引締めて、執念くも強ひて上り上りぬ。

歩めば磧礫は我が脚の下につぶやき言ふ聲をなし、頑石はまた腹黒くも我を滑らしむ。されど上らで止むべき我ならんやと、水野はつぶやける磧礫の上に冷やかに闊歩し、滑らしむる頑石の頭をしたゝかに踏み壓へて、猶執念くも強ひて上り上りぬ。

時に何處より來りしともなく丈矮く足跛へたる妖精の、其の状怪しくして、たゞ是肉の團塊ともいふべく氣味惡くも重きが、何時か我が肩頭に上り居りて、怖ろしき其の力をもて壓しに壓しつ、止まれ、止まれ、休めよ、倒れよ、地に入れよ、奈落に歿せよと云はぬばかりに、

下方へ下方へと壓しつたり。

汝、我が魔、我が仇敵の重力の精！。汝千鈞の力をもて我を壓さば、

我また千鈞の力を以て汝に當らん。汝萬鈞の力をもて我を壓さば、我

また萬鈞の力を以て汝に當らん。汝は下さんとす、我は上らんとす。

我屈せず我撓まず、我我が努力を悋むこと無し、上らで止むべき我な

らんや、と傲然として重きに堪へつゝ、言葉をも出さねば手をも動か

さずして、水野は猶強ひて執念くも上り上りぬ。

妖精は水野が耳に貼きて、重々しき言葉の一語一語に、鉛の雫を頭腦

の奥に送り入るゝが如くに囁きて曰へらく、

『汝、水野！、おろかにも汝の思ひあがれるよ。汝、智慧の石！。汝、

おのが身を高くも高く投げ上げたる汝。されど、おろかや、投げられ

し石の、落ちて返らぬ事のいづくにかある！。おろかや汝、落ちて下

らん、今見よ落ちて降るべきなり。

汝、水野！、智慧の石！。汝弩より飛びし石、汝天つ星を碎かんと

して飛びし石！。汝、おのが身を高くも高く投げ上げたる汝。されど、

おろかや汝、投げられし石の落ちて返らぬ事の那處にかある！。おろ
 かや汝、落ちて降らん、今見よ落ちて降るべきなり。聞け、宣告はか
 くぞ、汝と汝の石を投ぐる行爲とよ。水野、汝高くも高く石を投げた
 るよ、されど其はたゞ汝が頭の上に落ちて返らんなり。』
 かく云ひ終りて言を絶ちしが、妖精は無言の恐しき力をもて、倒れ
 よ地に、沈めよ奈落にと、いよ／＼烈しく壓しに壓せば、水野はほ
 と／＼堪へざらんとしたり。

されど水野は更に屈せず、盤石虐げ壓すれども幽蘭死せずして、猶
 能く天に向つて芽を抽んづるが如く、昂々然として頭を擧げて、執念
 くも強ひて上り上りけるが、見れば路の邊に病める女ありて世にも痛
 ましく悩み伏したり。如何なる人の道行き患ひて、かゝる山路にはあ
 るならんと、いぶかしみて不圖眼を留むれば、彼方も人ありと知つて
 此方を見かへりたり。見ざりし程こそ心も常なりつれ、相見ては互に
 ハツと驚きて、彼方は面を掩ひ、我は胸を轟かす。其人は少時も忘れ
 ぬ我が五十子なれば、何として此處にはと先づ走り寄つて、慌て、扶

け起さんと其手を執れば、我が手に他の手の觸るゝや觸れぬに、彼の
妖精は異様に高笑ひして、

『見よ、地より出でしものよ、地戀しきかよ。我見ん、石の落ちて那處
に至るかを。』

と勝ち誇れるが如く嘲み罵る其の聲耳に徹する途端、忽地に身は鉛よ
りも重くなりて、大地は雪より柔になり、見るゝ地窪み身は陥つ
て、踝沒れ、脛沒れ、膝皿沒れ、高腿沒れ、腹沒れ、胸沒れ肩沒れ行
きて、石人の水に沈むが如くに、全く自ら支ふるに力無く、

『水野ッ』

と呼ぶ日方の聲、

『オーイ、オーイ、』

と喚ぶ島木が聲を遙に／＼聞きながら、次第に現世には遠ざかりて、
漸く奈落の底に沈み行かんとす。今は氣も心も消え／＼になりて、思
はずも南無と叫びかゝる時、駈けつけ呉れたる我が羽勝の、ムヅと我
が頭髮を引攪みて、鐵腕の力の恐ろしく凄じくも、ふたゝび我を光あ

る世に飛礫の如く投げ上げくれたるが、投げられて空を飛べる身の呀
と驚きて我に返れば、これは是思ひ寢の惡夢にして、滿身の汗絞るが
如く、胸は今猶浪打つて騒ぎ、枕頭の燈は青くして幽に、恰も鳴り出
せる茶の室の時計は、一ツ、二ツ、三ツにして復默したり。

吉右衛門は眠れり、お濱は眠れり、日方も島木も將羽勝も今は思ふに
睡れるならん。憎きお澤婆も睡れるならん。可憫き松之助も睡れるな
らん。醫も睡れるならん。看護婦も睡れるならん。覺めたるものは我
のみなるが、たゞ我が病の蓐に悩める五十子は、睡れりや如何に、穩
やかに睡れりや。

恐ろしき夢に魘はれし水野は、夢の根基となりし宵の談話を獨り靜に
思ひ返して、さまざまに思ひ亂るゝ折しも、いつまで睡らで吠ゆる彼
の狗なるぞや、また彼の狗の聲はべう／＼と聞えぬ。かゝる夜深きに
何をか見て吠えし、人の魂魄にても飛びたるかや、あゝ。

其十三

何となく五十子が上のあやしく氣にかゝりて、水野は睡らんとしても
 また睡られず、若や彼の人の病狀に變などありて、今を生死の瀬戸と
 苦しめるにはあらずや。此の一日は快きやうなりしが、此際數日を病
 の峠とは、尾竹も云ひたるところなれば、取り別けて心元無く思は
 るゝかな。狗の長吠する時は凶き事ありといふ俗説も、取るに足らぬ
 迷信なりとは知りながら、さし當たつて今は忌はしくぞ覺ゆる。熱の
 高きには心も亂れて、夢は駈け回る曠野の夏に、火炎と熱き息を吐き
 つゝ、清水尋ねわづらふ思に悶え、夜具に身を餘して我知らず呻く、
 其の苦しみの經驗は我も知れるが、我が五十子は今さる事もなくて、
 幸にすやすやと睡れりや如何に。安らかに病人の睡り居らば、それ
 より頼もしき好き事は無けれど、或は又ほそぐと癯せし手先の、物
 あはれにも枕の端ななどを力草に執り絞りて、苦しさに堪へ堪へし果

ては、睡りも睡り得ず、醒めも醒めやらずなりて、ただうつら／＼と
 病苦に責められ、一半は現、一半は夢の、精神は幽に消えかゝりて、
 現世冥途の境界の上に、魂魄迷へるやうにあらば、あゝ如何にせん、
 如何にせん。おもへば何となるべき彼の人の上、我が上ぞや。前の世
 の有りや無しや、それも知らず、後の世の有りや無しや、知らねど、
 若し今彼の人の此の世を去らば、我が身は此世にも遺るべけれど、我
 が魂はおのづと他に引かれて、必ず冥途に去るべければ、其の後の世
 を思ふにつけても、此の世に我の現れ出でしは、此の世に彼の人の出
 でしがためかと、思ひやらるゝ心地のして、遠く邈焉なる前の世にも、
 彼の人は今と同じく病に悩み、我は今と同じく戀に泣きし悲しきあり
 さまの、あり／＼と此の心に浮び來るなり。よしや、前の世の縁の悲
 しくもあれ、此の世の縁もまた果敢なくもあれ、眞實に前の世の存り
 もせよかし。前の世眞實にあらば後の世もあり、其のまた後の世もあ
 らんに、せめては其を頼みにはして、長く盡きざる我思ひの如何にか
 成り行く涯を見ん。あゝ其につけ此につけても、如何なれば此の胸の

如^か是^こは騒^{さわ}ぎて、動^{どう}悸^きの浪^{なみ}のたゞならず打^{うち}つ事^{こと}よ。あゝ何^{なん}となく心^{こゝろ}悲^{かな}し
 く物^{もの}恐^{おそ}ろしき感^{おもひ}のするかな。若^もしくは彼^かの人^{ひと}の何^{なに}とかなせるにはあら
 ずや、居^いても立^たつても心^{こゝろ}の安^{やす}からぬ。あゝ何^{なん}とせん、あゝ何^{なん}となさん。
 と、とつ置^{おい}つ思^{おも}ひ迷^{まよ}ひしが、此^{こゝ}處^ちにありて空^{あだ}に悶^{もだ}えんよりは、其^{そこ}處^ちに
 至^{いた}りて、狀^{ありさま}態^{うか}を伺^{うか}はんと、終^{つひ}に衣^いをかへて立^たち出^{いで}でたり。
 風^{かぜ}も眠^{ねむ}れり、石^{いし}も眠^{ねむ}れり。誰^{だれ}かかゝる時^{とき}戸^と外^{がへ}に在^あらんや。戸^と締^{しま}りの如^い
 何^かにすべきも打^{うち}忘^{わす}れて、ふら／＼と立^{たち}出^{いで}でたる水^{みづ}野^のの道^{みち}行^ゆく様^{やう}子^すは、
 たとへば影^{かげ}のみの人^{ひと}の如^{ごと}く、現^{このよ}世^よのものとも思^{おも}はれざりしが、水^{みづ}野^のも
 既^{すで}に此^{このよ}世^よを忘^{わす}れて、空^{そら}は今^{いま}曇^{くも}れりや星^{ほし}ありや、闇^{やみ}なりや、將^{はた}月^{つき}ありや
 も、全^{まった}く心^{こゝろ}には留^{とど}めざるなりけり。

其十四

戸に尾栓せで濟む村居の心安さに慣れたりとは云へ、所以知らぬ
 動悸の烈しさに其の人の氣づかはしくて堪え兼たりとは云へ、時なら
 ぬに飄然と立出でし水野の振舞は、日頃にも似ぬ仕業なりしが、老の
 眼敏き吉右衛門は、先刻より水野が思ひあまりて、我知らず長吁短歎
 する其の聲を聞きて既に覺め居りつ、如何ばかり戀の山路の嶮しきに
 惱んで、若き人の可憐心を傷つけ血を流す事ぞやと、ひそかに憐み居
 たりしかば、ごとくと雨戸引き明けて外に出づるをも、一度は咎め
 んとしたれど思ひ返して咎めず、大方は病める人の上の氣にかゝりて、
 其の様子見にと行くならんを、たゞ心儘ならしめんこそ慈悲なるべけ
 れと、睡れるを装ひて咳嗽もせざりけれど、はや水野が四五間も遠く
 去りしと覺しき頃、吉右衛門は別に吉右衛門の思ふところありてや、
 吾が傍の床に臥したるお濱の寢顔の、小さき洋燈の光に照らし出され

たる、罪も無く美しきを見て、軽く歎じたり。

水野は覺めながら夢路を辿るがごとく、天に明無く地に色無き中を、何者にか肝膽に糸つけて牽かるゝやうなる云ひがたき恐ろしさ苦しさを覺えつゝ、例のお澤が家の前にさしかゝりたり。心に眼あればこそ物は見ゆれど、眼に力は無くして知らぬ相は見えぬ黑暗々たる眞の闇に、水野は歩をとゞめ眼を凝らして窺へば、豫て知れる彼の寒竹の藪疊の開けたる間より、圃の先に當りて屋の棟の低きが、曇れる空に微に透きて立てり。

記憶あればこそ辛くも歩かるゝなれ、地の底の磐の内にも入らばかくもアランかと思はるゝ闇の中を、心あてばかりに此方と進み行きて、漸く草屋の横を過らんとする時、萬籟死し盡せる今突然として、

『ぎりぎりッ、ぎりぎりッ。』

といふ怪しき響したり。

鳥にあらず鼠にあらぬ其の音の、ヤル何とも云へず物忌はしきに、思はず慄然として耳を立つれば、聲は我近き荒れたる家の内より來りて、

そもく何の夢にか怒れる、彼の鬼の如きお澤婆の、笑顔に見てさへも凄じく今猶残れる彼のまばらなる長き其齒を咬み鳴らせるにて、其音につゞいて又更に、

『ウーン、ウーン。』

と寐唸りする其聲は恨むが如く詛ふが如く、満腔の怨毒を噴き出して、闇きに遊行するあらゆる惡鬼を喚び集へんとするにも似たれば、水野は彊が上にも心惡くおぼえて、止めよかし、止めよかし、と急に念じたれど、

『ぎりぎりッ、ぎりぎりッ。ウーン、ウーン。』

といふ聲は執念くも起つて、我が腦後に襲ひかゝるがごとく逼るに、身も世もあらず厭はしく思ひて、追はれ心地に歩み去らんとする折しも、忽ち我が五十子の家の其の方より、ひらりと物の光りの此方に射し來りたり。

其十五

漆と黒き眼前の闇に、ぱつと一ト刷毛の光線の散つたるを、いづくよりぞと水野は見れば、人の歸るを送り出すと見えて、五十子が家の戸の今引開けられたる其處より洋燈の光の晃然と射したるなり。

問はでも知るべし、病者ある家を、如是時刻に人の出入りする事、必ず凶ありて吉ある事無し。我が五十子は抑如何にかしたる。何と無く堪へ難き心地の爲て、我が此處まで獨り迷ひ出で來しも、世にいふ蟲の知らせしといふ事か、たゞならず動悸の打ちしも思ひ當たりたりと、先づ胸を轟かして彼方を見るに、やがて戸はまた引寄せられて、遠目の定かならねど四ツ目菱の紋つきたる提灯を片手に、片手には小き革靴を持ちて、ぱくく／＼と此方に歩み來れるは疑もなく尾竹なり。

さてはいよく／＼五十子に變のありて、夜半の扉をたき招び迎へたればこそ、尾竹の先刻に來りて今歸るなるべけれ。歸るは吉くてか將凶

くて歟。嗚呼、五十子の病は測るべからずして、尾竹の技倆は我よく
 知れり。嗚呼、人の命！、定まりたる天の數は今見ゆるかや！。他を
 も死なせし、我も死なじと、一念の火を燃やしとも空となつて、他も
 死に、我も死に果てゝ、冷たき灰となるべき時の、終に眼の前には來
 りたるかや。前世も知らず、後世も知らねど、此の今の世は、これま
 でなりや、嗚呼残り多くも恨多くも、これまでなりや、これまでなり
 や。と歩まん意も無く言はん意も無くなりて、水野は地の上にたゞ苟
 且に立て置かれたる一つ杭の如く、少時茫然として立ち居けるが、や
 がてぼたりと倒れんとしたり。

されど水野の自ら支へて、辛くも思を轉じたる時、尾竹は間近く進み
 來りしが、思ひもかけぬ闇の眞中に人の佇めるを認めつ愕然として驚
 き、提灯の燈に此方をすかし見、

『み、み、水野さんですか。』

と顫へ聲に尋ねたり。

凡人の眼つき、凡人の口つき、凡人の額、凡人の肩、身長も普通なれ

ば、態度も普通にて、何處に一つこれといふところも無き其の尾竹の
深くも恐怖に魘はれたるにや、眉を尾下りにし、眼を壺深くして、頸
を締めつゝ此方を見たる其の怯れたる状のいと醜きが、提灯の火影に
ぼつと見えたるは、今といふ今のみ始めて平凡ならず水野が眼に映
りぬ。

其十六

尾竹の聲は闇の寂寥に響きて、愚しくいと大きく聞えたるに、水野は
何となく厭はしく感じつ、こゝにて又我と此男との問ひつ答へつせ
ば、其の聲の彼家の人々にも聞えんことを忌はしく思ひて、言葉は無
き舉動ばかりに尾竹を誘ひ、突と外の方に去らんとすれば、尾竹は慌
てゝ先に立つて、手に持てる提灯に足元を照らしたり。
共に歩むこと四五歩ならずして、彼のお澤婆が家の内より、

『ギリギリッ。』

といふ聲先づ聞えて、次いで、

『ウーンウーン。』

といふ寝惚りの聞ければ、尾竹は思はずもピクリと顫へて、手にした
る提灯に烈しき浪を打たせつ、
『ナ、何でしやう彼の音は？』

と振り返つて水野に尋ねたり。

されど水野は尾竹が此の言葉を、閑事なりと云はぬばかりに、たゞ無言をもてあしらひ棄て、おのが歩まんとする方に歩み去りながら、

『岩崎は何様でございます、よろしいのですか?。』

と先刻より此の醫の様子に大事無しとは察したれど、問はんとして一刻も忘れざりし問を發すれば、眞情餘りし其の言葉の自然と威あるやうなるに尾竹は壓されて、今我が口に出したる問の答を得ざるをも、また水野が如何なれば如是時分に此邊には佇み居たるやと尋ねまほしく思ひ居たるをも盡く皆忘れ果て、

『いや御尋問が無くても夜でも明けましたら一寸上つてなりと申上げやうと思つて居りましたが、看護婦の注意からして御使があつたので、今しがた出て見ると、實は甚だ面白く無くなつて居るのです。勿論今が今といふやうなことはありませんが、全體が丈夫づくりといふ方では無いのですに、たゞ氣性が確乎として居らるゝばかりで、今までは病苦に負けずに居られたところ、何様して、精神作用だつて限のあ

るものですもの、連日の高度の熱では耐りません、とう／＼堪へに堪へきれなくなりましたのです。さあ左様なると其と同時に、自然と来て居た衰弱が、俄然と外に現れてまゐりましたので、一體に何處も彼處も悪くなつて來たといふやうな譯です。しかし幸特に肺が悪くなつたとか心臓が悪くなつたとか云うのではありませんから、まだ／＼十分有望なので、云はゞ彼様いふ大病にかゝつた患者の、何様も經過しなればならぬ已むを得ざる場合なのです。』

と一半は水野を慰め、一半はおのれを辯護するが如く、素人解りすべきことを條理賢く述べたり。

水野は五十子の容態あし、と聞きて、さてこそと胸を躍らせつ、まず悲しくも腹立たしきおもひして、はや苛々と心は烈しくなり、此の醫者の技鈍きを怒るとにはあらねど、其の言葉巧なるが小憎らしくて、『已むを得ざる場合で！。成程御道理です、已むを得ざる場合で！。まかり間違つて何様なりまして、勿論みんな已むを得ざる場合ですナ。』

と、一ト當當つれば尾竹は驚き、平日は物柔かにして斯様は無かりし人の、何たる氣の焦れかたぞやと呆れながら、

『左様御取りになつては困ります。わたくしが責任を逃れやうとして申したのではござりません。わたくしが其様なもので無いことは御承知でござりまじやう。小生は小生の及ぶ限りの力を盡して居りますのです。』

と疾辨に言ひたる其聲は眞に切なげに泣きさうにも聞えて、技こそ庸常にして人に挺でもせざれ、心は正直にして自ら欺かざる君子なるを示せり。

水野は流石にこれに氣の毒になりて、

『や、先生、御氣に御留めなすつてはいけません。先生の御誠實な事はよく存じて居ります。猶此上とも何分御願ひ申ます。』

と和らかに云へば、

『左様仰あつて下さればまことに満足でございます。如何様にも此上猶盡力を辭しませぬ。併しなかくの重體の事ですから、先日學士に

も御見せになつては?、』

と腹の底に毒無き人の、はや胸もとにも蟠りなき挨拶なり。

『非常に悪い方へ進みまして?。』

『いや、今いけないといふのでは無いのですが、何様も前申した通りですから相良さんにも………如何にも衰弱が急に甚く現れて來ましたから。』

と聞くや否や水野は心中に疑ひて、衰弱は漸々にこそ來るべきなれ、急に甚く現るゝものにや、醫ならねば我知らねど、と一度は迷ひしが、惑ひて益無ければ、一瞬に其の心を決して、

『勿論直に來て診て貰ひましやう。』

と云ひ終わつて一禮するかと見えしが、忽ち其姿は闇に隠れて眞黒の中に走せ去れば、尾竹は提灯を手にしたるまゝ、うつかりと路史に獨り立つて、黒白なき暗さに水野の下駄の音の、早くも隔たり行く方を見えもせぬに永く見送ったり。

其十七

一度あることは二度ありといふ世の諺の人を欺かず、水野はふたゝび熬りつくが如き憂を抱いて南方に走りけるが、闇夜の道の抄取らずして、その相良が家を訪ひし時は既に遅く、舎の内はまだ燈火無くてはの頃ながら、戸外は既人顔定かなるほどになりて、かつて島木の寓より歸るさに訪ひし時と同じほどの明るさとはなり居たり。

たゞかれて怒らぬものは醫師の家と、憚りも無く打敲けば、思ひのほかに早く返事して、立出でたるは前の日窘めやりたる彼の盤臺面の書生なり。我を侮りがたき男と思ひ込みてや挨拶も慇懃に愛想よければ、おのづから物も云ひ易くて、わざ／＼來れる所以を手短に述べ、さて先生の御來診をと乞へば、書生は困りきつたる顔つきして、

『實は先生はたつた今出て行かれたのです、やはり病家の急の迎へを受けられて。しかし行かれた先が餘計遠いところでもありませんから、

二時間も立つ中には歸らるゝでしやう。歸られたら必ず左様申しまして、屹度回診になる様に致しませう。』

と云ひ終りしが、水野が面に難色あるを見て、

『勿論先生の歸らるゝまで、此處に御待なすつていらしつて、御直接に御頼みなさるとも其は御随意です。』

と云ひ足したるは、よく／＼此の意地強き客の執念きに凝りて、ふたゝび前の日の如く其の怒りを惹く事などの無からんやうにと、勉強して意を用ゐたりと見えたり。

書生の言へるところは全く偽ならず見ゆるに、世に行はるゝ醫の忙しくして暇無きは如何ともすべからざることながら差當つて今を何とせんと、水野は礫と行き詰りて、あたかも帆船に舵を失ひ、奔車に轆を抜かれるごとく、言はんかた無き心細さを覺えて、惘然として言も無く物を思ひたり。

書生は水野の容子を見て氣の毒さに堪へでや、

『遠路のところを御來臨になつたのに生憎で、如何にも御氣の毒でござ

いますが、必ず小生は左様申しまして、是非とも回診になるやうに致
 します。時間のところは兎に角、必ず診てあげますことは診てあげ
 ますやう、これは小生が御受合申して左様いたしますから。』
 と、前の日とは打つて變つて親切に言ひ呉るゝ、その言葉には力あ
 り、その様子には勢あるに、今は此の男を頼まんより他の道なければ、
 水野はいと懇切に頼み聞えて、是非無くも元來し道へ引返したり。
 戀人の病は前の日より凶きかたへ進めるなり、頼む醫は他に出で、家
 にあらぬなり、夢見は忌はしかりしなり、胸は騒ぎしなり、若やと思
 ひしことは不思議にも中りしなり、弱りかへれる五十子に一應の手當
 して歸れる尾竹よりは心にかゝる言を聞きしなり、氣味あしき狗は前
 表かとおぼしく吠えに吠えしなり、無心のお濱は我が五十子の遠方へ
 行かんことを無心に云へるなり、氣にかゝることのみの何ぞ多きやと、
 水野は此等の事を思ひつゞけつゝ、恰も前の日と同じ曉の、今日は風
 無くて曇り空の少し闇きのみが異なる同じ時刻に、同じく人通り猶少
 き並木の道を首を垂れて力無く行き盡しつ、吾妻橋の方に去らんとす

る時、突然として人の我が手を執るありて、しかも執られし我が手首に、ざらりと物の觸りたれば、何ぞと驚きて顧みるに、骨露に萎び枯びて冷き細き手に我が手は捉へ居られて、其の手首に掛けられ居たる黒き木の數珠の我が手に滑りて落ちかゝれるなり。

其十八

『あなた！。いけません、いけません、信を御冷ましなすつては！。此處を御通りになさりながら、御参詣もなさらないなんて、第一勿體無い事ではございせんか、さあ、御一緒に詣りましよう』
と遮に無に我が手を牽きに牽くは、過し日淺草寺の御堂に普門品を誦して、我と共に痛く書生に罵られたる、彼の頭髮薄く額脱け上がりて鼻細き貧相の老人なり。
一樹の蔭に憩ひ一河の流れを掬ぶも他生の縁といへば、まして一堂の内と同じ御佛を頼み奉りて、しかも假初ながら言葉をさへ交したる中なれば、呼びかけられたりとして怪しうはあらぬながら、手を執りて我を伴はんとする舉動の、馴れくしきに過ぎたるやうにも思はるゝに、水野は一度は之を異みしが、たゞくおのが信心の同行とせんとするほかに、何の念も無かるべき其の道理らしく眞面目らしき顔の他事

無く正直氣なる様子を見ては、何の故とは無けれど此の老いたる人の意に背かん氣にはなれずして、引かるゝが儘に無言に従ひ行けり。

『世が澆季になつて居りますのですもの、御同様に鄙しい心ばかりが先に立まして、兎角信心の起らないのも是非がございまして、眞に淺ましい口惜しいことでございます。もう五六十になりまして、いろ／＼の經驗を積んでまゐりました私等のやうな年齢のものでさへ、何ぞにつけても怒つたり泣いたり致しまして、彼奴が憎いの恨めしいのと、詰らない修羅を燃やしまして、信心氣一方にばかりにはなつて居られませんのですから、御若い貴君方ではなかく何様いたしまして、幾許御發明でいらつしやいまして、何事も佛陀様に御任せなすつて安心して御在なさるといふ譯にはまいりますまい、御信心も自然御冷になつて、他の方へ御紛れなさるのも御無理はございせん！。併し貴君はまあ御頼もしい方で、今の御若い方にも御似合ひなさらずに、一心になつて御信心なすつた過日の御殊勝さには、つくぐ私も感心いたしまして、斯様申しては諛辭のやうでをかしうございますが、

宅へ歸りましてからも、あゝ未だ世の中は闇にはならない、あゝいふ
 若い方も稀には居らつしやる！、考へて見れば自分なんぞは罪障が深
 くつて昔生れの身でありながら、何十年といふものを惜しい欲しいの
 欲ばかりに過して、夢のやうにたゞ暮した末、神様佛様の有り難いこ
 とを知つたのも、やつと此の四五年ばかり以來の事だつたが、御若い
 のに彼様いふ良い方もある！。自分の彼の位の齡の時に比べてもよく
 解ること、二十四五や三十前後の勢では、鬼が出て攫み合はうとい
 ふ盲元氣で、神様も佛様もありは仕ないのに、彼の方は嘘では出ない
 涙を溢して、一心になつて祈つていらつしやる！。御父様が御病患
 でゝもあるか、御母様が御悪いのか、それとも何様いふ事で思ひ餘つ
 て、丹精を御凝らしなさるか知らないけれども、あの御年齢で既神佛
 の有難い事を知つて居られるのは、あゝ稀らしい殊勝なかつた、眞
 實に貴君の事ばかり思つて居りまして、何だか私は急に一人の、私
 の味方が出来たやうな氣が致し、これも觀音様の御引合せ下すつた菩
 提の同行とでもいふのであらう！、と勝手な考へではございますが思

ひ詰めまして、明朝御目にかゝつたらば、も一度御話して見やう、老
 人の事ゆゑ御嫌ひなさるか知れないが、どうも御話を仕て見たらば、
 屹度私の力になつて下さる俠氣の方だらう、といふやうな心持が仕
 てなりませんでした。ところが明朝參つて見ると御參詣はありませ
 ん、その次の日も御參詣がありません。ぼろり／＼と涙を落として眞
 になつて何事かを願つて居られた彼の方が、不信心になられる理由は
 無いが、あゝ何といつても未だ御若い！、下らない惡魔外道の馬鹿書
 生が、愚につかない事を饒舌つて居たが、若や彼言が毒になりは仕な
 いか按じられる、何といつても未だ御若いから！、と大きに彼の書生
 等を憎くおもつて居りました。』

其十九

『何様致しまして、貴君、悪所へ参りました歸路に遠慮を致すことも存
 じませんで神社佛閣の境内へ入りますやうな不心得なものに、何が一
 つ満足に世の中の事が解りまじやう。みんな彼の先日の書生の連中
 は、自分の身體の背後から親や兄の氣息が掛つて居ればこそ高慢な口
 を利きまして人も人が赦して置いて呉れるのだといふ事も知りません
 で、定りきつた譚語を申しますが、畢竟彼様いふのは、親や兄の有
 り難い事さへ解つて居りませんのでも、中々神佛の有り難い事な
 んぞの解らないのも、些も無理はないのでございます。それでも當世
 のものゝ事でございますから、理屈は立ちさうなやうな理屈臭いこと
 を、曲りなりに牽強て申しますので、一寸聞けば道理なやうなにも思
 はれます。そこで穩和いものまで咎き込まれて、やれ神様を敬ふ
 のは愚迷だの、佛様を崇めるのは卑劣だのと、傍から始終云はれつけ

ますと、矢張やつぱりいつか其氣そのきになつて、其實そのじつ神様佛様を頼たのみたいやうな氣
 のすることは有あつても、神様佛様をいぢりまはすのが、何なんだか意氣地いけぢ
 の無いやうな羞はづかしいやうな氣きが仕して、それで神様にも佛様ほとけさまにも、お縋すが
 り申まをさないで一人ひとりで下くだらなく苦くるみきつて居をります。それが當世たうせいの一體いつたい
 の風ふうでございます。それにまた何なんとか彼かとか云いはれて居ゐらつしやる先
 生せい方がたでも、正直しやうぢきな方かたや良よい方かたばかり有ありは仕しません。随分ずぶんわざと若わか
 いものの氣きに入るやうな事ことを仰おつしあたり人ひとを吃驚びつくりさせるやうな事ことを仰おつし
 ったり、中なかには評判ひやうばんを取とらうの目論見もくろみやら、面白おもしろづくの好奇心ものずきやらか
 ら、神かみも佛ほとけも耶蘇やそもいけない、酒さけを飲のんで管くだを巻まいているのが一番好いちばんい
 い、女をんなと戯ふざけてゐるのが何なんよりだといふやうな大變たいへんな事ことなんぞを仰おつしあ
 る方かたもあるさうで、左様さうで無なくつてさへ暴あばれたがる若わかいものが、其様そのん
 な事ことを聞きくのですから堪たまつたものではありません、蝮まむしを食くつた軍鶏しやもの
 やうに氣きばかり強つよくなつて、世界せかいは何なんでも勝手かつての仕勝しがちだと思おもひまして、
 相手あいてさへ見みりやあ雞距けづめを打うち込みたがります。過日このあひだの書生しよせいなどが其例それ
 でござりまして、吾家わたくしどもにも一人ひとり、似にたり寄よつたりの難物なんぶつがござりま

する。かういふ世間でござりまするのに、たま／＼貴君のやうな方を
 お見受け申したのですから、失禮ながら御同年位の吾家の豚兒めと思
 ひ較すにつけ、ほんとに御懷しく存じましたが、其の貴君が其限り御
 見えになりませんので大變氣になつてなりませんでした。御若いから
 彼の書生の云つた事なんぞも御耳に可厭でしたらうが、御迷ひなすつ
 てはいけません。氣になすつてはいけません。御信心さへ御續けなさ
 れば御利益は分つて來ます。私なども二三十年も前は矢張り彼の書生
 でございましたから、彼の書生も二十年三十年経ちましたら、私にな
 りまして、御利益の力が身に沁みるやうになりましたやう。一つ家の婆
 さんだつて發起致しますのですもの、何年洋杖を振り廻して威張つて
 居られるものでございませうやう？。虚言や偽言は申しません、私等
 は散々世の中の憂い辛い川を越して參つて、此岸の信心の有り難い
 事好きな事を見て居りまするので、彼等は未だ川の中へ入り立な
 元氣任せに立泳ぎを爲たり拔手をきつたりしながら、何だ對ふ岸に上
 つて居る奴等の意氣地の無さと申して居るやうなものでございます。

疲勞くたびれたり、こむらが反かへつたり、流れの強いところへ出たりしますれば、此方こちらの岸きしを見て泣なかずに居をりません。其時そのときになつて前に此方こちらに居たものゝ心持こころもちが解わかります。あれ彼の銀杏ぎんなんといふものは公孫樹いそふの實みです。榧かやの實みでも無ければ又橡またどちの實みでも無く、誰だれが何なんといつても公孫樹いそふの實みです。これに理屈りくつが何有なにありましよう、もとゞ公孫樹いそふから出たものですもの！。神様佛様に縋すがる私共わたたくしどもの此の心は、何の心でござりましよう！、人の心です。禽の心でも無ければ獸の心でも無く、誰が何といつても人の心です。これに理屈りくつが何有なにありましよう、もとゞ人が有つた心ですもの！。吾が子の可愛かはゆいのに理屈りくつも無く、思ふ人の大切だいじなのに理屈りくつも無ければ、神様佛様に御縋おすがり申すのに、何の理屈りくつも無いけれど、それも眞實まことなれば此も眞實まことで、理屈りくつも要らないほどの眞實まことです！。あゝ、いけません御迷ひなすつては！。いや御迷ひなすつてはいけません貴方あなた！。公孫樹いそふの秋あきには銀杏ぎんなんが生ります、榧かやの實みも橡どちの實みも生りは仕ません、人の胸むねには信心しんくが生ります、生らせまいと思つても生るのが約束やくそく、信しんを有たなければ胸むねが騒さわいで、誰が氣きを安やすくして居

られましよう！。お、貴君あなたが黙だまつて居ゐらつしやるので私わたくしばかり饒舌しゃべり
ました。さあ御堂おだうへ上あがつて拜をがみましよう。

と水野みづのを牽ひきて共に堂だうに上のぼりぬ。

老人らうじんが言ことばを黙々もくくとして聞ききながら、水野みづのは牽ひかるゝがまゝに堂だうには上のぼ
りしが、猶なほ今朝けさは直ただちに本尊ほんぞんを拜はいせんともせず、さればとて侮あなどり慢あなどる心こゝろ
も無なくて、喪心さうしんせる人の如ごとく無意味むいみに立たち居ゐたり。

其二十

既に我が言葉ことばを候もどきもせず、また我が伴ともふを拒こばみもせねば、今御いまみ堂だうに上のぼりて御前おんまへに至いたる上うへは、必かならず復前またさきの日の朝あさの如ごとくに、たとひ御經おんきやうは誦じゆせざるまでも、掌たなぞこを合あはせ頭かうべを下さげて禮拜らいはいするならんと、獨合ひとりがてん點ひとりがてんしてや彼かの老人らうじんは、御堂みだうに上のぼりてよりは水野みづのに關かまはず、一つは自己おのが信心しんくの誠まことを致いたさんとするに忙いそしが故ゆえもあるべし、例いつもの如ごとく御前みまへに蹲うづくまりて、先まず一心いつしんに恭敬きやうけい禮拜らいはいしつ、徐々しづかに妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五めうほうれんげきやうくわんぜおんぼさつふもんほんだいにじうご、と老おいたる聲こゑの低ひくく誦じゆし出しけり。

朝あさの氣きは何なんとなく心こころをして肅然しゆくぜんたらしめて、廣ひろき御堂みだうの内うちの人無ひとなき物もの靜しづかさは自然おのづと胸むねの中うちを清すがく々うちしからしむ。今日けふは御佛みほとけを拜をがみ奉たてまつりもせず、さりとて又御佛またみほとけより反そむき去さりもせず、たゞただ從順すなはなる兒童こどもの、心こころに物無ものなきが如ごとく、牽ひかれたるまゝに此處こゝに來きたりて、此處こゝに其儘そのまゝ止やまれ

る水野は、身近なりし圓柱の太きに憑りて、風吹かぬ間を大空に高く
 懸れる孤雲の、何に着くとも無き思に、嗒焉として獨り空しく立てり。
 老いたる人の誦する經の、其意は曉らるゝ時あれど、其聲は波瀾無く
 やまな無くして一條の絲を畫けるにも似て平らかなるに、聞き居る我が
 心は刻々に安まり行き、何とは無けれど引き入れらるゝやうにおぼえ
 て、知らず識らず無念無想の境に入る折しも、人の下駄の音に不圖驚
 きて、見れば何時の間にや三十ばかりなる女の、老人と並びて禮拜な
 し居り、老人の誦經は今や終らんとして、具一切功德、慈眼視衆生と、
 偈の末のところを誦み居たり。是は不覺なりし愚なりし！。身はこそ
 動かさざりつれ心の内には、吾が兒の可憐いのに理屈も無く、思ふ人
 の大切なのに理屈も無ければ、神様佛様に御縋り申すのにも、何の理
 屈も無いなれど、それも眞實なれば、此も眞實で、理屈の要らないほ
 どの眞實！と云ひたる此の老人の言葉を味はひて、實に云はるれば、
 其の如くなり、我が彼の人を思ひ思ふ心に、そもく何の理由のあり
 や、何の理由とは我も知らず、たゞ我と我が欺き難き情の萌えに萌え

出づるを抑へ得ざるぞ眞實なる！。思ふて思はるゝ身ならばこそ、不
 運にして我拙く生れ來て、思へば思ふほど嫌はるゝ身の、思ふて甲斐
 無き事なれば、自ら斷念め思ひ切りて、忘れ果てんこそ人のため身の
 ためなれ、我が爲す事言ふ事は何から何まで、情なくも彼の人に厭は
 るゝながら、思ひ忘るゝといふ此事ばかりは、必ず彼の人に悦ばるけ
 れば、果敢なく悲しき限りなれど、とてもかくても味氣無き我が一生
 の思ひ出に、せめては男兒らしうふつとりと諦めて、うるさく纏繞る
 蔦葛の離れて去りし嬉しさよと、彼の人に安き思をさせん、人も見ず
 人をも見ざる深き山の巖の罅隙に我一人入りて、誰憚らず思ふさま泣
 きて、其涙の乾き聲の枯れん時我即ち此世を去らば濟むべき事なる
 をや！、と幾度かく思ひしかど、諦めても諦めても諦め得ず、彼の
 人を背後にして千里の遠きに身を隠し棄てんとする意はありても、彼
 の人より距たらんとすれば一步も去り得ず、我が心の我が心に任せず
 して、あだに苦みあだに悩むは、たゞ我と我が欺きがたき情の萌えに
 萌ゆればなり。おもへば神佛を頼み奉るも實に似たる事かな。人はい

ざ知らず我は我が欺き難き情のありて、何の理由とは更に知らねど、
 神にも憐れと思はれたき心地のするなり。理は石の如し狂ぐべから
 ず、我これを懷きて神をも佛をも肯はねども、感情は味の欺くべから
 ざるが如く、我おのづからに神を戀ひ佛を慕はんとするを如何にすべ
 きや。人の戀しき彼も眞實なり、神佛の頼み奉りたき此も眞實なり。
 噫我力無し、我既に我が五十子を思ひ棄て得ざるなり、我よくこの
 神佛をば思ひ棄て得べきや。思へば我ながら覺束無き事なるかな！。
 さはさりながら、さはさりながら。と切に默想に耽りし時には、弘誓
 深如海、歷劫不思議と老人の誦したる聲を猶耳にしたりしに、それよ
 り兎せん角せんに思ひ迷へる中、何時の間にか瞢然と睡眠には入りた
 るぞや。と水野は自ら私に慚ぢたり。

其二十一

右せんとすれば左したき意あり、左せんとすれば右せんとしたき意も
 ありて、廣野の草高き中の岐路にさしかゝれる身の、いづれと取りわ
 づらへば、右にも去り得ず左にも往き得ざる一時二念の心魂は疲れて、
 我知らず誦經の聲の中に攝し去られ、睡るとも無しに睡りし歟、否睡
 りしか睡らざりし歟。たゞ我深く思ひ入りて、いよく二つの念
 の力相等しくして、我が心のいづれにも動かずなりし其の静さを纔に
 おぼえし後は、聞くととも無く聞ける老人の聲の、いと快く聞はしを知
 れるのみなりしが、兎にも角にも我を忘れしは愚なりしと、水野は繰
 り返して自ら思ふ時、阿耨多羅三藐三菩提心と、誦し終りて一心に禮
 拜せし彼の老人は、去らず就かず立迷へる水野が狀態を頭を反して
 見つ、たちまち此方へすたくと來りて、眼の中に氣遣ふが如く憐む
 が如き色を浮めながら、

『あゝ御迷ひなすつてはいけません、勿體無い事です！。念念に疑を生ずる勿れとは御經にもございます。貴君過日は泣いて居らしたではありませんか、貴君のやうな良い方が、御迷ひなさるなんて飛でもない事です！。信を籠めて一心に御拜みなさらずにつてはいけません、善惡共に御利益は屹度あります、さあ私も拜みます、御一緒に拜みましやう！。さあ、貴君、さあ！。』

と云ひく袖を引き御前へと誘ひ、おのれ先づ膝を折り身を屈めて禮拜し、水野にも之に倣はしめたり。

他人の胸の中には何物ありとも思はず、たゞ我が菩提の同行と思ふばかりの親切より、年若き我をあらぬ道へ外れさせじとの他事なき願望に、人の好げなる此の老人の如是心を使ひ身を使ひて老實しく振舞ひ呉るゝを見ては、心弱くも人惡しからぬ水野はこれを拒みかねて、牽かるゝがまゝに牽かれ、屈ませらるゝがまゝに屈み、終には御佛の前に蹲まりて、其の老人の爲すが如くに、一霎時は頭を下げ眼を瞑きて、一心に大慈大悲の我が菩薩をば、我を忘れて念じ奉りしが、佛力甚深

測^{はか}るべからず、時^{とき}に不思議^{ふしぎ}や水野^{みづの}は忽^{たちま}ち、心^{こゝろ}の闇^{やみ}に朝日^{あさひ}の射^さして、胸^{むね}
 の氷^{こほり}の春風^{はるかぜ}に逢^あへるが如^{ごと}き思^{おも}ひの仕^しつ、其^その故^{ゆゑ}を問^とふ暇^{いとま}も無^なく、今^{いま}ま
 で知^しらざりし慰^{やすら}安^{かさ}を得^にて、何^{なん}とは無^なしの忝^{かたじけな}さに、涙^{なみだ}は止^とめんとし
 止^とめあへず、水晶^{すゐしやう}の珠^{じゆ}數^す俄^{にはか}に断^きれて、留^{とど}まらぬ珠^{たま}のばらばらと緒^をより
 亂^{みだ}れて落^おつるが如^{ごと}く、泫^{げん}然^{ぜん}として泣^なきに泣^なきたり。

其二十二

經は誦したりといへども老人迷魂の術を知れるにもあらず、心こそ
 惑ひたれ水野奪魄の法に致さるべくもあらねど、水野が胸中の消息は
 水野ばかりぞ知る、傍觀より云へばたゞ是恰も神文密呪の妖しき道に
 因つて縛心鎖意されたる人の如く、今までの水野某はいづくへやら消
 えて、全く愚痴文盲の爺婆のやうになり、一心に御佛を頼み奉れるさ
 まの、男兒らしからず惘然にのみ見たり。
 西に對ひて放ちても東に對ひて放ちても、滿つる月の形と引絞りたる
 強弓を、きつて放つ時おのづからの快さあり。南にむかひて決して
 北にむかひて決しても、千頃の瀧水の漫々たるを、堤を切つて決する
 時おのづからの快さあり。そもく心の後へも先へも行かざるを悶と
 は云ひ、一方へ爽かに走るを快しとは云ふなれば、佛陀の利益は有る
 にせよ、無きにせよ、水野は今まさに此の快さを味へるなるべし。

星辰上にかゝり、山河下に布ける此の天地の大にして大なるをおもひ、
 萬年萬々年の前に萬年萬々年あり、萬年萬々年の後に萬年萬々年ある
 此の歲月の久しくして久しきを思ひ、さて此の天地の立てる所以をお
 もひ歲月の經る所以を思ひて、此の天地と歲月との存在を、たゞく
 無意義なる事實のみと認めなば、誰かは味氣無き感に撲たれて悲み傷
 まざらん。されど此の天地と歲月との存在の、眞は無意義の事實のみ
 ならで、其中に意義あるなりと認むる時は、誰かは乳房を探り得た
 る嬰兒の如く、無限の喜悅に胸を躍らさざらん。意義あり、意義あ
 り、無意義ならず、神の御心即ち意義なり、佛の御心即ち意義なり、
 化醇の大法はこゝにあるなり、歸善の定數こゝにあるなり、大慈の
 光明は柔かに山村水郷を包めるなり、大悲の音樂は斷ゆる間も無く古
 往今來に亘れるなり、我は此の溫暖き意義の中より生れたる子なり、
 神の子なり佛の子なり正眞の子なり、我と神佛とは血の相通へるな
 り、と如是思ふ時おのづと悦ばしからば、水野は今まさに此の悦びを
 おぼえたるなるべし。

水野のやうやく念じ終われる時、老人はまた水野に對ひて、
『あゝ御信心なさいまし、自然に有りがたいことが能く解つてまゐります！。まあ何様な事が存じませんが、御様子を見ましたところで、よく／＼の御心配事が御有りなさると御察し申します。御籤を御戴きなさい、御籤を御戴きなさい。あゝまだ御戴きなさつた事が御有りなさないの、御勝手が知れないのでございます。宣うございませ私が戴いてあげまじやう。』
と、世話を焼きて水野がまだ何とも答をせざるに、はや御籤を管る僧の許に至りぬ。
やがて僧は御籤箱をふるなるべし、かた／＼といふ音は小暗き其の座のあたりより聞えぬ。

其二十三

よしや大吉ならぬまでもせめては凶ならぬ御籤を得て、憂に沈み悲に
 陥れる氣を引立て、信心の勇を附けて呉れんと爲たるらしき親切の老
 人が、思ふこと違ひて甚く望を失へるは、忽ち先づ其の色に現れて、
 僧より受取りし御籤をば、力無げに輪に巻きながら、鈍るく此方へ
 歩み來れるに、水野は見ずして既に其の文の凶なるを知れり。

第何十何番大吉といふならば、如何ばかりか悦び勇んで示すべきを、
 老人は巻きたるまゝ御籤を水野の懷中に軽く押入れて、

『何様か吉凶にかゝはらず御信心なさい。大吉でも驕れば凶に反りま
 す、たとへ凶でも御信心を強くなすつて、それからまた改めて御籤を
 御戴きなすつてごらんさい、吉になりますこともございますもので
 す。吉につけ凶につけ御信心が大切です。決して信を御冷しなすつて
 はいけません。さてそろそろもう下向いたしましやう。』

と、云いはひ終はつて本尊ほんぞんをまた一拜いっぱいして、おのれ先まづ御堂みだうを去さらんとしたり。

老人らうじんが様やう子の急きふにそはつけるは、何なんの意いも無なかりし我われに智ち慧ゑをつけて御籤みくじを取とらせたるに、その御籤みくじのことのほか凶あしかりしかば、却かへつて其そのために憂うれひを増まし、悲かなしみを添そふることもやと、氣きの毒どくさに堪たへかねて傍かたへに居ゐづらく狭せまくして正直しやうちきなる心こころの憫あはれにも落着おちつきかぬるが爲ためなるべし。平生ひごろの我われを知らずして、たゞ自己おのが身みにのみ比較ひきくらぶれば、然まる心遣こころづかひをするも無理むりならねど、御佛みほとけの廣大くわうだいなる御誓願みちかひをこそ頼たのみ奉たてまつりつれ、御鬬みくじといふ事は御經ごきやうにも見みえず、賣僧まいそうの仕出しだしたるなるべき春はるの遊戯あそびの寶引はうびきといふにも似にたる埒らち無く據よりどころ無なき御籤みくじの文ぶんななどに、我われいかに心こころを動うごかされんや。それとも知らずして性質ひとの好きよき老人らうじんの、心こころを遣つかふ笑止せうしさ、と水野みづのは却かへつて老人らうじんを憐あはれ、わざと懷中くわいちゆうの御籤みくじを其儘そのまにして讀よまず。共に石路せきろの長々ながくしきを下向げかうしけるが、老人らうじんは懷中ふところより折をり本ほんになりたる普門品ふもんひんの小きを取り出いだして、

『だいなしになつて居をりまする物ものを、呈あげると申まをしては失禮しつれいですけれど、

まあ如^か是^しいふ物^{もの}の事^{こと}ですから御免^{ごめん}下さい。これを貴君^{あなた}に差上^{さしあ}げますから、何様^{どう}か御取^{おと}りなすつて下さいまし。私はもう無書^{そら}で記^{おぼ}えましたから、此書^{これ}は用^{よう}が明^あいたのでございますが、何様^{どう}か貴君^{あなた}も御拜^{おが}みなさるたびに、これを御覧^{ごらん}になりながら御經^{おきやう}を御あげなすつて下されば、私^{わたくし}は大變^{たいへん}に嬉^{うれ}しいと思^{おも}ふのでございます。それに此^この末^{すゑ}の方に私^{わたくし}の名住^{なとこ}所^ろが小さく書^かいてございますから、何ぞの御序^{おついで}でも御有^{おあ}りでしたら御立寄^{たちよ}り下さいまし、いろ／＼御利生^{ごりしやう}の御話^{おはなし}やなんぞを致^{いた}しましてやうから。ではまた明日^{みょうにち}御目^{ごめ}にかゝりましてやう。どうか撓^{たゆ}まずに御信^{ごしん}心^{しん}なすつて!。』

と云^いひたき事^{こと}のみを云^いひて終^{つひ}に別^{わか}れたり。冊子^{ほん}は言^{ことば}を費^{つひや}して辭^{いな}むべきほどのものにもあらず、特^{こと}に快^{こゝろ}く受^うけ納^{をさ}めて芳志^{こうざし}を無^むにせざらんは、差^さし當^{あた}つての道^{みち}なるべしと、水野^{みづの}は老人^{らうじん}に厚意^{かうい}を謝^{しや}して、袖^{そで}を分^{わか}つて東方^{ひがし}へ去^さりつ、先づ普門^{ふもん}品^{ほん}を懷^{ふところ}中^{ちゆう}に入るゝに、巻^まきたる彼^かの御籤^{みくじ}のかさ／＼と手^てに觸^ふれたれば、引交^{ひきちが}へて取り出^{いだ}して其文^{そのぶん}を讀^よむに、

第七番 凶

登 ^{ふねにのぼりて} 舟 ^レ	待 ^{びんぶうをまてば} 二便 ^一	風 ^一
月 ^{げつ} 色 ^{しよく}	暗 ^{くらくしてもう} 朦 ^{ろう}	朧 ^{ろう}
欲 ^{かうりんをきしらししてさらんとほつすれば} 下 ^上	輾 ^二 香 ^一	輪 ^一 去 ^上
高 ^{かう} 山 ^{さん}	千 ^{せん} 萬 ^{ばん}	里 ^{りなり}
		高 ^{かう} くしてそれも叶はぬ

とありて、ひしくと我が身の上^{うへ}に巧^{あて}く中^{あた}りたり。

もとより取るに足らぬこと、は思^{おも}ひながらも、不思議^{ふしぎ}に中^{あた}れる此^この文^{ぶん}の流^{さす}石^がに胸^{むね}に徹^{こた}へて心^{こころ}さびしく、じつと眼^めを留^{とど}めて見^みれば、末^{すえ}の方に女^{をんな}文字^{なもじ}にて細^{こまか}に注^{ちう}し記^{しる}せる其^{その}最^{まつ}先^{さき}に、

病^{やまひ}事^{ごと}は十^{じう}に六七本復^{ふく}無^なし、長^{なが}びきたらば後^{のち}は息災^{そくさい}になる事^{こと}もあるべし、よく信^{しん}力^{りき}をもて佛^{ぶつ}神^{しん}を頼^{たの}みて吉^{よし}、

とありたるは、いよく何^{なに}となく不^ふ快^{くわい}を感じ^{かん}て、腹^{はら}の底^{そこ}より寒^{さむ}さの上^{うへ}り來^{きた}るやうにおぼえたり。

何^{なに}とか思^{おも}ひけん水^{みづ}野^のは引返^{ひつかへ}して、復^{また}相^{さがら}良^らを訪^とひぬ。待^まつ事^{こと}一^{いち}時^じ餘^{あま}りに
して終^{つひ}に相^{さがら}良^らに親^{した}しく會^あひ得^いて、必^{かな}ず見^み舞^まはんとの辭^{ことば}を得^いて歸^{かへ}りしが、
幸^{さいはひ}にして今^{けふ}日は休^{やす}校^みの日^ひなればこそ宣^よけれ、吾^{あづま}妻^ま橋^{はし}にかゝれる時^{とき}は既^{すで}
に九^く時^じに近^{ちか}からんとしてたり。

其二十四

雷神門かみなりもんはいつもながら人のぞよつきて目まぐるしき地ところなり。わけて今日けふは日曜にちやうの事こととて、搔頭かんざしに花はなを飾かざらする九歳十歳の女をんなの兒こ、金文字きんもじかゝやく天鷲絨帽子びろうどぼうしかぶらせたる洋服姿可憐やうふくすがたかはゆらしき六歳七歳の男をとこの兒こなど引連れて、世よを樂たのしげに仲見世なかみせに入る御母様おつかさんもあれば、農家ひやくしやうには違ちがひなき乾疥面はたけがほに、白粉おしろいの不均むらの奇異ふしぎにをかしき、猫ねこが化けたやうな小娘連すめれんの、何憂事なにうきことも知らで觀音様くわんのんさまに參まゐるあり。妾われも人生ひとのよの春はるに遊あそべる蝶々てふ々まげの、まだ何事なにことも知らざりし頃は、たゞあどけ無なう面白おもしろう此地ここを極ごく樂らくのやうに思おもひし時ときもありしと、遙はるかに山門さんもんを望のぞむにも往時懷むかしなつかしく、通とほりすがりなれど御堂みだうの方かたを一寸拜ちよつとをがみて、そのまゝ東ひがしに切きれて行ゆけば、

『姐様ねねさん、如何いかゞです、御安おやすくまゐりましやう。』

『姐様ねねさん、如何いかゞです御安おやすく如何いかゞです。』

と車夫くるまぢやの聲々こゑ々かしましく煩うるさし。

久しぶりにて渡る吾妻橋より川上の方を遠く見れば、水は昔見たりし
 如く緩く流れて、右手に長き一帯の堤の、其の状も更に記憶に異らず、
 岸の櫻の葉も透けるながら、その花の眺めもおもかげに立つて、あ、
 彼の花の隧道のやうであつた中を、夜の風の些寒かつた時、彼人に手
 を取られて人目の差しく、暗き方に身を寄せて歩きし春の宵もありし
 が、思へば今其事の思ひ出さるゝも甲斐無く愚かなりと、しきりに路
 を急ぎて橋を渡り盡し、また煩さく車夫の勧むる中を停車場へと向
 ひぬ。

乗れと勧められて乗らぬを車夫の憎がりて、
 『姐々、瀧車なら猶の事、乗らないと間に合はないよ、九時四十五分だ
 からもう發車のだよ。』

『そんなに急いで歩くと女振が下るぜ。』

『瀧車までなら直だから、乗せてつて上げようか、無錢でも関わらないん
 だ、ハ、ハ、ハ。』
 なんどく口々に下賤のものゝ好きな事をいふに、虚言とは思ひながら、

おのづと氣きの急せきて、疾足はやあしになり、やがて停車場ていしやじように到り着いたけば、車夫しやふも出鱈目でたらめは云いはざりしと見え、危あやふくも乗のり後おくれんとするほどのところなりけり。

切符きつぷを買かふ間まも疾としや遅おそしや、

『早くはや早くはや、』

と驛夫えきふの云いふにいよく慌あわて、車中しやちゆうに入いれば、どしんといふ恐おそろしき音おとして扉はは烈はげしく閉しめられ、號令笛あひづはピーと鳴なり、車くるまは動うごき出だしぬ。機關手きくわんしゆうの手荒てあらき男をとこなればにや、車くるまの俄然にはかに強つよく動うごき出だしたるに、人ひとは車室しやしつに多おほからざりしながら、いづくに座すわらんかと席せきを取り迷まよいて、未まだ身みを落おちつくるに暇いとまあらざりしお龍りゆうは、忽たちまち危あやふく倒たふれんとして、女をんなの意氣地いくじ無なくよろ／＼と歩あしの纏もつる、時とき、ハツと思おもひし折をりは既すでに遅おそくして、意氣地いくじ無なくよろ／＼と歩あしの纏もつる、時とき、ハツと思おもひし折をりは既すでに遅おそくして、猶新なほあたしき吾妻下駄あづまげの、櫛齒かしばの角立かじだてるを以もてした、かに、後方うしろの人ひとの足あしを踏ふみたり。

其二十五

お龍はやうやくにして踏止まりて、驚き易き女氣のどつきりと胸を躍らせつ、何思案する暇も無く、

『御免なすつて下さいまし、飛んだ過失を致しました。』

と振り顧りさまに先づ謝びて、心の之くところを一ト目見れば、是は如何に足袋無き其の人の足の小指は、はや湧き出づる血潮に塗れて、負傷の様子もおぼろげながら、岩根杜鵑花の花の影の流水の底に動くが如くに紅色流れて止まらず、いまだ古びぬ薩摩下駄の、一ト角は忽ち殷朱となつたり。

あなやとばかり我も驚けば人も驚きて、忙がはしく下駄を脱ぎ捨てつ、男は急に袂を搔探りしが、左方にも右方にも片紙だに紙はあらずして、たゞ小さ折本のみの取出されたる其間に、お龍は既に我が小包を傍の座に置き、手早く帶の間より白紙を取り出して、

『まあ何様どうして御謝罪おわびを致いたしたら宜よろしいのでしやう、飛とんでも無ない事を
いたしました。どうかまあ貴下あなた、御腹立おはらだちでしやうが何様どうか貴下あなた、御勘
辨べんなすつて下くださいまし。定めし御痛おいたみでございましてやう、あゝ濟すみま
せんことをいたしました。』

と面おもてを赤あかめ涙なみだを含ふくんで誠意まごころに謝罪わびながら、身みを低ひくく屈かめて血汚けがれを拭ぬぐ
つゝ、塵埃ほこりに穢よごれたる足あしの緒あかく汚きたきを、織々ほつそりとしたる指ゆびの雪ゆきと白しろき手
に執とりて、早はやくも拭ぬぐひ捨すつる紙かみの血ちに染しみて花鮮はなあざやかなるを幾枚いくまいか散
らせば、男をとこはお龍りゅうの手てを拂はひのけ足あしを縮ちぢめて、

『ナアニ構かまひません、これんばかりの事こと、痛いたくも何なんともありはしません
から、勘辨かんべんも何なにもありや仕しません、たゞ潮時しほどきの所爲せゐで血ちがでるので
しやう。紙かみを少すこし頂戴いたゞきさへすりやあ宣ようございます。』

と云いひし限きり、ふたゝび手てを觸ふれしめず、

『でも塵埃ごみでも入はいりますと惡わるうございますから。』

と云いふをも更さらに耳みみに入いれて、自みづから一應清いちおうせいけつ潔けつに拭ぬぐひて、幾重いくへにか疊たみ
たる紙かみに傷處きずを包つめば、お龍りゅうは袂たもとより絹きぬの白汗巾しろはんけ兒ちの清きよげなるを出いだして、

前齒^{まへば}に啣^{くは}ふるが早^{はや}きかピリ、と引き裂^さき、男^{をとこ}の辭^{いな}まんとするを辭^{いな}む間^まあらせず、體裁^{さま}よく巧者^{かうしや}にくる／＼と巻^まきて引結^{ひきむす}びけるが、裂^さきたる時^{とき}に唇^{くち}にや觸^ふれたりけん、その結び餘^{あま}りの一端^{いつたん}には、血^{のり}ならぬ紅^{あか}きもの、微^{かすか}に見^みえたり。

車中^{しやちゆう}のすべての人々^{ひとぐ}の眼^めは、悉^{ことごとく}く二人^{ふたり}が上^{うへ}にのみ注^{そ、}がれ居^ゐるを、男^{をとこ}は上^{うへ}無く不樂^{わび}しくおぼえてや、

『紙捻^{こより}でも濟^すみましたものを御氣^{おき}の毒^{どく}な！。いろ／＼御世話^{おせわ}になつて却^{かへ}つて濟^すみませんでした。』

と、云^いふべきほどの挨拶^{あいさつ}は眞四角^{まつしかく}に云^いひ仕舞^{しま}ひて、一寸^{ちよつと}こなたを見て會釋^{あしやく}せしが、

『何様^{どう}いたしまして、妾^{わたし}こそほんとに濟^すまない事^{こと}をいたしました。何卒^{なにとぞ}御免^{ごめん}なすつて下さいまし。』

と、お龍^{りゆう}の云^いひし詞^{ことば}は聞^ききしや聞^きかざりしや、愛想氣^{あいそげ}無く後^{うしろ}を見^みせて車窓^{まど}近く居寄^{ゐよ}り、何見^{なにみ}るものあるべくもあらぬ窓外^{そと}の方^{かた}を見^みたる其^その横^{よこ}には、先刻^{さき}に懷中^{ふところ}より出^いだされたる小^{ちひ}き折本^{をりほん}の置^おき棄^すてられたり。

見る氣もなく何の本かとお龍の見たる時、其冊子の最初のところは丁
度開き居りて、配り假名のあるに誰にも解りて、觀世音菩薩普門品と
は明らかに讀めたり。

其二十六

思ひのほかの品なりしに、お龍は驚き疑ひて、露照る美しき眼を睜り、あらためて男を一ト目見しが、男はそれとも心付かず猶車外を見居たり。

既に其人の履物の汚れを清めたり、落ち散つたる紙の眼に厭はしきをも一ト纏にして投げ棄てたり、謝罪るほどはあやまりて、今は何爲べき事も無きなり。お龍は彼の男とは斜線に、其の反對の側の車窓近き席を取りて、はじめて身をも心をもおちつけたり。

普門品！、あの普門品！、彼書はたしか觀音様を信ずる人の讀む御經！。五十六の爺婆ならばいざ知らず、若い盛りの當世の人の、しかも古風を守る農夫町人でゝもある事か、新しきを追うて學問に身を責めれば、まづ神佛とは縁の遠さうな書生風の此様いふ人の懷中から、普門品とは似合はしからぬ！。何のやうな悲しい願があつての

佛頼みか知らねど、あゝ想ひ出しても胸が痛む、妾も一昨年の丁度
 今頃、思ふ人には遠く離れて、空の色も風の音も情無い知らぬ他国の
 駿府の秋、いくら手紙を出しても問訊ねしても、返事さへ来ないのが
 氣になつて氣になつて、よもやとは思へども心變りか、それともまた
 病患でも仕てゝは無いかと、恨めしくもあれば心細くもあり、はて
 は茫然と門口に立つて、何が見えるでもない東京の方を、空に見詰め
 てはほろりと、馬鹿らしいほど泣いて泣いた末、思案に餘つたと
 ころから願掛けして、安東の清水の觀音様には御經こそ誦げなかつた
 が日参りもすれば、足久保の楠木の觀音様の御利生の話を聞いては、
 二里からの田舎道を歩いた上に、草臥返りながら、御百度まで踏んで、
 何卒手紙の返事の参りまして彼方の様子の分りますやう、若し又病
 氣災難にでも罹つて居りますなら、御利益をもつて助かりますよ
 うにと、自分の身體は一日一日削るやうに癪せるのも餘所にして、一
 心になつて信心を仕た苦しい切ない經驗もあるが、忘れても爲まいも
 のは戀路の迷ひ、思つて思ひ止む日も無ければ、泣いて泣き足る夜も

無く、生きては居ても生きたくも無く、死なうとしても死にきれもせぬ彼の厭な情無い心持！。我身の痛かりし経験に人の痛さも思はるゝが、あ、猶若い此の人の信心の、よしや頼み無き老人の親の病氣の爲故でもあれ、また何の様な辛い悲しい遣る瀬無い事のためでもあれ、たゞ戀故の信心で無かれかし。今妾が仕たる過失は、時の拍子の事なれば、誰も容赦しては呉れさうな譯ながら、あれほどの血の出た負傷を仕て、露腹立たしげな顔色もせず、また恨めしき眼色もせず、毫も變つた様子は無くて、水の流れたやうにさりと濟ませて、後には物も残さぬ風情の寛大さ！。終には反對に禮まで言ひたるに心の優しさは見えながら、それから知らぬ顔つくつて、彼方向いたる振舞の少し素氣無きに、飼はれても人の氣は取らぬ鷹の素振の、一寸憎らしいほどの氣位もあらはれて、女さへ見れば嫌に笑ひ掛ける、世に有りふれた若い人などは、其の行方も全て異れど、さればといつてぎしつきもせず、氣立ても心持も何と無く違つて、衣服容姿は此といふことも無き書生ながら、おのづと普通には思へぬところある人！。

斯^か様^ういふ調^{てう}子^しあひの人^{ひと}なんぞが、若^もし萬^{ひよつと}一^{じう}十^{ねん}年^に二十^{じう}年^{ねん}の^の後^{のち}になつて、立^り派^{つぱ}な傑^{すぐ}れた人^{ひと}なんぞになるのではあるまいか？ あ、修^{しゆ}行^{ぎやう}盛^{さか}り出^{しゆ}世^せ盛^{さか}りの此^この若^{わか}い人^{ひと}！、それ^{これ}に付^つけつても彼^あの普^ふ門^{もん}品^{ぽん}！。屹^{きつ}度^ど果^は敢^か無^ない戀^{こひ}なぞの、其^{その}様^{やう}な事^{こと}のためではあるまいなれど、どうか戀^{こひ}ゆえの信^{しん}心^{じん}で無^なかれかし！。と我^{わが}身^みの往^{むか}時^しにつまされて、じつと其^{その}冊^{ほん}子^しに留^{とど}めし眼^{まなこ}を、今^{いま}しも其^{その}人^{ひと}の後^{すがた}姿^{うづ}に移^{うつ}して横^{よこ}顔^{がほ}をそつと見^みやる折^{をり}しも、ふつと男^{おとこ}は此^こ方^{なた}を見^み返^{かへ}し、圖^{はか}らず眼^めと眼^めと相^{あひ}射^いしが、はやくもお龍^{りう}は男^{をとこ}の睫^{まつ}毛^げに怪^{あや}しき露^{つゆ}の珠^{たま}あるを見^みたり。

其二十七

人おのく身あり、身の居るところあり。又おのく心あり、心の思ふところあり。されば相知らぬお龍と男との、男はお龍の我が爲に何を思へるぞとも知らねば、お龍はまた男の我ゆゑに何を悲しめるぞとも悟らむやう無きなり。

自ら感ずる心身の疲れを、せめては瀟車の内に休めんと、少時を待合はせて此に乗りたるに、何となく氣の弛みてうつかりとしたる時、忽ち足を踏まれて驚きしが、眞心を表して謝罪らるゝに怒らんやうは無く、かゝる事は有り勝の過失にて珍らしくもあらず、且は又、云はゞ我にも不注意の咎の無きにはあらぬをやと軽く思ひ棄てつ、却つて他の我がためにまめくしく傷を裹み汚を拭ひて呉るゝ氣の毒さに堪へかねて、よきほどに挨拶して身を退きたる男は、何を見るにもあらず窓外を見ながら、出血を疾く止まらしめんがために膝に載せた

片足かたあしの、猶聊なほいさか疼痛いたみをば覺おぼゆるにつけて、嗚呼あゝ何ぞ人ひとの世よのことの
 如是かくおろか愚おろしきや！。たま／＼我われに過失あやまちしたる此この若わかき婦人ふじんは、我わが思おもふ
 人ひとの如ごとくなる端嚴たんごんの相さうこそ無なけれ、婀娜あだたる姿すがた、野のの花はなのおのづから
 人ひとの意いを惹ひく色香いろかあつて、一車いっしやの客きやく皆みな眼めをそばだて、見たるほどなれ
 ば、彼かの人ひとの我われに思おもはる、が如ごとくに此この女ひともまた或あるひは他ひとに思おもはる、事こと
 の無なきには限かぎらじ。我わが身みの經驗おほいに我われよくぞ知る、人ひとを思おもふもの、苦くる
 しさは、魂魄たましひを絞木しめぎにかけられて斷たえず壓おし搾しぼらるゝに異ことならず、何なん
 につけ彼かにつけ、夢ゆめにつけ現うつにつけ、愁うれひ易やすく悲かなしみ易やすくなりたる心こゝろ
 の、事ことあるごとに責せめ搾しぼらるれば、誰たが縫ぬひてか痊いやすべき胸むねの深創ふかよ
 り、渾々こんくとして流ながるゝ血潮ちしほの、火ひとばかり熱あつきも空むなしく冷ひえて、いた
 づらに地ちに入いつて情なさけ無なく廢すたることの如何いかばかりぞや。眼めに見みぬ其血そのれ
 こそは尊たつとくも尊たつとき人ひとの眞誠まことの生命いのちにして、眼めに見みゆる此血これは言いふにも
 足たらぬたゞ鹹しほはき紅あかき水みづなるを、僅わずかに一指いっしの端はしを傷きずつけ數滴すうてきの臙脂べにを散ち
 らせば、性情こゝろの優やさしさ見みゆる此この婦人ふじんは、偽いつはりならず我われをいたはしが
 りて、心こゝろを盡つくし手てを盡つくし慰なぐさめ呉くれしが、若もし此この女ひとを思おもふ男をとこありて、

彼の人を思ふ我が如くに、果敢無き戀の深みに悩み、日と無く夜と無
 く、折にふれ事につけ、泉の如くに止まらぬ血を心窩の奥底より流し
 溢らさば、それを此の女は何とか見るべき？。我が足の指の一ト節二
 夕節、此の紅き水の幾掬は、よしや過失のために亡失はれたりとて、
 我斯ばかり恤られでも可、たゞ思ふ人に思はれぬ辛さは身に徹みて悲
 しくおぼゆれば、あはれ此の優しげなる若き人の、若し人に思はれな
 ば人を思へかし、思ふ人あらば其人を思ひて遣れよかし、戀の誠に責
 められて、壽命を溶いて涙と流し棄て、男兒の智慧をも保ちかねて、
 愚に甘んずるに至れる此の我が如きものにも會はず、假令其の人を蟲
 の嫌はゞとて、せめては可憐とも思ひて遣れかし。我が身につまされ
 てつくぐと思ふ、あゝ人に思はれなば人を思へかし。こればかりの
 傷にだに痛はしとおもふが、女性の欺かぬ情ならば、縫ふべき針も糸
 も無き悲しき創口より流れ流るゝ火と熱き血の、花と鮮やかなるを見
 たる時は、必らずあはれと思ひて遣れかし。されど測り難き世の習、
 此の女もまた我が思ふ人の如く、或はおのれを思ふ男の、心血を盡し

て悲み悶ゆるをも、あだに天飛ぶ雲と見過して、あはれみてもやらず
 悲みてもやらず、其の情無きを啣たれやする？。僅なる斯ばかりの傷
 の如きには、心をつかひ言葉を費すにも當らぬながら、此を大事のや
 うに思ふも愚なる世の態かな。我は今恐ろしき傷を抱きて、絶間無く
 泉なす血を流しながら、あはれとも思はれぬ悲しき身なるをや。これ
 ばかりの血の嗚呼何かあらん！。それにつけても此の若き女の、願は
 くは人に思はれなば人を思へかし、と此は我が身の現在につきて思ひ
 入りながら、偶然後方をば向きたるなりしが、圖らず眼と眼と相射た
 る時、男もまたお龍が何を思ひてか涙に其眼の潤めるを觀たり。
 相會つたる眼は忽ち離れぬ。男はまた前の如くに窓外を眺めたり。
 女は男の如何なる人なるを知らず、男もまた女の如何なるものなるを
 知らず、同じ車に乗りて同じ道を、同じところへ行く身ながらも、心
 はそれ／＼のおもむく方に馳するも浮世の態なりや。
 やがて瀟車は白鬚の停車場を過ぎて、はや鐘が淵の停車場近くな
 りぬ。

お龍は徐に立上りて、

『どうも飛んだ失禮を致しました。もう妾はこの先で下車しますのでございますが、御痛みは如何でございます？、些はお宜しうございますか、まことに済みませんことを致しました。では勝手ではございますがこれで失禮いたします。』

と、男も其處で下りるとは知らで物堅く挨拶すれば、男は口數少く、『いやもう何ともございせん、何様か御構ひ無く。』

と云ひたるのみ。

瀟車は鐘が淵に着きて男先づ降り、それより人々につぎきて女も降りぬ。女の停車場の構外に出でし時は、男の姿ははや見えざりき。

其二十八

家並立續ける都會に育ちて、賑やかなる道路をのみ歩きつけたるものは、右も左も田甫にして、遠見に榎やら松やらの木立、その蔭に箱庭にありさうな藁葺の家の四ツ五ツ並ぶといふやうなる田舎へ踏出して、十字路に問ふべき店なきを恨み、三叉路に尋ぬべき人あらぬを悲み、はては間違へずとも濟むべき筈の路を兎角に間違へて、あらぬところに迷ひ込むが常なり。鐘が淵の停車場より四ツ木へは、何の譯も無く知れ易き路なるを、お龍は如何にしてか誤りて、狐に誑さるゝと云ひし今朝の戲言も思ひ出されてをかしき無益路を歩きし末、やうやくにして目ざす其の村へ着きたり。

ばつちらけ髪を手拭の鉢巻に壓へて、ねんくねんくと兒守する村の娘の十三四なるに、

『もし、山路さんといふのは、』

と尋ねれば、

『伴れてつて遣るべい。』

と前に立つて歩いて、

『此處だよ。』

と教へて呉れたるは、門のがつしりと厳めしくして、厚き茅葺の屋根も高き、物持らしき立派の家なり。これほどの家とは聞かざりしがと、少し訝りながら音なへば、丁度端近に居たる、般若顔の丈高き女の、衣服は此家の主人の妻なるべく見えて、可笑しきほど大なる丸髻に結びたるが、人を媚嫉むやうなる眼つきして、しばらくは頭の上より足の先までじろく／＼と見たる揚句、

『それは隠居所の方でございませう、こちらには水野なんていふ人は居りません。其家へ行つてお聞きなさいまし。』

と、可厭に慳貪に云ひ棄てゝ、障子びつしやり奥に入りたり、此家と隠居所との間に何のやうな譯のあるかは知らず、また何程大した大々盡の奥様なれば左様は勿體ぶるか知らねど、悪く人を見下したやうな

没義道の忌々しい大顔な田舎婦めときかぬ氣のお龍は打腹立ちしが、怒つて甲斐ある事ならねば、其儘突と外に出でたり。

見れば前の兒は猶其處に居りて、ねんくねんくと負へる子を賺しながら、かな糸をもて手鞠を造り居たるに、お龍はまた其の娘を呼びかけて、

『折角汝さんに教へて貰つたけれど、此家は妾の尋ねやうといふ家と異つて居たの！。隠居所の方といふのを知つておいでなら、一寸教へて下さいな。』

と、笑をつくつて云へば、子守も莞爾つき、

『あゝお濱ちゃんの家の事かい、そんなら猶の事だ、伴れてつて遣るべい。』

と云ひながらずんく先に立ちて、巻きかけたる鞠を袂にして導きくれたり。

『へーエ、お濱ちゃんといふ女が其家には居るの？。』

『アレ隠居の方へ行く人で居て、それでお濱ちゃんを知らないだかエ

?!。』

『だつて妾は初て來たもんで、水野さんていふ方を尋ねるんだもの!。』

『水野さんへ尋ねて來たつて!、アノ先生の水野さんところへ?!。』

振返つて子守は新にお龍を見しが、其の都びて清潔に美しきは、何知

らぬ眼にも明らかに映りたり。

『姐さんは水野さんの妹ッ子かエ。』

お龍は其の頓狂なる考へと唐突なる問とに自然と笑を催さしめられ

たり。

『何故?。』

『何故つて、東京からわざわざ來たので無いかエ。』

『ホ、。おもしろい事をお云ひだネ、そりやあ東京から來ただけれ

ども、東京から來たとつて妹たあ定りやあ仕ません。』

『ア、解つた。ぢやあ姐さんは水野様の内君になる人だベエ。』

『いやだよ、そんな飛んでもない事を!。ホ、。妾あまだ水野さんて

いふ方にも、お目にかゝつた事さへ有りやしないのだよ。』

『隠してもいかないだ！。姐さん今些紅い顔したゞ！。ホレもう此家が御亭主の家だ。植込いぢつて居るのがお濱ちゃんのお爺さんだよ。』
 子守は五六歩いきなりに駈け抜けて、植込の不揃いになりたるを銕もて剪り居たる禿頭の澤やかに人の好きさうなる老人に對つて、一二間こなたより左らでも徹る聲を遠慮無く大きくして、

『爺々！、妾東京のお客様を案内して來たゞよ。』

と、確實に然様と思ひ込んで、獨り承知して叫び知らすれば、吉右衛門は不意なるに驚きて答へもせぬ時、此方に向へる入口の障子はさつと開けられて、繪に見るやうなる色白の容貌好き娘の、星のやうなる美しき眼を光らせたと、水野とは此人なるべき若き男との現はれしが、是は如何に其男は今し方瀟車の内にて妾が傷つけし其の人なれば、互に顔を見合はす途端、言葉こそ出さぬ彼此共に、これはと驚きたる其の様子、明らかに傍の人々にも見たり。

『ホー、隠してもいかないだよ！。兩方で知つてたゞ！。』
 子守は獨り定に凱旋を擧げて、得意の顔つきして彼方に走り去り、お

濱^{はま}と吉右衛門^{きちゑもん}とは無言^{むごん}にお龍^{りゅう}水野^{みづの}を見れば、お龍^{りゅう}はたゞ何^{なに}とも分^{わか}らぬ
心地^{こゝち}に、かつと紅^く色^{れな}潮^{あさ}したる面^{おもて}、一^{いち}朶^だの芙^ふ蓉^{よう}十^{じゅう}分^{ぶん}に酔^よひたり。

其二十九

既に我が尋ぬる水野とは其人なるべく、又今聞けるお濱とは其娘なるべしと猜し知りたれど、飛んでも無き子守女の言葉に度を失ひたるお龍は、思はざる横風に扇られて目ざすところに船首を向けはぐりたる船の、先づ取りあへず間近なる纜杭に取りつけたるが如く、吉右衛門に向ひて小腰を屈めつ、

『妾はあの、岩崎の母の許から参つたものでございますが、水野さんがおいでになりますなら何卒………、』

と、辛くもこれだけを言ひてホツと息吐きたり。

合點の惡からぬ吉右衛門は、例の眼鏡越しにお龍を見しが、手にせし剪刀を樹の枝に一寸掛けすて、清らなる赤ら顔に笑をさへ含み、

『ハア左様ですか、さあ御上んなさい。丁度今しがた御歸宅でした。お濱や、先生のところへ御客様だよ。ハ、ハ、ハ、お蝶ッ子が何を下ら

ない!。」

と未は獨語のやうに云ふところへ、生々として美しき娘は下り來りて、たゞ纔に頭を下げたるばかりに愛度氣無く會釋し、

『どうか、此方から御上んなすつて、』

と先に立つてずつと庭を貫して導くは、入口より通さば今は其處に取り亂したる室の他人には見せたからぬ狀なるが有ればなるべし。

云はるゝがまゝにお龍は庭前より上りて、通されたる室にちまぢまと座れば、

『一寸御待ちなすつて。たゞ今直、』

と云ひ置きて娘は彼方に去りぬ。入口近き茶の室とおぼしき方に、其の人も娘も在る様子ながら、何を爲し居ればにや猶出で來らず、我たゞ一人兀然として室の内を見れば、二本立の書籍一ツ机一脚、本箱に餘れる本の幾十冊か壁に添ひて積まれたると、奥行きの淺き床の間に西洋本の少からず置かれたる其他には何の道具も無く裝飾も無く、味も無く素氣も無き其の態は、惡口を云はゞ巡查の交番所に少しばかり

り書籍のあるやうなものなり。

お龍は生まれてより未だかつて見ぬ室の狀態に、荒野に立つたるやうの心淋しさを覺えて、何を書いたものか知れぬ西洋本の、表紙の金字燦々と輝けるにのみたゞ所在無さの眼を留めて見つめ居れば、物靜かなる田舎の晝間も寂として、彼の老人が使ふ剪刀の音は時々ちよつきりちよつきりと聞に來るなり。

心おのづから靜まれば耳おのづから聴くなりて、小聲に相語る彼方の室の話は、幽微にはあれど今は聞ゆ。

『左様！、それで知つて居らしたの！、あの人が先生の足を踏んだ人なの！。あら可厭な人だこと、妾嫌ひだは！。』

『だつて過失だもの仕方が無い！。大變氣の毒がつて叮嚀に謝つたのだもの却つて優しい人だと私は思つて居るよ。』

『左様ねえ！。左様いへば汗巾を破つて傷を咎いたつて。ア、矢張り眞實は好人なのね！。ぢやあ妾は嫌ひぢや無くつて好なのよ。何だか最初見た時から妾は好だつたのよ。だけでも先生の足を踏んだつ

て云ふので嫌だと思つたの!。眞箇に奇麗な好人ねえ!。』

『ハ、ハ、好だの嫌だのつて、お濱ちゃん位いろくな事をいふ人はありや仕ない。そりやあ宣いけれどもお茶でも與つておくれ、置つぱなしぢやあ可憫ぢやあ無いか。』

『あら左様ぢや無くつてよ、今御給仕が濟んでから御茶を入れやふと思つて居たのよ。』

『いゝに私には關はなくつてもいゝよ。さあ、もう御終だから!。』
言ふもの恐らくは何の意無からん、聞くもの未だ必ずしも感無くばあらざるべし。

其三十

お龍りゅうは抑おさ如何いかなる人ひとぞや。

お嬢ぢやうさま様お嬢ぢやうさま様で育てそだられたる身みにはあらねど、生うれつゐての心こゝろ情もちに人ひととは異かはつたところあつて、駿すんぶ府ふの叔母おばのところへ引取ひきとられたる其夜よ、はじめて何も無なき座敷ざしきに寐ねかされて、吾家うちでは如か是うは無なかつたものをと物足ものたらぬ心地こゝちし、翌日あくるひ我が荷物にもつの行李こうりを解ときし次ついでに、我が好きすなものゝ數多かずおほき中なかより平生ひごう氣きに入いりの永徳齋ねいとくさいの小人形こじんぎやうを取り出いだして、そつと小棚こだなに飾かざり置おきしに、それを固かたい自慢じまんの叔母おばの帝釋たいしやく様のやうな三角さんかくの眼めに睨にらまれて、其様そのな大おほきい形體なりをして人形にんぎやうなんぞを捏こね廻まはして遊ぶあそと云いふ事ことがありますか、藏しまつて御置おおきなさい、と唯一言たぐひことに叱しかりつけられ、あゝあんまりつまらない情無なさけない叔母おば様、何様どうすれば其様そのな乾魚ひもののやうな氣きになつて居あらるゝ事ことかと、恨うらみ疑うたがひながらも争あらそひかねて、其時そのときよりやうやく『わたしの好すきな物もの』を身みの傍ほとりに置おかずして日ひを

送るに慣るゝに至りたるなり。

されば頼もしからぬ男に一生を過られて、涙の淵瀬に浮き沈みしたる
 のち、今は他人の家に寄食客の身の長閑らしく玩弄品三昧をするには
 あらねど、傳といひ、清といひ、勝といひ、彦といひ、出入る若き
 男共の争つて氣を取らんとて、折々呉れたる種々の物品の中、傳が持
 て來れる薄色の瑤瑤の細工の小さき兎の、姿しほらしくふつくりとして、
 ぼつちりと紅き眼のいと可憐く出來たるが甚く氣に入り、あれかこれ
 かと、アナ絲の色を擇みに擇んで、其のために敷くべき蒲團の花やか
 に美しきを編みて遣りつ、はじめて其に載せて見たる時、色の映り合
 ひていよいよ好ましく愛らしく見えたる嬉しさの餘りの戯れに、此兎
 は妾の大切な人なの！と獨語したりしが、其語を人より聞きて勘違ひ
 してか、其頃より傳の煩く付き纏ふ、其は何よりの迷惑ながら、今だ
 に兎の可愛さは冷めず、何ぞの折には『兎之さん』と喚びかけて、心
 の淋しさ遣る方無き時の、語らう友無き孤獨の憂さを、苟且に一寸慰
 め忘るゝなり。

是のごときお龍は今一室の中に、眼を慰め心を寄せて情懷の遣りどころとすべき物の一つも無くて、床に插花瓶は有りながら未枯れたる花も無く、机上に筆架水滴の影もあらで裸硯の淋しく置かれたるものなるを見て、成程書生さんは如是したものか知らねど、餘りといへば曲の無い何といふ此室の状態で、ひそかに室主を疎ましく思へる折しも、此家の娘が我を可厭な人と云ひしに對ひて、我を優しき人と云ひなし呉れたるを聞きて憎く思はんやうは無く、あゝまだ知りもせぬ人を悪くばかり量つたる事と思ひ返す時、無造作にすらりと間の襖を開けて、次の室より立出でたる男は我が前に座れり。

其三十一

お龍が頭を下げて禮をなしつ、やがて言ひ出でんとする間もあらせず、
『イヤお待せ申ました、小生は水野です。』

と云ひたる、言語明晰として冗處も無く餘裕も無く、石磴を見るやう
に角ばつたる云ひざまの、聲つき自然威勢あるにお龍は吞まれて、釣
込まれ氣味に此方も堅くなり、

『あの妾は岩崎の母のところから出ましたもので、』

と、先づ一句明らかに那處より來れるかを更に告げたり。

『ハア。左様して貴下は御近所の方でゝもお有りですか。』

『ハイ、イエ、御承知はございますまいが妾はあの、彼方に御厄介にな
つて居るものでございまして、舊は彼方でお稽古を願つたものでござ
います。』

『ア、左様ですか、してお師匠さんはお變りありませんか。』

師匠は打擲いても死なざるべく壯健にして、酒を飲み情夫と連れ立ちて遊び歩けるものを、かゝる生眞面目なる人に虚言を云ふことの心咎せられぬにはあらざれど、

『ハイ有りがたうございます。まあ別條は無いやうなものでございますが、先般から一寸時候あたりを致して弱つて居りますので。』

『それは何様もいけませんナ、たゞの風邪ですか。』

『イエもう、眞の一寸した事でございまして、しかも治り加減でございますから、お案じ下さいませ。それに就きまして妾が出ましたやうな譯でございませうが、師匠が申しますには、過般からはまた度々のお手紙で、五十の病氣を一つお知らせ下さつたり、其上またいろ／＼お世話を戴いたりしまして、お禮を申さうやうも無く有り難く存じて居ります。早速にも自分で出てお禮を申上げ、五十の見舞も看病も致さなくつてはならないのではございますが、生憎と自分も患つて居りますので、存じながら思ふやうにも参りません。水野さんが在ら

しつて下さるから好いはずでもつて打棄つて居るやうで、大變心苦し
 う存じて居るのでございますが、全く左様いふ譯ではございません。
 御承知の通りの女暮しで、手前にばかりかまけて居りますので、彼
 様も仕たい、此様も仕たいと色々、心では思つて居りまして手が
 届きませんから、たゞ陰でもつて神信心ばかり致して居るやうな譯
 でございます！。と如是申上げて、何様か何分にも悪しからず思召
 になるやうに、善く汝から有體のところを細にお話仕てお呉れとの事
 でございます。又、どうか此上ともお世話を下さいますように、老
 母は勝手な奴だ顔も出さないと、お愛想盡しになりましたも、病人は
 何も知らない事でございますから、お愛想盡しをなさらないやうに。
 五十の事は實は我儘な申し様ですが、疾から貴下にお任せ申したつも
 りで居りますのでございますから、何のやうにでもお心持次第にな
 すつて戴きたいので、御親切の貴下のお世話を戴いて、其でいけな
 ければ残り惜い事はございません、全く當人の運の無いのだと諦らめま
 す。いづれ其中には是非とも伺つてお禮を申すつもりでございます。

おまへあらさま
 汝彼方様へ上つたら、何様か妾が如はいふ心持を有つて居りますといふ事を云つて、十分にお禮を申上げて、而して五十の病氣の様子も伺つて来てお呉れ、と斯様に申すのでございます。それでお馴染みも無い妾ではございますが、他に参るものも無いのでございますから、一寸上つたのでございます。』

お龍は果さでは叶はぬ使者の役目を務め果せん一心に、一生懸命になりて如是述べ終りしが、辛くも吩咐けられただけは云ひ得たるにホツと氣息吐きて、男の様子を如何にと見れば、男は律義眞正直に物堅く慎みて耳を傾け、見す／＼の我が虚言を實に道理と聞けるやうなるに、此のやうなる人を口頭に操るはと、我差しき心地の爲たり。

『ハイ、一々精く解りました、承知致しました。お言葉が無くてさへいろ／＼に心配は致して居りましたのですから、其様いふお言葉を伺ひます上は猶の事でございます。水野が出来ます事は致しますから、五十子さんの事はお心遣無く、よく御養生をなすつて早く御全快なさるやうにと仰あつて下さいまし。五十子さんは必ず私が癒らせませす。』

何様どうしても一度は屹度癒きつとらせますと小生わたくしが申まをしたと仰おつしあつて下さいまし。』

人の命いのちは知るべからざるを、あゝ何なんぞ其言葉そのことばの男兒をとこらしく頼たのもしきや。
 聲こゑの大きなりたるも思おもはず誠意まことの籠こもりたればなるべし。如斯かくい云へる其
 の言葉ことばの力ちからあるに驚おどろかされて、お龍りゅうは今又改いまたあらためて窃そつと其人そのひとを伺うかへば、
 聊いさ、やつか窺うかがれたる淺黒あさぐろき面の、鼻筋はなすじ通り口締くちしまりて、巖いはも黒鐵くろがねも貫つらぬき徹とほすべ
 き精神きあひは、切れの長き尾上しりあがりの眼めの中うちの光ひかりに現あらはれたるに、生うまれて初はじめ
 てかゝる意氣組いきぐみの鋭すどくして烈はげしき、昔物語むかしものがたりの中うちの勇士ゆうしのやうなる人ひと
 を眼めの前まへに見みて、あゝ何なんといふ氣味きみのよい人と、深ふかきに望のぞむ千尺せんじやくの崖がけ
 に立つて吹き來くる秋風あきかぜに袂たもとを扇あふらせたるが如ごとく、凄すさまじきが中なかに爽快いさぎよきを
 覺おぼえて、怖こはらしくは思おもひながら好このましくも思おもひたり。

其三十二

かゝるところへ新あらたに茶ちゃをいれて持もち來りしお濱はまに、はつきりと美うつくしき眼めに優やさしくお龍りゅうを見て、しとやかに其その一いつ盞さんを取とりて薦すゑむれば、水野みづのを見みたる目めを此人このひとに移うつしては、懷ふ暗くらき常綠樹ときはぎの高たかく聳そびにたるを見みたる目めに、しほらしく咲さく初櫻はつぐらの、ぱつと明あかるき花はなの枝えだを忽たちまち見みたる心地こゝちして、おのづから胸むねも開ひらくるやうするに、お龍りゅうは、

『どうもはゞかりさま、恐れ入おそります。』

と身みを謙退へりくだりて會釋あしやくしつ、互たがひに顔かほを見合みあはせしが、笑わらふとも無なく嫣然にっこりとしたる彼此かれこれ一時いちじの笑容あみの中に、語うらで語かたり聞きかで聞きく心こゝろと心はたらきで、思おもへば思おもひ好すけは好すく性しやうの合あふ同士女どうしにょ同士な、何なにの故ゆゑとは無なけれど

も相あひなつかしみ相悅あひよろこびたり。

されどお濱はまは何時いつまで此處こゝにあるべきならねば、お龍りゅうと物語ものがたりして遊あそびたきやうの思おもひは仕しながら、一盞いつさんを取とりて水野みづのに與あたへて、好よきほどの

ところに茶具ちやぐを置き捨て、おのれは茶ちやの間に退しりぞきて二人ふたりの話を聞きけり。
お龍りうは猶なほ五十子の容態ようたいを聞きかでは叶かなはざるなり。

『ほんとうに段々だんぐとの深い御親切ごしんせつさまで、まことに有り難がたう存ぞんじます。
歸かへつて御言葉ごことば通りに左様さやう申し傳つたへましたら、何様どんなにか師匠しやうも悦よろこぶこ
とでございましてやう。左様さやういたしまして只今ただいまは、病人びやうにんは何様どんな様子やうすで
ございますの?』

『いや何様どやうも中々なか良くないのです。それで大おほきに心配しんぱい致いたしましたが、浅あさ
草くさの醫者いしやを招よびに行ゆきました歸路かへりに、たつた今いま此村このむらの醫者いしやに容態ようたいを聞き
きましたら、大おほきに見直みなほしたやうな具合ぐあひでして、重病ぢうびやうだから何なんとも云
へないが、此儘このままで日ひさへ經へて呉くれゝばまあ宣よいといふので……………』

『では食事しよくじなどは?』

『なか／＼まだ食事しよくじなんぞといふ段だんでは無ないので。やつと流動物りうどうぶつが
小量すこしばかり許入くらある位くらいです。しかし變へんさへ無なければ、大抵たいていは經過けいぐわ日數にっすうが定きまつて
居ゐるものださうですから。』

『案あんじるやうな事ことはまあ無ないのでございますか。』

『左様ばかりにもいきますまいが。』

『變の無いやうに致しかたは無いものでございましょうか。』

『そりやあ左様したいのは山々ですが、情無い事には醫者の力でも其處までは何様もなりません。』

『それぢやあ神様にでも御願申すよりほかには!。』

『然様です。とてもまあ其様な事よりほかには!。』

男の聲はこゝに至つて甚く沈めり。お龍は忽然として思ひ浮かぶところあり。我に對へる此人は誰ぞ。この人は是彼の普門品の主ならずや。何をか獨り物思ひして睫毛に露を湛へし人ならずや。あはれ戀故の信心で無かれかしと、よそながら我が念じ遣りし其人ならずや。何をか獨り物思ひして睫毛に露を湛へし人ならずや。瀟車の中の素振、先刻よりの應對、今の此の様子に、一切は解りたり。師匠は碌にも我に語らざりしが、此人は五十子といへるに深く思を懸けて戀せるなるべし。似合はしからぬ佛頼みにも其胸の中の苦さぞ知らるゝ!。嗚呼一昨年の我を男子にして見る、其の顔の愁に瘦せて情無い有様!

其の眼の戀に疲れきつて和やかなるところの彼の乏しさ!。血属や見
 寄の有りは有つても、まことに戀に悩む時は、いつか孤獨の身となり
 果てゝ、誰一人味方になつて泣いて呉れるものも無いのが世の習!。
 あゝ、憫然なく人!。と經驗ある身の思ひ遣り深く、

『あゝ、眞實に左様でございます!。神様佛様よりほかには左様いふ
 時には、御頼み申すところもございません。歸路には淺草の觀音様
 で、妾も御百度でも踏みまして、何様か快く御なりなさるやうに願ひ
 ませう。』

と云はれて水野も心嬉しく、

『そりやあ、有り難い御親切の事です。何様か病人の快いやうに祈つて
 下さい。』

と、全く平凡の人の如き挨拶をすれば、

『アラ、何様したのだらう? 先生が!。觀音様なんかに祈つて呉れな
 んて!。ホゝ、古ぼけた老婆かなんか見たやうに。』
 と何知らぬお濱は之を蔭にて聞きて、聞えぬほどに獨語ちて笑へり。

命令いひつけられたる事は大概果おほよそはたしたれば、ここにお龍りうはじめて隙ひまを得て、
『つい申しそびれて居りましたが先刻さきほどは何様も、とんだ過失そさうを致いたしました。此方こちらへ上つてお目めにかかる、貴下あなたが其方そのかただったのでまた吃驚致びつくりいたしましたのでございます。お怪我けがをさせまして眞まことに濟すみません、どうか御免ごめんなさつてくださいまし。』
と改めて謝罪わびれば水野みづのは慨然がいぜんとして、
『ナアニ貴女あなたに踏ふまれて流れた彼様な紅あかい水みづ、少許ちつとや若干量そつとなが流れたつて何なにが何なんでしやう！。ハ、ハ、ハ、ハ。』
と裏枯うらがれたる聲こゑして自ら嘲あざけるやうに淋さびしく笑わらへり。其意そのこゝろを解ときて知るよしも無なけれど、其の言葉ことばの異様ことやうにして其の調子てうしの悲哀かなしみを含ふくめるに、感じ易かん やすきお龍りうは一種いっしゆの感かんに打うたれて、頓とみには答こたへをさへ出いしかなかったり。

其三十三

お龍は徐に三絃の糸を弛めて三絃掛へ掛け納むれば、今日目見得に來りし小婢お熊は高麗鼠のやうにくるくると働きて、しきりに其邊を取り片付けしが、煙草盆の傍より玉の煙管のいと小なるを拾ひあげて洋燈近くさし出し、

『これ此様な物が遺ちて居りました、』

といふ。

一ト目見てお龍はそれを師匠に遞與し、

『こりやあ傳さんが遺れて行つたのでしやう。あの人で無けりやあ此様なものを持ちさうな人はありませんから。』

と云へば、お關は受取つて指頭に弄び、

『あゝ然様だよ、屹度彼の男のだよ。今日は妾も大變夙起を仕たし、汝も遠いところへ行つて來たので草臥て居るからつていふので逐ひ立て

ゝやつたもんだから、慌てゝ歸つて行つて遺れたんだらう。取り上げて仕舞つて遣らうか知らん。ハ、ハ、ハ、マア堪忍して遣ると仕やう。何でも彼の男は親類内かなんぞに、玉や石の細工をする家かなんぞを有つて居るんだよ。御覽よ、小さいけれども此品だつて買つたら廉くはなさゝうなものだぞ。』

と、一度はお龍に示して、さて火鉢の抽斗に無造作に藏ひたり。

『ハア左様なんでしやうよ。兎を呉れたんでも分かつて居ますよ。屹度叔父さんか何か、玉屋さんなんですぞ。』

『何様も左様らしいよ。妾も往日瑪瑙の好い色の簪珠を貰つたがね、汝、兎なんぞぢや仕様が無いぢや無いか。今度は寶石入りの指輪かなんか強請つて御遣りナ。金剛石とでも云つたら二の足を踏むか知らないが、サファイヤや真珠の位なら屹度二つ返事で悦んで持つて来るよ。物を取つて遣るのも功德になるのだから關やあ仕ない吹かけて御覽、相槌は妾が巧く打つて上げるから。』

『あら嫌な御師匠さん！。妾あ指輪なんか欲しかあ無いんですよ。しか

も傳さんになんか貰ひたかあ有りません。』

『然様かネエ。汝はほんとに慾に掛けちやあ氣が弱いよ。だが取つて遣る方が可ぢやあ無いか。あの兎でも知れてるは子、汝の氣に入つたのを見て何様なに嬉がつてるか知れや仕ないよ。』

『だから妾あ厭なんですよ。その嬉がられるのが氣障ぢや有りませんか。』

『ホイ大失敗だネ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。指輪の談で想ひ出したが、先に汝があ何に（源を指す）御貰ひのは汝有つておいで、無いネエ。妾が見立てゝ買はせたんだからまだ覚えて居るが、汝彼品は何様か仕てお仕舞かエ。』

『だって御師匠さん、まだ妾が彼品を持つて居やう譯は無からうぢや有りませんか。いよく不實な人だと思ひつめた時は、口惜くつて口惜くつて仕方が無かつたんですもの！。宿めて貰つて居た薬研堀のおとうさん——御師匠さんは御知んなさらないが妾の仲好しの其の家を出て、をかアしな氣になつてふらふらと兩國橋の上を往つたり復つたり

した其の擧句でした、ふいと意持が變つたんで指から脱して、大川の流れの中へ抛り込んで仕舞つたんですよ。』

『へーエ、勿体無い事を御仕だつた子エ、マア妾なら同じ棄てるにもお金に仕て棄てるものを。だが鑄掛松を色氣で行つたのは、一寸覗いて見たいやうな幕だつた子。』

『ホ、ゝ、厭ですよ。たと御嬲りなさい、人の悪い！。今なら妾だつて――。』

『何様御仕だエ、』

『御魚にやあ與らないで瞽女にでも與ります。』

『分別らしいけれど猶且若い子エ。ハ、ハ、ハ、瞽女が汝狂ひ浪の彫に小さな寶石の散らばつて居る彼様な華麗な物を指に嵌めて何様なるものかネ。』

『ぢやあ御師匠さんが妾だつたら何様なさるの？。』

お關は我が鼻を指さしながら、

『此處に居る美麗な可憐らしい新造に與つて悦ばせるはネ。』

と云ひさして、ハ、ハ、ハ、と打笑へば、お龍もホ、と笑ひ出し、臺所の方に退きたるお熊さへ貰ひ笑ひしたり。

『あゝ、笑つたんで心持が佳い。さあお熊や方方戸締りを仕てお仕舞ひ。お龍ちゃんも歸路に御百度まで踏んで御呉れぢやあ、ほんとに随分おくれたびれだらう。』

随意に休めといふ意は明らかなれど、お龍は眠りたくも思はぬ眠つきなり。

『足は些ばかり草臥ましたけれど、先刻お湯に入つたのでもう治りまして、氣は疲勞も何も仕やあしません。』

『いゝねえ若い人は！。戀もいさくさも其の威勢のある中の花なんだよ。妾なんざあ四つ木へ行かうもんなら二日位は腰が痛いので、しよぼけて居なくちやあならないんだよ。』

『ホ、虚言ばかり！。まだ御師匠さんはお若いは。そんな事を仰あつても水々として在らつしやるぢやありませんか。』

『オヤ汝こそ人が悪いよ、御調戲で無い。いゝよ、何様せ奢らないから、』

ハ、ハ、ハ、ハ、。

『でもほんたうですよ。』

渴^{かは}き氣^き味^みにや身^みを伸^のばして及^{およ}腰^{びこし}に火鉢^{ひばち}の横手^{よこて}の茶棚^{ちやだな}より小^{ちひ}き湯^ゆ吞^{のみ}を取^とり、鐵瓶^{てつびん}の湯^ゆを注^つぎて心^こゆたかに其^{それ}を冷^さまして飲^のめるお龍^{りゆう}を見^みれば、女^{をんな}には先^まづ目^めにつく髪^{かみ}の毛^けの漆^{うるし}と黒^{くろ}くて加^{しか}之^も膨^{ふつ}くりとしたる鬢^{びん}に、櫛^{くし}の齒^はの痕^{あと}あざやかに殘^{のこ}りて、肌^き理^め密^{こま}かに色^{いろ}白^{しろ}なる顔^{かほ}のほんのりと紅^{あか}きは、たゞ是^{これ}清^{きよ}き芳^{よしの}野^{がみ}紙^{さんご}の珊^{さん}瑚^こを包^つめるに異^{こと}ならず。ぎつに座^{すわ}つたる身^みの稍^{やゝ}歪^{ゆが}みて少^{すこ}し俯^{うつむ}いたるに、細^{ほつそ}りとしたる領^{りやくび}頸^びのいとゞしほらしく柔^{にう}

和^わに見^みえて、物^{もの}ごし恰^{かつ}好^{かう}牙^かえくと艶^{えん}なり。

お關^{せき}は見^み惚^とれたやうに良^{やゝ}久^{ひさ}しく見^み居^ゐつ。

『そりやまあ何^{どう}様^{よう}でも可^いとしたところで、矢^や張^{つば}りお前^{まへ}にやあ此^{この}頃^{ごろ}に御^ご馳^ち走^{そう}を仕^し無^なくちやあならない。ほんとうに汝^{おまへ}の氣^き合^あひの好^いいのは感^{かん}心^{しん}しちまふよ。歸^{かへり}路^{みち}には馴^{なじ}染^みも無^ないお五^い十^そのためにお百^{ひやく}度^どまで踏^ふんで呉^くれるなんて、何^{どう}様^{よう}すれば其^{その}様^{よう}なに優^{やさ}しい氣^きになつて、しかも俠^{せいき}氣^ぎな事^{こと}が出^で來^きるだらう。妾^{わたくし}や全^{すつ}然^{かり}お前^{まへ}にやあ惚^ほれつ仕^ち舞^まつたよ。お前^{まへ}さへ吾^{うち}家^けに

居てお呉れなら、あんなお五十なんか何様なつたからつて關やあ仕無
いよ。』

『あらマア飛んでも無い酷い事を！。お師匠さんの左様仰やるのを本當
にしたところで、五十子さんがお悪く御なんなさうもんなら水野さ
んていふ方が、何様に御騒ぎなさるか知れやしません！。』

『騒いだつて可やね、騒がして置やあ。』

『まだ詳しい御話を伺ひませんが、一體水野さんていふ方は何様いふ方
なの？。』

『オヤ／＼をかしいよお龍ちゃんは。今日お晝過に家へ歸つて來てか
ら、これで丁度水野の事を三度御聞だよ。ハ、まさか汝のやうに分
つた人が、彼様な唐變木に何様か御爲だとも思やあ仕ないが子。よつ
ぽど氣になるやうな變な顔でも仕て居たのかエ。彼や何でも有りや仕
ないのさ。たゞ彼村の學校の教師でもつて、平つたく云やあお五十に
惚れてるといふだけの鈍痴氣なんだよ。』

『だつて其なら妾が御師匠さんの御使に、わぎ／＼彼の人のところへ行

かなくつてもぢや有りませんか。』

『そりやお五十の事の關係から子、妾も困究つた時に彼男に融通を頼んだ事もあるし、今度も全然お五十が世話になつて居るからさ。』

『ぢやあ矢張り畢竟は五十子さんといつて居るからさ。』
『道理で心から底から御病人を大切に思つて居らつしやるやうに見えましたよ。ほんとに五十さんは御幸福な事！、あんな頼もしさうな方に御思はれなすつて！。』

『ところがお前、いくら彼の男が思つても、妾の云ふ事さへ聴かないやうな、へち頑固のお五十の事だから、嫌つて嫌ひぬいて關はないのだよ。彼の男の思なんぞは玻瓈に書く字で、以上經ても通りつこは無いのさ。』

『でも御師匠さんは終には彼の人を御婿さんにと思つてらつしやるでしやう。』

『だつてお五十が妾の云ふ事なんか聴くんぢ無いから仕方が無いやね。妾あ打棄つて置いて關やあ仕無いのさ。』

『あら憫然に、それぢやあ彼の人の立場が無いぢやありませんか。』

『だから唐變木で鈍痴氣だといふんだア子。』

『なんですすつて?!、マア!。』

優しき姿は其儘に、身動きは一寸もせざりしが、愛嬌こぼるゝ面ながら、じろりと斜に上睨みして、お關を見やりたるお龍の眼には、瞋るか恨むか蔑視むか、怪しき一種の氣味合籠りて、花の樹蔭に蛇の出でたる其狀にも似たる風情を見せたり。

其三十四

下物は論無し、たゞ鮮けきを用ゐる、酒は定例あつて、必ず醇なるを酌む、島木が性情見ゆる待遇に、日方は既酔ひて面を染め、大胡座かいて座れる、軍服の怒れる肩、五分刈の大なる頭、姿勢はまだ崩さず傲然として、葡萄酒の盞を手にながら、親しきが中の打解け話におのづから催さるゝ、歡びの色を浮べて、

『ア、快い心持だ、佳い酒だ。いつも葡萄酒とは贅澤な奴だ。羽勝が斷つて來たのは残念だが、酒は好し、主人の汝も好い男兒だし、客の乃公も大丈夫だし、談話が面白いので小氣味よく酔つた。』

と云ひさして満足げに仰飲ぎ盡せば、島木は例の布袋顔して笑ひ、

『ハ、、直と何でも自分の道に牽強けるナ。イヤ時の相場ぢやあ無い、全くの事だ。全く汝は好い男兒だ、所謂好漢だナ、快男兒だナ。』

『ハ、、大層風向きが好いが奢らねえぜ。何でまた其様急に値が上つた

のだ。』

『羽勝はがちから聞いて皆知みんなしつたぞ。能く汝きさまア彼の馬鹿野郎ばかやらうの水野みづのを、自分の危あぶなかつた間際まぎはで世話せわを仕して遣やつたナア。流石さすがに島木しまぎは島木しまぎだ、好いい氣象きしやうだ、と眞面目まじめに感激かんげきして羽勝はがちが話はなしたぞ。』

『ハ、ハ、それで汝きさまア萬五郎まんごらうに惚ほれたか。』

『ン、惚ほれたナア、ハ、ハ、。日方八郎ひかたはちらうも大おほきに惚ほれ込んだぞ。』

『嫌いやな野郎やらうだナア、好すかねえ奴やつだ。何程いくら惚ほれやがつても振りつけて遣やるぞ。』

『何故なぜ?。』

『惚ほれやうが一體氣いったいきに食くはねえから。』

『フーン、そりやあ又何またなんで。』

『それが分わからねえかえ、仕方しかたが無ねえナア。後學こうがくのために記おぼえて置おきねえ、惚ほれるのに理いは由はがあるやうぢやあ眞物ほんものぢやあ無ねえんだ。同おなじ此この萬五郎まんごらうに惚ほれるならナア……………」

『ウン。』

『乃公が悪い事を爲盡して、誰にも彼にも見放されてナ、溝ん中へでも蹴込まれたやうな時、萬ちゃん萬ちゃんッて云つて呉れるヤイ。左様したら其時ア此の萬ちゃんも、些少ア惚れ返して遣るめえもんでも無えんだ。』

『アッハ、ハ、甚い氣焰だナ、怪人の怪語だ。皮肉も其までになると愛嬌が出て面白い。ア、愉快だ大笑ひに笑つたので馬鹿に酔つた。久しぶりで一ッ朗吟をやるぞ。』

『宣からう。長い事汝の怒鳴るのも聞かなかつたナア。』

『蒲海の——曉の——霜は——、馬の——尾に——凝り——、葱山の——夜——雪は——、旗の——竿を——撲つ——。エースト。』

『鯨が鳴くやうな馬鹿聲だナア、障子が破けるからもう堪忍して呉れ、此邊の奴あ目を廻さあ。しかも唐人の囁語で毫末も分ら無え。戦の詩の句かえ。』

『ウン其様なもんだ。』

『有るかい？ いよく、戦争は。』

『そんな事は乃公達よりは汝等相場師なんぞの方が却つて知つて居るといふことだぞ。』

如是云ひ終りし時日方は忽ち嚴然たる面色になりて、

『いかんナア、此様な世態では！。實に慨歎に堪へん。』

と正しく島木には語るならで獨り歎ぜしが、忽地にして氣をかへて、

『丈夫——誓つて國に許す、憤惋——復何か有らん、だ。少尉やそこら

で物を思ふナア生意氣なんなのだ。』

と自ら寛くして打笑ひたり。

『時に島木！。何様だ今から一緒に水野を訪はんか。實は羽勝が來たら

君を誘つて、三人で尋ねて遣らうと思つて居たんだが。』

『フーム、萬一すると汝出征るのかナ。』

『イヤまだ其は實際分らんが、出るやうになるにしても出ないにしても、

此頃の水野の面色も見て遣りたいし、少し話を仕度いと思ふ事も有る

から。』

『ぢやあ汝の剛直な其の氣に任せて手強い意見を仕やうと云ふんだナ。』

「勿論だ。戀愛だなんぞといふ下らない事に、可惜水野を沈ませて置いて、知らん顔を仕て居ては友道が立たんと思ふ。諫めて諫めて彼の水野を、舊の水野に復らせるつもりだ。」

『そりやあ汝、人情は厚い行爲だが、智慧は足らねえ事だぜ。』

『ナニ?。』

『マア下ら無えから止めたら宜からう!。』

『なんだと。』

其三十五

島木は莞爾と笑ひながら酒を注ぎやりつ、

『また直に左様ムキになつて突掛つて来るよ。いくら酒の氣があるからといつて野暮な男だナ。』

何も決して怒るのぢや無い。しかし乃公が爲やうと思ふことを下らないとは何だ。智慧が足りても足らなくつても其は仕方が無い。黙つて知らん顔を仕ては居られんから尋ねやうといふのだ。其をたゞ一概に止めたら宜からうと云はれては面白く無い。何が下らない？、何故智慧が足らん？。」

『何故と云て、考へて見りやあ分る事だ。』

『いや分らん分らん、考へて見ても分らんに定つて居る。よし乃公の爲ることが智慧が足らんにして、智慧が足らんために其効が無いのならば、汝が智慧を添へて効があるやうにして呉れても宜い譯では無い

か。水野は乃公ばかりの朋友では無い、汝にも矢張朋友では無いか。朋友の道は何様するのが正當だ。互に氣に入るやうにばかり仕て居ればそれで可といふのか、そんな理窟がどこにあるものだ。勿論朋友の助け合ふのは知れた事だが、劍術を習へば竹刀に會釋無く引撲き合ふのが朋友の眞實だ、碁の一目、競射の一點に齒咬みを仕て争ひ合ふのも朋友の面白味だ。だから欺かぬ心も無くちやならん。競り合ふ氣も無くちやならん。まして眼に餘つたり腑に落ち無かつたりする事があれば、忠告も爲やうし、争ひも爲やうし、齒に衣被せず詈り詈らうとも、互に他人の物笑ひには、させぬやうに、又ならぬやうにと、男兒を磨きあふのが朋友の甲斐では無いか。それを何だ汝の此頃の仕方。たゞ水野の云ふ通りにばかり仕て與つて居る。そりやあ汝の俠氣の振舞は乃公も感謝して居るが、それほどに水野の爲を思ふなら、何故一步進んで諫めては遣らんか、彼の男の迷を解いては遣らんか、諫めても聽かずば何故争つては遣らん。士爭友あれば令名に離れずといふ孝經の語を、たとひ其語を知らんでも其の理合に昧いやうな汝では

無いが、何故汝は水野の争友にはなつてやらんのだ。云はゞ汝は水野を愛して、鼻負に仕過ぎて間無つた事をさせて居るのだ。いや頭を振つても左様で無いとは言はさん、見晴しでの汝の言葉といひ、羽勝から聞いた事實といひ、先刻からの汝の話し工合といひ、汝は水野の争友となつて、彼の男に過失無からしめてやらうといふ考は有たんで、却つて庇護ひ立をする氣味がある。其様な下らんことが何處にあるものか。』

『オイ、大上段に振り被つて睨み廻すなあ其邊で措いて呉れ。下らなくつても乃公は構はねえ。汝の云ふ事位は乃公だつて知つてゐるが、諫めたつて争つたつて役に立たねえ事だから、乃公あ意見も云はずに打棄つて置くんた。迷ふな／＼思ひ切れつて云つたつて、料簡方が煙管の羅宇のやうにすげかへが出来るものぢやあ無し、川柳が巧え事を云つて居らあナ、「極無理な意見魂魄入れ換ろ」つて。よく有る奴だが、いくら魂魄を入れ換ろつて云つたつて出来る相談じやあ無え。しかし水野に意見をするなあ汝の勝手だ。止せと云つたなあ大に御世話だつ

た。芝で會つた時云つた通りだ。乃公は乃公だから乃公は行かねえ。汝は汝だから行くなら行くがいく。』『よしッ、汝が行かんでも乃公は行かなくつて！。是から直に行つて諫めて遣る。熱誠を以て大に争つて遣る。惘然に、可惜好漢の水野を區々たる戀愛に悶死させて堪るもんか。日方は彼のために争友を以て任じて遣る。智慧の足らん男がするの結果を見ろ。』

『ハ、ハ、乃公の云た事が氣に入らなかつたからつて激しちやあいけねえ。出かけるるなあ可いが其猛勢で行つて、水野と喧嘩をしちやあ汝いけねえぜ。彼の男もおとなしいけれど蟲持だから。』

『ハ、ハ、しかし乃公の言ふ事を聽かなかつたら攫み挫ぐかも知れんぞ。』

『戯談ぢやあ無えぜ、人が眞面目で云つて居るのに。』

『大丈夫だ、日方は粗暴でもまさか喧嘩はせん。』

『いくかい大將、屹度だぜ、釘をさしたぜ。』

『ウン、よしッ。時に島木、』

『何だ。』

『汝が平生飲んで居る此の葡萄酒は中々佳いナ。』

『それほどぢや無いがマア飲めるよ。』

『手土産に仕て持つて行つて、久しぶりで水野と談しながら飲むのだ。些細な御用だ、二本ばかり徴發するぞ。』

『ハ、、、他の物を徴發して土産にするたあ此奴あ蟲がいく。可いく。持つて行け、今縛らせやう。』

其三十六

あさがほ はないろ こぞ とし おな
 牽牛花の花の色は去年と今年と同じく咲かず、人の心の傾きは昨日に
 けふ かは つね みづの す ひ にちゆう
 今日の変るが常ながら、水野は過ぎし日の日曜より、如何にかしけん
 いま みづの
 今までの水野にはあらずなりて、たゞ世にありふれたる爺婆の無智無
 がく こと
 學なるものゝ如くなりつ、ひたすらに御佛を頼み奉り、日にく我が
 つとめ をは ただち あさくさ はし ゆ
 勤務を終るや否や、直に淺草に走り行きて、本尊の御前に祈念を凝ら
 ならひ いた
 し、いつはり無き心の誠を獻げつくして、さて後やうやく寓に歸るを
 常習とするに至りたり。
 けふ にちゆう あた み いとま はま いつちも いぶか あやし
 今日の日曜に當りて身に閑暇あれば、お濱の何時もながらに訝り怪み
 そ うつく まゆ ひそ うしろ みす みづの ひるす
 て其の美しき眉を顰むるをば背後に見棄てつ、水野は正午過ぐる頃に
 いへ たちい
 家を立出でたり。
 きちあもん ほんけ さうだんご
 吉右衛門は本家に相談事ありとて招かれて去り、お濱一人餘令無く新
 かん さつし よ なべ あいて るす を
 刊の雑誌を読みながら、お鍋を相手に留守し居るところへ、

『山路。ウン此家だナ。』

と名札を讀んで獨語つやがてに、
大く、
洞魔聲の人を驚かすほど恐ろしく

『頼む。』

と一ト聲呼ばはれるものあり。

『誰か呼ばはつたでがす。』

『さうだね、お前出て御覽ナ。』

お濱は猶雜誌をば讀みつゞけ居しが、
應對の模様は明らかに聞ゆ。

『水野は居るか。』

『今ア居ねえでがす。』

『何處へ行つた。』

『知りましねえ。』

『しかし出たものならいづれ歸るだらう。』

『どうでがすかサ。』

『遠方わざ／＼來たものだから上つて待つて居やう。』

『いかねえでがす。待つせえお前様。』

お鍋は慌てゝ入り來りて、

『いやに身體の魁偉い尊大の野郎でがす。水野さんの事聞くから不在だつて云つたら、上つて待たうと吐します。どうして呉れますべい。イヤな奴でがす。』

と云へば、お濱は、辛く雑誌より目を離して笑ひ出し、

『分らないねえお前は、言葉の渡子ぢやあ水野さんと仲の好い御朋友らしいぢや無いか。どれ妾が行つて見やう。』

と立出でたり。

見れば客は血氣壯盛の陸軍士官にして、頭顱大く肩厚きさまは素人づくねの土人形などの如く、無骨一遍の正直さうな人なり。

『水野さんは今御不在ですが誰様でいらつしやいます?。』

言葉無く名刺を出して客の渡すを、お濱は手に取りて讀みて急に笑顔になりぬ。未だ面をこそ對せざりつれ、水野の友に其人あるよしの日方八郎といふ名は、かねて聞き馴れて何時と無く疏からず覺え居たれ

ばなり。

『たしか島木さんやなんぞと御一緒の、御同國の方でいらつしやいましたね。』

一應念を推すお濱をば、日方は眼を正しくして一寸見しが、何訝かるべくも無き處女の、たゞ伶俐なるべく見ゆるのみの清らなる娘なれば、
『其通り。』

と甚明らかに答へたり。

『水野さんは淺草まで御いになつたのですから、御退屈でも御待ちなさるならば、此方へ御通りなすつて。』

何時かお濱の背後に出て來り居しお鍋はそつと袖を引きて

『宜いですがすかエ其様な事を仕て、何だか蟲の好かねえ厭な奴がすよ。』

と心配し過して小聲に止むるを、お濱は顧みず日方を案内して、水野の室に通したり。

日方は水野が机の横にどつかりと座りて、

『ハ、ア何も裝飾さうしよくは無いが悪わるくない部屋へやだナ。相變あひかはらず有あるものは書籍ほんばかりで、長物ちやうぶつの無いところは流石さすがに感心かんしんだ。

と先づ評まする時とき、お濱はまはお鍋なべが汲くみ來きたりし茶ちやを鷹すむれば、

「君きみは此家こゝの娘むすめさんかナ。どうだ水野みづのは。此頃このころも相變あひかはらず勉強べんきやうか。」
と話し仕度したさに打解うちとけて問とふを、水野みづのくと呼びつけにするが小面こづら憎にく

くてか、

『ハイ。』

と僅々わづか一句いっくに答こたを切りて、

『御自由ごじゆうにおいでなすつて。』

と言いひ棄すてしまふ、突つと次の間つぎのまに出いで唐紙からかみびつしやり、お鍋なべの後あとを追おふて茶ちやの室まに退しりぞけば、お鍋なべは、手ての甲かみを口くちにあてゝ笑わらひながら、

『女をんなを呼よべるのに君きみだなんて、ホ、ハ、ハ、ハ。』

と、げらつきて已やまず。お濱はまも睨にらむ眞似まねして叱しかりは叱しかりながら、おのれも口くちのあたりに笑わらを浮うかめぬ。

話敵はなしがたき無なき所在しよざいの餘あまり、日方ひかたは其邊そこらを見廻みまはしつ、机つくゑの上うへに在ありし折をり

本^{ほん}に偶然^{ふとめ}目^めを着^つけて、手^てに取り^とて何^{なに}心^{こころ}なく披^{ひら}き見^みしが、忽^{たちま}ち其^{そこ}所^{ところ}に抛^{はな}り出^{いだ}し、

「何^{なん}だ、普^ふ門^{もん}品^{ぽん}！。何^{なん}だ是^{これ}は何^{なん}だ！。御^お有^{ありがた}難^{れん}連^{れん}の誦^よむものではないか。まさか水^{みづ}野^のが信^{しん}心^{じん}するのではあるまいが、如^{ごと}是^しなものが机^{つくえ}に載^のつて居^ゐるのは何^{どう}様^{よう}した馬^ば鹿^かな事^{こと}だ。

と其^{そこ}處^{ところ}に罵^{のの}るべき人^{ひと}にてもあるが如^{ごと}くに罵^{のの}つたり。

其三十七

待てどもく、水野は歸らぬなり、此家の者は彼方に退きて音もさせぬなり、日方はほとく、身を持餘して、四圍の書などを手あたりまかせに抽き出しては讀み散らし居しが、それにも忽ち倦きて無聊に堪へかね、小齋の靜坐には更に慣はぬ身の、何をがな消閑の具にと見回す折しも、携へ來し二罍の酒に眼の止まれば先づ微笑を浮め、

『仕方が無い、これでも飲んで待つて居て遣らう。』

と口にこそ言はぬ心に思ひて、

『オイ、君！。オイオイ、君！。』

と呼び立てたり。

『ハ、ハ、また君イ君イつて呼ばつて居るですが、妾が君イになつて出て行きますべいか。』

『ホ、ハ、ハ、い、よ、妾が行つて見るから。』

お濱は立つて客の前に到れば、

『此酒を飲つて居ながら待たうと思ふのだ。栓抜きと洋盞とを假して呉れたまへ。』

と酒罎を指さしながらの無邪氣の言なり。

『ハイ、洋盞はありましたが、栓抜きが………。』

とお濱の一寸行詰りしも無理ならず、誰も洋酒など用ゐるもの無き温厚者揃ひの、此家は特に隠居處の事とて當世の人の出入もおのづから少きより、事少き村住居の簡素に馴れて、今日の今まで栓抜きに用も無かりしほどなれば、貸さんと欲して其物無きに困じ躊躇へるなり。

お鍋を隣家に走らしめんか、隣家はたゞの小前なれば、猶さら栓抜きどの有るべくもあらず、さらば本家に至らしめんか、本家と此家との餘り隔りたり、如何せん、とお濱は少時迷ひたりしが、ふと水野が洋小刀に栓抜きの添ひ居しを思ひ出し、先づお鍋を呼びて小き盆に洋盞を載せて持來たらしめ、おのれは机の周圍、本箱の上などを見つ、彼の心當の小刀をと尋ね搜したり。

されど小刀ナイフは外そとに出いで居をらずして、終つひに見み當あたる事無ことなかりしかば、若もしや此内このうちにと、机つくゑの下したなる手箱てばこを引出ひきいして、日頃ひごろの心易立こゝろやすだてに何なにの氣きも無なく搔撈かいさぐれば、書簡てがみ、雜記帳ざつきちやう、物書ものかきさしたる反故ほごなんどの底そこの方かたより洋小刀ナイフは出いでたり。

『や栓拔せんぬきは此品これで澤山たくさんだ。何だか面白おもしろいものが出でさうな匣はこだナ。どれ退屈たいくつき紛めらしに見みてやらうか。』
日方ひかたは眼快めばやく既すでに彼かの小刀ナイフを取りとて、猶なほまた其匣そのはこの内うちの物ものを見みんとすれば、

『およしなさいよ、他人ひとさんの物ものを。貴下あなたは亂暴らんぼう子こ。』

と窘たしなむるが如ごとき口氣こうきに強つよく云いひ懲こらして、お濱はまは直たゞちに匣はこの蓋ふたを閉とぢ、机つくゑの下した深ふかく押入おしれつ、無遠慮ぶゑんりょも程度ほどのあるものをと腹立はらだちて、あどけ無なき顔かほにも瞋いかりを含ふくんで其處そこを退しりぞきたり。

もとより年もゆかぬお濱はまなどには眼めも呉くれざる日方ひかたは、手酌てしやくの無興氣ぶきようげに一盃いっぱい一盃いっぱいを重かさねしが、飲のんではいよく相手あいて欲ほしさに獨居ひとりゐの淋さみし

く、所在しよざい無なきの餘あまりのわざくれに、前さきに見みて手て匣こを我わが前まへ近ちかく引ひ寄よせ、内うちなる雜ざつ記き帳やう様のものを取出とりだして、此頃このころ水みづ野のが如何いかなる事ことをか書かけると、其それを知しりたきばかりの好かう奇き心しんに隔へだて無なき中なかとて無ぶ遠えん慮りにも、一いつ盃ぱい仰あふいでは一いち葉えい翻ひるがへし、一いち枚まい讀よみては一いつ杯ぱい仰あふいで、終つひに我われ知しらず醉よひに入りぬ。

冊さうし子しは何なにくれと無なく水みづ野のが讀よみ過すごしたる或あるひは國こく書しよ或あるひは漢かん籍せき、或あるひは洋やう書しよの其中そのうちより、我わが意いに適てきしたる語ご、詩し句く、事じ實じつなんぐを、或あるひは原もとのまゝに、或あるひは引ひ直なほして、筆ふで任まかせに記しるしたる眞ま實ことの雜ざつ抄せうにて、恰あたも人ひとの摘つみ集あつめし花はなのいろくの線せんに貫つらぬかれたるを見るが如ごとく趣味おもひきあるものなれば、日ひ方かたは心こゝろ竊ひそかに水みづ野のが苦く學がくを怠おこたぬを悦よろこびながら讀よみ居ゐしが、讀よむ事こと半なか途ばにして間なかに介はさまり居ゐし一いつ片ぺんの紙かみの偶ふと然と飛いび出でたれば、何なんならんと急きふに手てに取りて見るに、第だい七なな番ばん凶きようといふ觀くわん音おんの御み籤くじなり。

『いかなナ。何どう様やうも怪をかしいナ、此こん様やうなものが出でるとは。机つくえの上うへには普ふ門もん品ぼんがある、こゝには此こん様やうなものが介はさつてゐる。何どう様やうしたのだらう、何なんだが怪おかしいナ。』

されど怪しき事は介まり居し其のみにして、冊子の三分の一ほどは猶
 白紙の物も書かれず残れるなり。これまでと日方は其の冊子を伏せ
 棄て、盃を啣みて物を案じ居しが、見るとも無しに見れば冊子の後
 の表紙には、反故染といふもの、如くに、落書の上に落書重なりて、
 縦横斜角に何か書されたり。何事を加是は落書したりしやと、読み易
 きを辿りて一トつゞきを讀めば、此は一首の歌にして、
 立ちて居る方便も知らに我が心天つ空なり地は踏めども
 とありたり。

『フ、ーン、精くは分らんが戀の歌だナ。水野が詠んだのか知らん。ウ
 ン彼のだらう。も一ツは何だ、ン、是も歌かナ。ナニ。

天地に少し至らぬ大丈夫と思ひし我や雄心も無き

ハ、ア、舊は絶大な抱負も有つた身だがと、戀に迷つた今を自ら悲む
 歌だナ。ア、佳い歌だ、乃公にも解る。天地にも多くは劣るまいと思
 つて居た此の我身だがなあと、戀の苦しさに萎たれて、呻き出した此
 の歌の主の腹ん中が惘然惘然でならん。此方に書いてあるのは何だ。

何だなんと。

大丈夫ますらをのさとき心こころも今は無いまし戀こひの奴やつこと我われは死しぬべし

ア、いかんく、怪けしからん事ことた、馬鹿ばか々々しい。散ちらして書かいてある此この讀よみにくいのは何なんだ。

久堅ひさかたのあまみづ

エート、

久堅ひさかたの天あまみつ空そらに照てれる日ひの失うせなん日ひこそ我わが戀こひ止やめ

いかんナ、いかんナ、斯か樣恐おそろしく思おもひ込こんでは始しま末まつが着つかん、

斯かうめちやくちや樣滅こなた茶ひかた苦む茶ちうになつては實じつにいかん、大馬鹿おほばかやらう野郎やろうだ、戀れんあい愛いきやう狂きやうだ。』

此方こなたにては日方ひかたが夢む中ちうになつて醉よひに乗じようじて如かくの、し是とき罵ののれる時とき、彼方かなたにては

お濱はまが悦よろこびに冴さゆる聲こゑして、

『マア遅おそかつたのネエ、大變たいへんに待まつてたは。それにアノ日方ひかたんといふ人ひと

が來きて待まつて、よ。』

と忙せはしげに言ものいへば、同おなじく聊いさ、疾はやくち辯べんに、

『左樣さうかエ、觀音くわんのんさま様であのお龍りうつていふ人ひとにひよつくり逢あつて、あの

人の朋友だとか云ふ立派な婦人と二人に無理に強ひられて御馳走になつたりなんぞ仕たものだから、大に歸りが遅くなつて仕舞つた。日方は一時間も前から待つて居てかエ。』

と、水野が語る聲の爲たり。

其三十八

この好まぬ酒を人に強ひられて、水野は既に醒めたれども三分の酔あり、
この好める酒を一人汲みて、日方は猶足らずとすれども七分の酔あり。
たゞさへ酔へる同士は打解け易きに、まして是は一ト方ならぬ中の舊
友の、たまさかに相逢へるなれば、笑顔に云ひ出されし、

『ヤ』

『ヤ』

の一ト聲より先づ碎け合ひて、

『其後久しく會はなかつたナア。』

『ほんとに長い事會はなかつたナ。』

『ウン、乃公が候補生になった時祝して呉れた會で會つた限りだつた
ナア。』

『ア、左様だつた。早いものでもう大分過去になつた。』

と互に懐かしげに凝然と面を見合ひしが、水野が目には日方が肥え肉づきていよく男兒らしく立派になれるが、羨ましくもまた好ましく見え、日方が眼には水野が痩せ衰えて往時の生々としたる氣合の失せたるが、情無くもまた口惜く見えたり。

『日方！ 久しいと云つても僅見無い中に、君はまあ實に立派な好い身體になつたナア。』

『乃公は其様なに云はれるほどでもないが、水野、汝はまた、大層痩せ枯びて年を取つたナア。』

主人も客も共に一種の言ひ難き感に打たれしが、日方は猿臂を伸ばして水野の手を執り、

『この骨つぽい痩せ切つた此手が、相撲取りを仕ては随分手ひどく乃公を投げつけた事もある脅力のあつた手だらうか。此の様子では今では乃公には、中々敵ふどころではありは仕まいが。』

と云へば云はれたる水野は歎じて、

『ア、今ぢやあ一ト堪りも無く負かされて仕舞はう。これほど衰へて

居るとは自分でも思は無かつたが、君のがつしりと仕た手と斯様比べては、羞かしいやうな心持が仕て、物悲しい淋しい感じがする。』
 と蔽すところも無く思ふまゝを打出したり。お濱は小娘の智慧の乏しけれど心ばかりの響應に、お鍋と相談して、干魚を焼きて裂きたると漬物とを、酒の下物にと案じ出して持來りて歸りしが、日方はそれにも心づかぬ如く、

『左様だらう、定めし左様いふ感じが仕やう。舊と異つたとは乃公ばかりでも無い。汝は羽勝にもまだ會ふまいが、彼も鐵のやうな男兒に自分を鍛ひ上げて、料簡にも言語にも身體つきにも、弛緩けたところの無い確固漢になつて來たぞ。もとから一ト風ある男だつたが、いよく實が入つて物になつた。今に見ろ、何か遣り始めて、生命さへ有りやあ屹度遣り遂げるは。島木が金を出して船を買つて、遠洋漁業を爲るとか何とか云つて居るから、いづれ着々と歩を進めて居るのだらう。今日も實は島木のところで羽勝と乃公と、三人落合つて此家へ來る筈だつたが、羽勝に差支があつて斷つて來たので、島木は出ない

と云ふし仕方が無いから、そこで乃公一人で出て來たのだが……、
 水野ッ！、久しぶりで會つて顔を見ると直と、面白く無い事を云ひ出
 すやうだけれど、猿が物を含んで溜めて居るやうに、思つた事を口の
 内にまごつかせては居られない乃公だ。汝の俊寛くさい血の氣の足
 らん其面つきを見ては、狗骨樹の皮を剥いたやうに瘡せつこけ切つた
 此様な手を見ては、云はずには居られん。厭でも應でも聞いて貰はね
 ばならん。日方は汝に苦いことを云はうためにわざ／＼此家へ來たの
 だ。さあ確乎として熟く聞いて呉れ水野！。』
 と居丈高となつて聲色激しく説き出したたり。

其三十九

かつて島木が我に告げし言によりて、日方が今何を云はんとするかを
 水野は猜し知れるなり。

我を思ひ呉る、朋友の眞情より、我が戀に悩めるをば愚なりとして、
 説き醒まし呉れんとする其人に對ひては、そもく如何なる言葉を
 もて應ふべきぞや。辯解すべき事にもあらず、また本より云ひ戻くべ
 き事にもあらねば、慎みて聞くよりほかの事は無かるべし。されど人
 の言葉を聞きて思ひ止まることの叶ふほどならば、世に戀に悶ゆるも
 のは一人も無くて、他人に云はるゝまでもあらず先づ我と吾が分別
 に、よしなき惑は思ひ斷るべきを、諦めても諦めても諦められぬにこ
 そ生命の縮むをも忘れ人の謗をも顧みて悩み苦みはするなれ。それ
 を如何に朋友の眞の情より道理せめて云ひ諭されたりとて、口には
 思ひ斷えたりとも云ふべし、心より全く改むる事の何として成るべ

き。たゞ他人の親切にて言ひ呉る、事は、よしや少しは無理なる廉ありとも受くべきが道なれば、水野は頭を垂れ肩を窄めて黙々と、雨に濡れたる鶏の如く力無げに、悄然と日方の云ふところをば聞かんとなしたり。

日方は水野がしほらしき此態を見てあはれを催し、新にまた葡萄酒の栓を抜きて、水野が座の横に何時か置かれたる酒盞に注ぎ與りつ。

『しかしまあ其様なに堅くならんでも宜い水野。一杯飲つて呉れ、わざ／＼持つて來たのだ。久しぶりですと汝と一緒に飲らうと思つて、島木のところから徴發して來たのだ。何も左様危坐つて貰はんでも宜い、汝と乃公との中ぢや無いか。乃公はサーベル三昧、汝は書籍三昧、たづさはる道が異ふので姑く遠かつたが、幾年か前は一ツに居て、醉眠秋被を共にし、手を携へて日に同行すといふ古い詩の句の通りを其儘の境界だナアと、ソレ笑ひ合つた事も有つた中だもの、遠慮も斟酌も有らう筈は無い。さあ左様いふ中だによつて黙つては居られんで、言語に艶も付けず露骨に云ふが、水野！ 汝は何で情無い魔

に憑つかれた！。我々われの中うちで年としは若いわかが、聰明そうめいで慾よくが寡すくくて學問がくもんが好す
 で、立派りつぱな學者がくしやか詩仙しせんかにならうよりほかには爲なりやうも無いと思おもつ
 て居ゐた汝きさまが、此頃このころの墮落だらくの仕方しかたは何なんといふ情無なさけない態ていだ。隠かくしてもいか
 ん悉皆みんなし知ちつて居ゐる。其その顔かほの憔悴やつれは何なんからの事ことだ！。其その身體からだの枯稿やせ
 は何故なにゆゑの枯稿やせだ。惘然かあいさうに其様そんななひがいすな身體からだになつて何なんが出來できや
 う。眼めに見みえるところさへ其通りそのとほだもの、まして心こころの弱よわりは何程どれほどだら
 うと思おもひ遣やられて、汝きさまのために涙なみだがででる、口惜くちをくなる、腹はらが立たつ！。
 それも此これも時ときの災わざはひ、人の爲せいの故ゆゑでもあればこそ、汝きさまの一心いつしんの据すゑやう
 が悪わるくて、高たかの知しれた一婦人いちふじんに氣きを取とられたからとは、平生ひじろの汝きさまにも
 似合にあはん愚ぐな事ことでは無いなか。婦女ふんなが何なんだ！。戀こひが何なんだ！。たとひ美女びぢよ
 だらうが賢女けんじよだらうが、我われを迷まよはせりやあ我われの仇敵かたきだ。男兒をとこの正氣ほんきに
 なつて働はたらかうといふ事業しごとの、障礙しょうがいになる奴やつあ悉皆みん皆な仇敵かたきだ。戀こひたあ料簡れうけん
 の弛ゆるみへ出でる儼かびだ、閑暇ひまな馬鹿野郎ばかやらうの掌ての中なかの玩弄おもちゃ物やだ。世間せけん一體いつたいの
 風ふうとは云いひながら、新聞しんぶんを見みても書籍ほんを見みても、戀こひだ董すみれだ蝶てふた百合ゆりだ
 と、女臭をんなくさいことばかり流行はやつて居ゐて、まるで明治めいじの若いわか奴やつは、戀こひをす

るために此の世の中へ生れて來たので、希望も事業も無いもの、やうだが、水野！ 汝まで其風に感染れたとは何たる事た！。南風が吹きやあ北へ貼然、又北風が吹きやあ南へ貼然する、平々凡々の草のやうに、自ら立つて居る事が出来ないとは見下げた奴だナ。其様な腰の無い奴では無かつたが、汝も一世の風潮には捲き倒されない男兒らしい男兒になりかねて、波に隨ひ浪を逐ふ意氣地無しなつたか！。』

其四十

『水野、よもや汝はまだ自分で云つた事を忘れるほどに耄碌は爲まい。數年前に我々が寄り合つて、互に抱負を述べて談笑した時、大丈夫の身をもつて詩文の小技に身を委ねやうとは何の事だ、雛蟲篆刻壯夫は爲さずと、楊雄づれでさへ云つて居るのに、歌のポエムのと捏ね返して、食へもせず衣られもせぬものに苦勞しやうとは、道樂過ぎて餘り詰らぬと、乃公が口を極めて非難したらば、今と異つて元氣のあつた其頃の汝は、眉を昂げ面を正くして凜然と答へた其の挨拶に何と云つた！。食は身の糧、詩は心の糧、衣は暑さ寒さに對して人の身を護り、詩は悲みにも怒りにも對つて人の心を調へる、それを益の無いもののやうに云ふは淺ましい誤謬。貝に眞珠あり、人に詩あり、詩歌を除きて人の作れるものに、野菊の花の一輪だけの美しさのあるものも無く、阿房威陽は羞しく醜い。美しき胸の働きの目にも見えぬが、

凝^こつて詩^しとなつて文字^{もんじ}に現^{あら}るれば、讀^よむもの恍^{くわう}惚^{こつ}として我^{われ}を忘^{わす}れて、
 作^{つく}る人^{ひと}が泣^なけば泣^なき、憤^いれば憤^いる。されは人^{ひと}間の性^{せい}情^{じやう}を敦^{あつ}くし、世^よの
 氣^き風^{ふう}を嘉^よくするもの、詩^しに越^こすまのは無^ない。大^{たい}言^{げん}のやうだが此^この水^{みづ}野^の
 は、たゞ蝶^{てふ}花^{はな}のおもしろさや月^{げつ}露^ろのあはれさを歌^{うた}つてのみ我^{われ}が一生^{いっしやう}を
 過^すさんとは仕^しない。百^{ひゃく}年^{ねん}千^{せん}年^{ねん}にして一^ひ度^{たび}出^いづる大^{だい}詩^し人^{じん}の、一^{いち}代^{だい}の
 人^{じん}心^{しん}を新^{あらた}にして、萬^{ばん}世^{せい}に天^{てん}意^いの眞^{まこと}を傳^{つた}へんとする、其^{それ}は及^{およ}ばざる願^{ねがひ}
 にもせよ、時^じ勢^{せい}の幫^{ほう}間^{かん}となつて徳^{とく}を頌^{しょう}するやうな賤^{いや}しい意^いは微^{こゝろ}塵^{じん}も有^も
 たない。長^{なが}い眼^めで見^みて居^ゐて呉^くれたまへ、此^この水^{みづ}野^のはたとひ世^よに背^{そむ}いて
 も世^よと爭^{あらそ}つても、屹^{きつ}度^{とち}血^ちもある涙^{なみだ}もある詩^しを作^{つく}つて、聖^{せい}代^{だい}に生^うまれ合^あは
 せた男^{をとこ}兒^こ一^{ひと}人^{ひとり}だけの、任^{つと}務^めは其^{それ}で果^{はた}すつもりだと、さも潔^{いさぎ}よく言^いつ
 たては無^ないか。ヤイ水^{みづ}野^の！。詩^しの一^{いっ}篇^{ぺん}も作^{つく}らうといふものが、現^{げん}在^{ざい}の
 人^{にん}情^{じやう}世^せ態^{たい}に眼^めは離^{はな}すまいが、今^{いま}の日^に本^{ほん}の状^{ありさま}態^{どう}を何^{どう}様^{よう}思^{おも}ふ？。汝^{きさまた}！。今^{いま}
 の世^せ界^{かい}の状^{ありさま}態^{どう}を何^{どう}様^{よう}おもふ？。汝^{きさまた}！。浪^{なみ}の立^たたない海^{うみ}も無^なければ、風^{かぜ}
 の荒^あれな^ない空^{そら}も無^なくつて、國^{くに}は國^{くに}と競^せり合^あひ、人^{じん}種^{しゆ}は人^{じん}種^{しゆ}と闘^{たう}ふ、世^せ
 界^{かい}の浪^{なみ}風^{かぜ}は轟^{がう}々^くとして、我^{われ}が國^{くに}の濱^{はま}へも磯^{いそ}へも寄^よせて來^きて居^ゐるでは

無いか。それだのに國內の狀態は怎樣だ。武士道は廢り儒教は棄てられ、舊い教は壞れ果てたが、眞面目に受け入れられた新しい教も無く、過去帳を読むやうに哲人の名ばかりは忙しく呼立てられて、やがて直片端から忘れて行かれる！。社會に善惡の目安が無いから、勝手次第の強いもの勝、智慧で争ふ、言説で争ふ、筆で争ふ、金で争ふ、しかし道理で争つたのを聞いた事が無い。金を欲しがる、權威を欲しがる、名を欲しがる、肉慾の満足を欲しがる、しかし徳を欲しがるものは藥に仕度も無い。坊主が役立たん、新聞記者が頼もしく無い、教育家が下らん、學者は學說の桂庵ばかりで、文學者は春枝さん靜枝さんの御機嫌取りに過ぎん。世間一體は全で不調子で、錢のある時はハイカラになり、錢の無い時は蠻カラ、忤は戀愛論、親父は料理談、滔々として一般の趣味は日に墮落して居る。想つても恐ろしい世界のありさま、見るさへ嫌な人情の調子、彼と此を思ひ合はせれば、此の無骨不風流の乃公でさへも、無限の感慨に打たれて、詩のやうなものが呻き出したくなる、まして汝が感慨の無いわけは有るまい

何故一片歌々たる神州男兒の丹心から、國を愛し世を憂ふるの誠を
 披瀝して、詩でも文章でも作り出して呉れぬ？。手緩い事では無い、
 今の今でも國運を賭して戦争を始めればさしずめ乃公たちは水火の中
 にも飛びこまねばならぬ時に逼つて居る場合だ。しかし詩は興が發し
 ないと云へばそれまでの事、出來んなら出來んで是非は無いが、汝ま
 でが世の風に負けて戀愛騒ぎをすることは何事だ。そんな柔弱な、性根
 の抜けた事で、何の詩も歌もあつたものか。時勢の幫間とならぬと云
 った其の意氣は今どこに在る？。正しく汝は時勢の幫間となつた、奴
 隸となつた、狗となつた！。男子の眞の心を失つた。男心も無い白痴
 になつたナ。戀の奴と我は死ぬべしとは何たる事だ。此の普門品は誰
 が誦んで、其の下らん御籤といふものは誰が抽つた？。ちらりと聞け
 ば觀音詣して、而して纔と今歸つて來たのだナ。汝が思つて居る女
 が大病だとかいふ島木の談話も思ひ合はせて、すっかり汝の所業は
 分つたが、女のために經を誦んだり、御籤を取つたり、わざく淺草
 まで歩を運んだりして居るのだナ。エーツ情無くも衰へに衰へた奴

だ。書も読み理にも昧からぬ水野ともあるものが、如何に迷へばとて一婦人のために、それほど愚になつて、成りきつたか。魔に憑かれたか何に憑かれたか、全然正氣の沙汰では無いが、男兒の魂魄が少許でもあれば、正氣に返れ、正氣に仕てやらう。目を覺ませ水野。』

と云ひさまに、普門品を右手に驚握みにして、左手に水野を取つて引伏せ、

『情無い奴だ！。正氣に返らんか、朋友の情誼だ、身に染みて受ける。』

とビシリくと續けさまに打つたり。

其四十一

苟くも男兒なり、辱しめられて怒を發さざるはあらず、特に表面こ
 そ柔和なれ、心の底には王侯貴人をも重くは視ぬほどの水野の、如何
 に朋友の好意よりの振舞とは云へ、物も云はさずに手荒く打擲かれて
 は、勃然として胸に衝き上るもの無きならねば、我が襟を捉へし日方
 の手を、急に振ぢ放して身を退きつ、嚴然居ずまひを正して眼つき嶮
 しく無言に見返し、が、あ、思へば今我こ、に何をか言はん、まこと
 や我は往時の我ならず、比べて明らかに知る、身體衰へに、心の衰へ
 も自ら知る！。まさかに一旦懷きし本來の志を、忘れ果て、好いと思
 ふやうな氣は持たねども、正直を云へば何時の間にか、空に物をのみ
 思ふ癖のつきて、自分の心にも自分の心が何様もならぬといふ情無い
 身の上、これではならぬと思ひ返しても、思ひ返す其下より其人の事
 ばかりが思はれて、茫然として日を暮らして仕舞ふ羞かしい境界。む

かしは若い氣勢に神も佛も頼まざりしが、信ぜずには居られなくなつて今信ずる此の我が舉動を、他より見たらば、成程意氣地の無い愚夫愚婦の所爲と、譏られても罵られても仕方無く、云ひ解かうに云ひ解かうところも無し。されば打たれても擲かれても罵られても、男兒らしく顔を擡げて云ひ争はうには、餘りに云ひ甲斐無くも思ひに弱れる我かな。あ、我ながら情無くも情無し。せめて他に打擲かれて憤を發して、思ひ切る事の叶ふほどの淺き戀ならば、此の頼もしき我が友の情誼に、打つてく脊骨首骨の碎くるほど打つて貰はんを打たれても擲かれても我が心の、死に近き馬のやうに動かぬが情無い！と擡げし頭を何時かまた下げ、一度肩を聳かしたる身の復崩折るれば、其の様子を見て取りて日方はいよく齒痒がり。

『エ、男兒らしくも無い、其面は何だ！。身を退いて眼を睜つて乃公を見た時は、水野汝もまだ話せると思つたが、やがて直に力の脱けた泣きつ面になつて、涙ぐんで俯いたのあ、ア、見ぐるしいは。なるほど大丈夫のさとき心も今は無いだらう、其の狀態ぢやあ戀の奴と死ぬの

も遠くもあるまい。汝は戀の奴となつて死ぬのが本望か知らんが、氣
 の毒だが左様は乃公が死なさん。ヤイ水野、日方はいたづらに怒罵暴
 行はせん、たゞ大切の一人の朋友の爲にナ。才を惜み名を惜んで遣
 ればこそ争ふのだ。乃公の大切の朋友の水野何某を、一婦人に迷つ
 て戀に死んだとは笑はさん。とても汝が戀に死ぬほどならば、此の
 日方八郎が打殺して遣る。汝は羽勝の會へも出て來なかつたほど、朋
 友には薄く戀に厚くつても、乃公は朋友には厚くする、戀には關はん。
 父母の名も顯さんで戀に死なうとは不孝な奴だ、國民の義務も碌に果
 さんで戀に死なうとは不義な奴だ、生を此世に受けた甲斐も殘さん
 で空しく死なうとは卑劣きはまる！。身勝手ばかりの殺潰しとは戀
 に死ぬやうな白痴た奴の事だ。才を惜んで及ばん以上は名を惜んでや
 る！。汝を不孝不義卑劣な殺潰しとは呼ばさん、戀には死なせん、打
 殺すが何様だ。』

と激語は口より出づるに任せて、ふた、び水野を引据ゑて打たんとす
 る時、隔の襖はすらりと明きて、春の燕と身も軽く、ひらりと躍り入

つたるお濱は、突然に日方の拳に取りつきで、是はと迷ひ疑ふ間に、
早くも其手より普門品を奪つて、口惜しさ憎さ取り交ぜて籠むる力の
有らん限りに、日方の五分荳頭をびしやくと打つたり。

其四十二

犬坊丸に鞭撻たれたる曾我の五郎を今様にして見るごとき日方は且驚
 き且呆れて、眼を圓くして我を打つものを何者と屹と睨めば、夕日
 かゝやく緋櫻と燃に立つ顔して、匂やかなる眉を昂げ美しき眼を瞋ら
 せたるお濱は、其時日方の面上を望んで普門品を抛ち棄て、物言ふも
 可厭と云はぬばかりに突と後向き、身を翻へして倒るゝが如く水野の
 膝に突伏し、忽ち堰き上げくる涙の聲になつて、

『エ、口惜しいゝゝ、あんまり口惜しい！。こんな醉漢の亂暴人に、
 何故黙つて打たれて居無くてはいけないの？。何故打返してやらない
 の？。だから觀音様なんぞ信心するのはをかしいと云つて妾が止めた
 のに、先生が餘り夢中になるもんだから、人に馬鹿にされて此様な
 目に會ふやうになつたのよ。それもみんな五十子さんが悪いお蔭よ、
 あゝ口惜しい！。妾が口惜しくつて仕方が無いから、こんな醉漢の無

茶^{ちや}な人^{ひと}なんか、早^{はや}く妾^{わたし}の家^{うち}か逐^おひ出^だして遣^やつてよ先生^{せんせい}！。ほんとに憎^{にく}らしい厭^{いや}な奴^{やつ}だつちや無い。エ、何^な故^ぜ先生^{せんせい}は黙^{だま}つてばかり居^ゐるの！、黙^{だま}つてちやあ妾^{わたし}厭^{いや}よ、怒^{おこ}つてよ、怒^{おこ}つてよ、怒^{おこ}り出^だして頂^{ちやうだい}戴^{だい}よ、エ、口^く惜^{やく}しい。』

と身^みを揉^もんで悶^{もだ}ゆる其^その八^やッ口^{くち}より襦^{じゆ}袢^{ばん}の袖^{そで}の紅^{くれなゐ}色^{いろ}こぼれて、低^{ひく}く伏^ふしたる背^せ中^{なか}つきのすらりと優^{やさ}しきもいとしほらしく、それ中^{なか}にして對^{むか}ひ坐^ざせる瘦^{やせ}軀^{みづの}の水^{みづの}野^の、肥^これたる日^ひ方^{かた}、揉^もみくちやにされて捨^すてられたる普^ふ門^{もん}品^{ぽん}、倒^{たふ}されたる葡^ぶ萄^{たう}酒^{しゆ}の空^{から}洋^{こつ}盞^ふ、すべで是^{これ}亂^{みだ}れたる一^{いち}場^{ぢやう}の景^け色^{しき}ながら、描^{ゑが}かば描^{ゑが}くべき風^{ふう}情^{せい}あり。

水^{みづ}野^のは黙^{もく}して石^{いし}の如^{ごと}く語^{かた}らず、思^{おも}はぬものに出^でられて日^ひ方^{かた}は困^{こう}じたる時^{とき}、お鍋^{なべ}は先^{さつ}刻^きより彼^{かなた}方^{かた}にて人^{ひと}と應^{おう}接^{せつ}し居^ゐたりしが、終^{つひ}に此^{こゝ}處^ちへと一^{いち}人^{にん}の男^{をとこ}を導^{みちび}き來^{きた}れり。

『オ、羽^は勝^がか。』

『ア、羽^は勝^が君^{くん}か。』

日^ひ方^{かた}と水^{みづ}野^のとが同^{どう}時^じに聲^{こゑ}かくるを、眞^ま面^{じめ}目^めに受^うけながら、いつも變^{かは}ら

ぬ洋服姿の羽勝は靜に坐して、

『日方！君はいかんど。今此家の婢に仔細を聞いたは。島木に釘をさゝれて居ながら、何をするのだ、いかんぞ何様も！。水野！、久しく逢はなかつたナア。しかし君も無事、僕も無事で、お互に満足だ。實は今日日方と約束して、島木と三人で君を尋ねる筈だったが、僕は身體が忙がしかつたので斷りを出したところが、思ひのほか早く身體が明いたので、島木のところへ行つて見ると、日方は一人で此方へとの事だ。島木は何か商業上の推算に身を入れて居る様子で、誘つても氣の無い返辭をするやうになつて居るし、そこで一人で後を追つて遣つて來たが、ひよつとすると日方が言葉に募つて暴な事でも仕はせぬかと思つた通りに、來て見ると果して亂暴の所爲だ。然しまあ僕に免じて赦して呉れたまへ、何も惡氣では爲ん日方だから。もう僕が來た上は暴はさせん、三人で快く靜に話さう。水野、君は今でも甘い黨の方だらう。小兒欺しだが舶來菓子を持つて來た。此邊には珍しからうと思つて、枕 サイデサキツシエン 絹とかバタカップとかいふ奴を持つて來たが、舟

人の酒を強く好かん奴は菓子に興味を有つ癖が出るのをかしいことだ。さあ日方は飲むなら飲め、此方は茶で談さう。』

と常には似ず勉めて口數きゝて、白けきつたる此坐を黒めんとすれば、お濱は竊と其人を覗ひ見て、正しげなる此の新來の客に、泣顔見せん事を憂くおもひてや、面を蔽して逃ぐるが如くに此處を去つたり。

其四十三

島木しまぎの胸潤むねひろくして能よく人情にんじやうに通つうぜるといひ、日方ひかたの心剛こころがうにして飽あまで
 義理ぎりに仗よらんとするといひ、其他そのた山瀬やませといひ檐井ならいといひ、いづれも我われ
 に取とりてはおろかならぬ友ともなるが、わけて誰たれにも彼かれにも優まさりて我わが親した
 しく語かたらひて、眞まことの兄あにとも頼たのみ思おもへるは此この羽勝はがちなり。其性質そのせいしつの我われに
 似通にかよひたるところのあるが爲ためにや、世よにいふ合性あひしやうといふ事ことの爲ためにや、
 たゞしは眞實前まことまへの世よに如何いかなる因縁いんねんのありての事ことか、他ひとに超こえて世話せわ
 になりなられつしたる恩義おんぎの關係くわんけいは島木しまぎに及およばず、一ツ窓ひとまどの光ひかりを各
 自つくの机ゑに分わかつて、奇文きぶんを共ともに賞しょうし疑義ぎぎを相質あひただす學問がくもんの交まじはりは山瀬やませに如
 かざりしかども、たゞ何なんと無く我彼われかれを他ほかならず懷なつかしめば、彼かれもまた我
 を他ほかならず愛あいして、分桃ぶんたうの痴しれたる情じやうこそは有あらざりけれ、斷金だんきんのま
 ことの契くわいは淺あはからざりしなり。
 されど人ひとおのゝ望のぞむ處ところを異ことにすれば、彼かれは一帆いつぱんの風かぜに萬里ばんりの海うみを渡わた

つて波瀾洶湧の中に身を托するの船人となり、我は半夜の燈に幾卷の書と對して寂寞たる小齋の裏に思を鍊るの學究たるを甘んぜるより、相見ざる月日はおのづと多くなり行きしが、しかも相思ふ心は更に變らず、彼海上にありと知る時は、風の曉、雪の夕、あゝ羽勝はと此方に思はぬ折も無ければ、富士の高根も浪に消れて夢ならでは日本の見えぬ異郷の津に在りても彼方も我を猶思ひ呉れて、他邦の港を目の前に見る繪葉書の、此岬の下此の水の上汝の友の羽勝在りと、村居の閑なる机の上に、天の一方よ溫き情を寄せ呉るゝこと數々なりき。

我とはかくの如き中なる羽勝が久しぶりにて歸りしを迎ふるの會に、一篇の歌をも寄すること無く、數句の語をも交ふること無くして、全く面を出さざりしは、水野の胸濟まず思へるとなりしが、其の事彼の事の煩累に心を取られて、其後も思ひながら尋ねさへせざりし其の羽勝に、忽然として尋ね寄られては、あゝ此人を尋ねでは濟まざりしものを、差當りての苦きおもひにのみ惹かされて、我に疎き意の露ありてにはあらねど、おのづから人の情を空にしたるやうになり

し悲^{かな}しき、と其^{その}懷^{なつか}しき顔^{かほ}を一^{ひと}目^め見るより早^{はや}く、何^{なに}より先^{さき}に我^わが振舞^{ふるまひ}
 の勝^{かつ}手^て過^すぎたるが羞^{はづか}しくなりて、正^{まさ}しくは對^{むか}ひ見る事^{こと}も叶^{かな}はぬやうの
 心^こ地^ちしつ、滔^{たう}々として日^ひ方^{かた}の我^{われ}諫^{いさ}めくれたる其^その幾^{いく}千^{せん}言^{げん}を聞^きけるより
 も、我^{われ}と我^わが果^は敢^{かな}無^なき戀^{こひ}に迷^{まよ}ひて、此^この情^{じやう}の篤^{あつ}く義^ぎの強^{つよ}き尊^{たつと}むべき友^{とも}
 に負^{そむ}きたる罪^{つみ}の輕^{かろ}からぬをおぼえ、よし無^なき想^{おもひ}にのみ沈^{しづ}める昨^{きのふ}日^け今^け
 日^ふの我^わが愚^{おろか}しきをば自^{みづか}ら慚^はぢ自^{みづか}ら責^せむるの情^{じやう}は燬^やくが如^{ごと}くに起^{おこ}りて、
 嗚^あ呼^{われこ}我^{われ}心^こ裏^らに物^{もの}無^なくして懷^{なつか}しき此^この友^{とも}と今^{いま}こゝに相^{あい}語^{かた}らば、如何^{いか}ばか
 り今^{けふ}日^ふの團^{まどゐ}戀^{うれ}の嬉^{たの}しく樂^{たの}しからんを、彼^{かなた}方^{かた}は相^{あひ}も變^{かは}らず胸^{むね}を開^{ひら}きて物^{もの}
 語^{がた}れど、我^{われ}は人^{ひと}には告^つげ難^{がた}き私^{わたくし}情^{じやう}を胸^{むね}に抱^{いだ}き居^をりて、往^{むかし}時^{とき}の無^{むじや}邪^{やく}氣^きの
 我^{われ}ならねば、隔^{へだ}つる氣^きの更^{さら}にあるにはあらねど、水^{みづ}と油^{あぶら}との一^{ひと}つにな
 りがたきやうに、何^ど處^{ところ}と無^なく奥^{おく}底^{そこ}なくは打^{うち}解^とけ難^{がた}き心^こ地^ちして、言^{こと}葉^はに
 餘^{あま}る思^{おもひ}はありながらも、所^{ゆゑ}以^ゑ知^しらず自^{おのづ}然^{ぜん}と我^わが口^{くち}の結^{むす}ばるゝを何^{なん}とせ
 んと、水^{みづ}野^のは私^{ひそか}に自^{みづか}ら苦^{くる}しめり。
 見^みれば日^ひ方^{かた}の言^いひしに露^{つゆ}差^{さが}はず、生^{せい}來^{らい}の沈^{ちん}毅^ぎの氣^き性^{せう}は浮^{うき}世^よに鍛^{きた}はれて、
 いよく萎^{ひる}まず怯^{おそ}れぬ大^{だい}丈^{ちやう}夫^ぶとなりたるは其^その額^{ひたひ}には曇^{くもり}の絶^たえて無^なく

て、眼には鋭さの加はりたるにも知られ眞率なれども舉動に ruby 威ありおちつきあり、平易なれども言葉に思慮あり斟酌あるに、あだには月日を経ざりしを示したり。

水野に水野の所思あれば、羽勝にも羽勝の所思ありて、累々として喪家の狗のごとく衰へ果てたる我が友の容態をば、しばし無言にして羽勝は眺めしが、たゞ日方のみは思つては言はずに居ず、一旦は羽勝を憚りて默せしが、堪へ兼ねてか忽ちまた、

『水野、』

と一ト聲呼びかけたり。

其四十四

お濱は何處にか去つて復現れず、むくつけき田舎女のお鍋は「ribby」茶
やをもて來りしが、先づ無作法に人々の顔を見渡して、初に羽勝が前
に一盞を薦め、次に水野が前にまた一盞を置き、茶は注ぎて其の盞を
満たしながら日方が前には取りても與らず。

『汝様は勝手に取つて飲まつせえ。』

と云はぬばかりの顔つきしつ、其邊の亂れたるを取片付けて、黙つて
退き去れば、水野は氣の毒さに堪へずして、自ら茶盞を取つて日方に
與へたり。

日方は此等の瑣事には頓着もせず、感慨に堪へぬ面の色、睜開れる眼
には露をさへ宿して、
『水野！もう乃公は一ト通り云ひ盡したから繰り返してまた言ふので
は無いが、如何に心が弱つたればとて、何といふ汝の衰へ方だ！。迷

ふなら迷ふで仕方は無いやうなもの、同じ迷ひにもそれ／＼があら
 う。何故迷ふにしても男兒らしくは迷はぬ？。汝の衰へに衰へ果て、
 女の腐つたの、やうに成り果てたのが、何より彼より情無いは。汝は
 本より剛強な鐵石の男といふのでは無かつたが、外面は柔かでも事
 によつては、人と争つて後へは決して退かぬ、怖しい氣合を含んだ奴
 で、醃醋のやうなところがあると、平生乃公が評したほどの男兒で
 あつたが今は何様だ。醋なら醋は腐つて仕舞つたのか、懺びて仕舞つた
 のか、乃公に打たれて抵抗もせぬやうになつたとは嗚呼情無い！。こ
 れ眼を開いて天地を見ろ！。畫工には畫を教へぬ草木も無い、男兒を
 磨かうといふものには我が精神を奮はせて歩を進ます鞭や刺馬輪で無
 いものは無い！。見なかつたか盲目漢！、氣が注かんか放心漢！、此
 家の小娘が何を仕たぞ。齡はたつた十五か十六かで、乃公の一ト攫に
 も足らぬ優しい身體、それでも流石に日本の女だ、平生一ツ家に居る
 汝が乃公に撲たれ辱められるのを見ては慨然として、身を挺んで、
 汝を護つて乃公に當りあの愛らしい美しい眼から、寶石のやうな光を

輝^かかして、眞^ま紅^つな顔^{かほ}に血^ちを沸^{にや}して打^うつてかゝつたでは無^ないか!。女性^{をんな}
 だ、小兒^{こども}だ、孱弱^{かよわ}い娘^{むすめ}だ。それでさへ一旦^{いつたんげきどう}激動^{かくどう}すれば、此^この日方^{ひかた}にも
 取^とつてかゝる、それが貴^{たつと}い人^{ひと}間の勇氣^{ゆうき}だ、人^{ひと}のたる所以^{ゆゑん}を支^さへるも
 のだ。それだのに何^{なん}だ汝^{きさま}の其^その態^{てい}は!。一少女^{いちせうぢよ}にも及^{およ}ばなくなつて、
 たゞ崩折^{くづ}れて萎^{しお}れきつて居^ゐる!。よく彼^あの娘^{むすめ}に對^{たい}しても慚死^{ざんし}せぬナ。
 水野^{みづの}!、汝^{きさま}は決^{けつ}して決^{けつ}して本心^{ほんしん}を失^{うし}ふやうな、其様^{そのん}な腑甲^{ふがい}斐^{いな}無^ない奴^{やつ}で
 は無^ないが、何様^{どう}すれば此様^{こん}な意氣地^{いきぢ}が無^なくなつた。こゝの娘^{むすめ}の舉動^{ふるまひ}
 を眼^めの前^{まへ}に見^みて、よく汝^{きさま}は自^じ分^{ぶん}が羞^{はづか}しくないナ。一少女^{いちせうぢよ}でさへ彼^あの通^{とほ}
 りだ、汝^{きさま}は堂々^{だうだう}たる男兒^{だんじ}で無^ないか、乃公^{おれ}は彼^あの娘^{むすめ}に頭^{あたま}を撲^うたれたが、
 汝^{きさま}は精神^{きしん}に鞭^{むち}を受^うけなかつたか。苟^{いやし}くも舊^{もと}の水野^{みづの}であるならば、人^{ひと}一
 倍物^{ばいもの}を思^{おも}ふ汝^{きさま}の事^{こと}だもの、必^{かなら}ず感奮^{かんふん}せずには居^をらぬ筈^{はず}だが、衰^{おとろ}へ果^はて
 弱^{よわ}り果^はてた今^{いま}の汝^{きさま}は、矢張^{やつぱ}り首^{くび}を俛^たる、ばかりか。此家^{こゝ}の娘^{むすめ}の健氣^{けなげ}な
 振舞^{ふるまひ}と、汝^{きさま}の其^その萎^{しを}れきつた状態^{ありさま}とを、見^み比^{くら}べ思^{おも}ひ比^{くら}べると此^この日方^{ひかた}
 は、これほどまでに汝^{きさま}は衰^{おとろ}へたかと、汝^{きさま}の衰^{おとろ}へ果^はてたのが悲^{かな}しくて涙^{なみだ}
 が出^でる!。女^{をんな}にも劣^{おと}るやうになつたとは餘^{あま}り情^{なさけ}無^ない!。何故^{なぜ}迷^{まよ}ふにし

其四十四

ても男兒らしく迷つて呉れぬ？。

其四十五

『心を一婦人に苦むる汝を見るのも忌々しいが、勇を一少女に遜る汝
 腑甲斐なさを見ては、あ、凡骨では無かつた水野某が、如是も衰へ
 たものかと口惜くなる！。島木の言つたことが眞實ならば、此の日方
 は全然否認するけれど、そりやあ或は戀愛に陥るのも已むを得んこと
 か知らんが、何故戀愛に陥つたで男兒らしくはせん？。同じ迷に陥つ
 ても、人にも告げず物を思つて空しく泣き悶いて居るばかりが道でも
 あるまい。いたづらに遲疑躊躇して、何等の措置をも取ることを敢て
 せぬのは大丈夫の最も慚づるところだ。たとひ少々は其の所爲宜きを
 失つても、慮つて、斷じて、行つて、着々と事情の展開に應じて行く
 のが、男子の敢てすべき道では無いか。猶豫して決せざるは、軍務で
 は何よりも甚しく惡むところだが、獨り軍人のみが左様覺悟すべきで
 は無い、何人に取つても遲疑躊躇ほど、其人を害するものはあるまい。

同^{おな}じ婦^ふ人^{じん}に愛^{あい}着^{ちやく}するなら、水^{みづ}野^の汝^{きさま}も男^{をとこ}兒^こでは無^ないか、何^{なぜ}故^を男^{をとこ}兒^こらしく
 行^{かうどう}動^{どう}せぬ？。ピスマークは何^{どう}様^{よう}して其^その妻^{つま}を得^えた！。烈^{はげ}しく思^{おも}つた、
 明^{あき}らかに求^{もと}めた、而^そして終^{つい}に得^ねたといふに過^すぎん事^{こと}ではないか。今^{いま}は
 其^その夫^ふ人^{じん}も世^よを去^さられたが、我^わが陸^{りく}軍^{ぐん}大^{だい}將^{しょう}の某^{ぼう}侯^{こう}が、年^{とし}も若^{わか}く身^みも
 鄙^{いやし}かつた時^{とき}の戀^{こひ}の物^{もの}語^{がたり}は、虚^き實^{じつ}は知^しらぬが汝^{きさま}も知^しつて居^ゐやう。徒^と然^{ぜん}を
 慰^{なぐさ}めるばかりに讀^よんだ雜^{ざつ}書^{しよ}に、文^{もん}覺^{がく}の事^{こと}を記^{しる}してあつたが、彼^{あれ}を見^みて
 先^{せん}夜^やも汝^{きさま}の上^{うへ}を、自^{おの}然^づと胸^{むね}に思^{おも}ひ浮^{うか}めた。文^{もん}覺^{がく}は全^{まった}く失^{しつ}敗^{ぱい}し、ピス
 マークや我^わが大^{たい}將^{しょう}は思^{おも}ひを遂^とげたが、其^その遲^ち疑^ぎ躊^{ちう}躇^{ちよ}して空^{あだ}に物^{もの}を思^{おも}は
 ぬは同^{おな}じ事^{こと}だ、飽^{あく}まで男^{をとこ}兒^こらしく戀^{こひ}をしたのは同^{おな}じ事^{こと}だ。彼^{あれ}の文^{もん}覺^{がく}
 が云^いつた言^{ことば}に、戀^{こひ}には人^{ひと}の死^しなぬものかは、と苦^{くる}しい思^{おも}ひを白^{はく}狀^{じやう}してゐ
 るが、水^{みづ}野^の、汝^{きさま}も其^その衰^{おとろ}へかた其^その寡^{やつ}れかたでは、成^{なる}程^{ほど}汝^{きさま}も死^し兼^きねな
 い様^{やう}子^すだ。とて其^{それ}程^{ほど}に迷^{まよ}つたならは、進^{すす}んでは振^{ふる}舞^まはぬ？、黙^{だま}つて
 物^{もの}を思^{おも}つても死^しぬなら、何^{なぜ}故^を成^な敗^{はい}生^{しやう}死^し此^この一^{いつ}擲^{てき}と、男^{をとこ}兒^こらしく運^{うん}命^{めい}の
 何^{なに}を與^{あた}ふるかを見^みぬ？。文^{もん}覺^{がく}はたゞ我^が慢^{まん}ばかりの男^{をい}では無^ない、袈^け裟^さを
 殺^{ころ}した其^その後^{あと}では、辰^{たつ}の刻^{こく}より未^{ひつじ}の刻^{こく}まで、四^よ時^しと云^いへば八^{はち}時^じ間^{かん}だ、

其の八時間^{はちじかん}を大聲^{おほごゑ}揚^あげて、荒^{あら}くれた眼^めから霰^{あられ}のやうな涙^{なみだ}を落^おしながら泣^なき通^{とほ}したとある、恐^{おそ}しい情^{じやう}の深^{ふか}い熱^{ねつ}烈^{れつ}な奴^{やつ}だ。其位^{そのくらゐ}の奴^{やつ}が手荒^{てあら}い事^{こと}をするまでには、一^{ひと}通り^{とほ}や二^ふ三^{さん}通り^{とほ}で無^なく物^{もの}を思^{おも}つたらうが、歸^きするところ暴^{ぼう}でも何^{なん}でも男兒^{なにとこ}らしく思^{おも}ふまゝに振舞^{ふるま}つたのはまた已^やむを得^えん。とてもかくても物^{もの}を思^{おも}つて戀^{こひ}に死^し兼^{にか}ねもすまいならば、何^な故^ぜ男兒^{なにとこ}らしくは振舞^{ふるま}はぬ?。當^{あた}つて碎^{くだ}くか碎^{くだ}けるかだ、突貫^{とつくわん}してして倒^{たふ}さるゝか倒^{たふ}すかの事^{こと}だ、首^{かうべ}離^はなると雖^{いへど}も身懲^{みこ}りず、といふ勢^{いきほひ}で突貫^{とつくわん}して仕舞^{しま}へ。汝^{きさま}が良^よい婦人^{ふじん}を得^えて大將^{たいしやう}になるか、たゞし文覺^{もんがく}のやうな狂^{きやう}僧^{そう}になるかそれは何方^{どちら}になつても乃公^{おれ}は關^{かま}はんが、何^い様^{やう}せ汝^{きさま}は欲^{よく}が薄^{うす}くて高慢^{かうまん}が強^{つよ}い、變^{へん}挺^{てい}な男^{をとこ}に生^うれて居^ゐるのだから、坊主^{ばうず}になつて仕舞^{しま}ふのも寧^{いつそ}宜^{よか}らう、日方^{ひかた}は貧乏^{びんぼう}でも汝^{きさま}が左様^{さやう}なつたら、麻^{あさ}の衣^{ころも}位^{ぐらひ}は寄進^{きしん}して立過^{たてすし}して遣^やる!。汝^{きさま}が衰^{おとし}へに衰^{おとし}へて、一少女^{いちせうぢよ}にも其^その勇氣^{ゆうき}が及^{およ}ばんやうになつて戀^{こひ}に死^しぬのを、見殺^{みころ}しにするのは乃公^{おれ}には出來^{でき}ぬ。男兒^{なにとこ}らしく振舞^{ふるま}へ、女^{をんな}ではあるまい。高^{たか}が一婦人^{いちふじん}を對敵^{あひて}にして、遠距離^{ゑんきより}で彈藥^{だんやく}を使^{つか}ひ盡^{つく}すのは愚^{おろか}な事^{こと}だ。いっそ一^{ひと}と思^{おも}ひ突貫^{とつくわん}して仕舞^{しま}

へ。勝^かつか負^まけるかの他^{ほか}には物^{もの}は有^ありは仕^し無^ない。遠^{とほく}地^ちから敵^{てき}に勝^かた
 うといふのは贅^{ぜいたく}澤^ざな詮^{せん}義^ぎだ。羽^は勝^{がち}乃^お公^れの言^いふこと^{こと}を無^む理^りとは思^{おも}ふま
 い、何^{どう}様^{よう}だ水^{みづ}野^の汝^{きさま}は何^{なん}と思^{おも}ふ？。女^め々^々しい事^{こと}は宜^いい加^か減^{げん}に止^やめろ。も
 う乃^お公^れは此^{これ}限^ぎり物^{もの}は言^いはぬ、これだけ言^いつても乃^お公^れの云^いふ事^{こと}を用^{もち}ゐ
 ならば、舊^{もと}の水^{みづ}野^のにな^{かへ}り返^{かへ}るま^{きさま}では、汝^{きさま}には會^あはん。』

其四十六

日方の言ふところも無理ばかりにはあらず、思ふて言はざる苦さに堪へかねては、兎せん角せんと意を動かしたる折も無きにあらねど、おのづからに思ひ切つたる事を何故とも無く做し出しかねて、女々しと云はゞ女々しと云はるべく今日までは過せるなり。されど差當つて今日方に對つて、其の言葉に従ふべし意見に就くべしとも云ひかねて、水野は何とも言はねば、羽勝は徐々に口を開きて、言葉づかひも重々しく、

『水野、黙して仕舞つてはいかん。日方の言は或は不當だ、しかし日方の意は親切に他ならんのだ。其言を採ると採らんとは別として、其親切は十分に受け納れねばならん。無論君は日方の好意に對して感謝して居るだらうナ。』

と優しく水野を誘ひて言はせんとすれど、水野はたゞ偽ならぬ眼色し

て打點頭うちうなづきて、然しかり、と答こたへたるばかりなり。

「人ひとは人各々ひとおの／＼の性質せいしつがある、境遇きやうぐうがある。深く他人たにんの事ことに立入たちいるのは僕ぼくは取とらん。日方ひかたの親切しんせつは僕ぼくも有もつて居ゐる。たゞし日方ひかたの如ごとく自分の意思感情いしかんじやうを、君きみの上に押おし被かせやうとは僕ぼくは能よくせん。水野みづの！歸かへつて來きてから君きみの評判ひやうばんをいろ／＼聞きいた。僕ぼくは考かんがへた。考慮かんがへを鍊ねつた。而そして君きみに對たいして贈おくるべき或物あるものを得えた。しかし今の君いま きみに對たいして何なにを贈おくつても無益むえきに終をはるべきを知しつた。よつて君きみに對たいして何なにを言いふまいと思おもつた。しかし今日方いまひ かたの言いつたところは不幸ふかうにして、僕ぼくが考かんがへて云いはうと思おもつたところと正反對せいはんたいの言げんであるので、已やむを得えず誘さそひ出だされて一ひと言こといふ。日方ひかたの言げんを駁はくするのでは無ない。もとより僕ぼくが言いはんと欲ほつして居ゐたところなのだ。水野みづの、君きみは聰明そうめいの人ひとだ、僕等ぼくらは及およばん。たゞ、此この世よの中に立交たちまじつて、人ひとに接せつし事ことに應おうずるに於おいては齡としの多おほいだけに、僕ぼくは私ひそかにおもひに君きみに對たいしても、必かならず一日いちじつの長ちやうがあると信しんずる。僕ぼくは書しょを讀よんで理りを尋たづねたで無ない、事ことに當あたつて自みづから知しつたのだ。僕ぼくは人ひとに使つかはれた。人ひとを使つかつた。而そして人ひとと人ひととの間の感情あひだ かんじやうといふものが、如何いか

に大切なものであるかといふことを身に染みて覺えた。而して我が感情
 に任すことの危害を實驗した。僕は愚であつたから同じ過失を二度し
 た。三度した。四度した五度した。幾十度と無く實驗した。而して
 後纔に我が感情を調御することの如何に大切なものであるかといふ
 事を知つた。罵られるれば怒る、氣に入れば愛する。それは欺かぬ感情
 である。其の感情に任せて喜怒するを天真爛漫だなんぞといふ。一船
 の中で事端を生ずるのは、何時でも天真爛漫の人だ。怒るには怒る理
 由がある。愛するには愛する理由がある。しかし感情ばかりが最上
 なものではない。感情に任すのを是とする人は船員の中の最も危険な
 人だ。自分の感情を調御しなければ、自分は人に使はれることが出来
 ぬ。自分の感情を調御しなければ自分は人を使ふことが出来ぬ。自分
 の感情を調御しなければ、自分は人に交ることが出来ぬ。人に使はれ
 ず、人を使はず、人に交らずに濟む世間は無い。僕は僕だけの小な
 經驗だが、しかし確實堅固な經驗から、非常に強く深く感情の調御が
 人世の最大必要のものであるといふことを確信して居る。君は聰明絶

倫^{りん}な人^{ひと}だが、此^この點^{てん}の經驗^{けいけん}は或^{ある}は薄^{うす}からう。戀愛^{れんあい}も是非^{ぜひ}がない。苦悶^{くもん}
 も已^やむを得^いぬ。一切^{いっさい}の事^{こと}は謝^{しや}せんとして謝^{しや}せぬが天命^{てんめい}だ。風^{かぜ}の前^{まへ}面^{めん}
 ら吹^ふく日^ひもある。潮流^{しほ}の横^{よこ}へと行く夜^よもある。颶^{つむじ}風^{ふう}も龍^{たつ}巻^{まき}も起^{おこ}る日^ひは
 起^{おこ}る。しかし其^{その}間^{あひだ}に立^たつて屹^{きつ}然^{ぜん}として、我^わが正^{せい}當^{たう}の處^{しよ}置^ちを取^とつて行^ゆけ
 ば死^しして餘^{あま}りあるのだ。水^{みづ}野^の！君^{きみ}が君^{きみ}の欺^{あざむ}かぬ感^{かん}情^{じやう}のため^{ため}に死^しにた
 くば其^{それ}迄^{まで}の事^{こと}だ。しかし君^{きみ}が君^{きみ}として世^よに立^たたうとした大^{だい}丈^{ちやう}夫^ふの志^し
 を忘^{わす}れぬ限^{かぎ}りは、君^{きみ}は君^{きみ}の感^{かん}情^{じやう}を調^{てう}御^ぎする^{きよ}ことを忘^{わす}れてはならぬ。
 必^{かなら}ず感^{かん}情^{じやう}の調^{てう}御^ぎといふことを忘^{わす}れずに居^ゐて欲^{ほし}しい。君^{きみ}が文^{もん}覺^{がく}の如^{ごと}き
 人^{ひと}とならんことは、僕^{ぼく}の最^もも恐^{おそ}れて居^ゐるところだ。文^{もん}覺^{がく}の如^{ごと}きは僕^{ぼく}の
 蛇^だ揭^{かつ}視^しする人^{ひと}だ。しかし僕^{ぼく}と日^ひ方^{かた}とは言^{ことば}は異^{こと}にして意^いは同^{どう}じだ。たま
 たま日^ひ方^{かた}の言^{ことば}に僕^{ぼく}の胸^{むね}裏^らに觸^ふれたところが一寸^{ちよつと}あつたので、言^いはずと
 ものこを饒^{しやべ}舌^{ぜつ}つたが、二^{ふた}人^りの言^{ことば}の異^{こと}なるところを忘^{わす}れて、其^{その}意^いの同^{どう}
 じところをさへ取^とつて呉^くれ、ば、日^ひ方^{かた}も僕^{ぼく}も何^{なん}程^{ほど}悅^{よろこ}ばう！』

其四十七

羽勝はがちが同情おもひやりのいと厚あつくして、而しかも道理だうりの正ただしきに據よれる、其その言ことばには力ちからあり、其その意こころには仁なまけ有あるに、分わけて此頃このころは感かんじ易やすくなれる水野みづのの、心こころの中に深ふかく恩おんを謝しやしながら、言いはれしことの本末もとすゑを思おもひ味あじはふ時とき、羽勝はがちは復ふたび口くちを開ひらきて、

『僕ぼくの言げんは或あるは漠然ぼくぜんとして、捉とらへどころの無ないやうにも思おもへやう。しかし僕ぼくは漠然ぼくぜんたることは決けつして云いはぬ。手てを下くだすところの知しれぬ教訓をしへは僕ぼくは嫌きらふ。着手ちやくしゆするところが分明ぶんみやうで無なければ實務じつむは擧あがらぬ。收獲とりいれの算用さんようを播種たねまきの前に爲するのは最もつとも忌むところだ。たゞ感情かんじやうの訓練くんれんと云つても、着手ちやくしゆのところを云いはねば空言くうげんになる。煩うるさいか知らんが空言くうげんにならぬやうに、適切てきせつに敢あへて君きみのために云いはう。云いひ過ぎて無禮ぶれいであつても免ゆるし玉たまへ。たとへば人ひとを思おもふとすれば、其その情じやうは胸中きやうちゆうに鬱滯うつたいして結むすばれる。また例たとへば人ひとを怒いかるとすれば、其その情じやうは心頭しんとうに狂くるひ立つて已や

まぬ。それを其儘に任せて置けば、我が本分の事は其れがために誤られる。夫が思ひも寄らぬ過失をして、不測の禍害を得る其の多くは、胸中に職務以外の何物か、蟠まつて、職務に放心して居る時に起る。またいつせん又一船の平和の破壊は激烈の感情の暴發に基く。そこで自分が自分のうちよくかん當直時間だけ、甲板に在つて執務する間は、何等の私情が胸中に在らうとも、それを壓へつけて放肆ならしめぬやうに敢てせねばならぬ。親を思ふは孝子の眞情だ。しかし病んで居る親を思つて茫然とした、め、船の進路を過つて洲へ上げたでは濟まぬ。職務を執つて居る其間だけは、如何に孝子でも自ら忍んで、親を思ふ情に氣を取られぬやうに、嚴然と胸中に清潔にせねばならぬ。湧き上り起り立つ感情を抑制せばならぬ。訓練して我が命令に服させねばならぬ。これは實務に身を練るもの、必ず知つて居るところだ。日方なども必ず經驗して居るところだ。たゞ世に一種の人があつて、おのづから感情の訓練を敢てせぬ履歷を有して居る。僕に云はせれば其人は最も不幸な人だ。直言すれば、水野、君が其人だ。君は美しい感情を有して居て、今までは

訓練くんれんを要をする事ことがなかつた、それほど美うつくしい感情かんじやうを有あして居ゐたのだ。
 その上うへ、感情かんじやうの訓練くんれんの必要ひつやうを感じかんずる如ごとき職務しよくむに身みを置おかなかつたの
 だ。そこで感情かんじやうの訓練くんれんの履歴りれきを有あして居ゐぬ、それは慥たしかに大おほいに君きみを苦
 めるのだ。感情かんじやうは馬うまだ。鋭すんい感情かんじやうを有あして居ゐる人ひとは駿馬しゆんめに乗のつて居ゐ
 る人ひとだ。駿馬しゆんめは愈いよく訓練くんれんせねばならん。然さも無なければ、乗のつて居ゐるも
 のは危あぶない目めにあふ。水野みづの、君きみは生來せいらい駿馬しゆんめに乗のつて居ゐる人ひとだ。而そして今
 其その駿馬しゆんめは無む法はふに走はしり出だして居ゐるのでは無ないか。谷たにに陷おちるか崖がけから墜
 つるか、淵ふちへ躍をどり込こむか前途さきが知しれぬ。僕等ぼくらは傍はたから見みて冷汗ひやあせを流ながし
 て、非常ひじやうに寒心かんしんして居ゐるのだ。善よく御ぎさなければ危きけん險けんは目めの前まへだ。ど
 うか訓練くんれんを取あてて呉くれたまへ。馬うまのための人ひとでは無ない、人ひとのため
 の馬うまだ。馬うまは人ひとの命令めいれいに服ふくさせて、而そして其そのの能力のうりよくを盡つくせた時とき、はじ
 めて駿馬しゆんめの貴たつとぶべきが知しれるのだ。文もん覺かくの如ごときは馬術ばじゆつをも心こころ掛かけずし
 て、一生いつしやう荒馬あらうまに乗のつて無む法はふに驅かけて、終しまひには撥はね落おとされて死しんだのに
 過すぎん。僕等ぼくらは驚馬どばに乗のつて居ゐるものだ。君きみは幸さいはひに駿馬しゆんめに乗のつて居ゐ
 人ひとだ。くれぐれも云いふ人ひとのため馬うまだ、馬うまのための人ひとで無ない。どうか

善く鋭い感情を御して、而して君の千萬里を馳騁するところを見せ
て呉れたまへ。駿馬のために谷に陥り淵に落つる不幸を見せて呉れた
まふな。』

と諄々として徐に説く時、日方は膝を打つて嗟嘆して、
『可矣。確言動かすべからずだ。羽勝の言だけある！。此馬陣に臨んで
久しく敵無し、人と一心にして大功を成すといふ、句の、彼の人と一
心といふ四字が響き渡つて、今更強く面白く感じられる！。水野、馬
をして我が意に従はしめなければならんぞ。』
と傍よりまた言葉を添へたり。

其四十八

日方が手荒き舉動といひ、羽勝が物固き言葉といひ、皆これ淺からず
 我を思ひ呉る、朋友の情の眞實なりとおもふに、水野は泣かぬばかり
 の面つきとなつて、血の氣も失せたるやうの兩の頬には、勢無き心の
 淋しさを現はし、露ばかりも動かざる眼の中は一念の沈みきつて一ト
 處に凝れる状態を示す如く、や、少時は物をさへ云ひ兼ねたりしが、
 やがて感激に堪へ得ずしてや、さしぐむ涙に聲も弱々と、
 『あ、有難い！、實に謝する！、二君の厚意は決して忘れぬ。特に
 羽勝君の教は心魂に徹して、愚鈍の僕にもよく解つた。君等の親切
 に激勵まされて、出来ないまでも僕は自ら勉めて過たぬやうにする。
 感情の訓練といふ事も屹度敢てする。不幸にして力が足らなくつて、
 轉んでも倒れても溪に落ちて、轉べば起上る、倒るれば立つ、溪に
 落ちて屹度這ひ上つて、目ざところまで必ず行かうといふ氣ばかり

は、何様あつても屹度忘れぬつもりだ。僕に生命の有らん限りは、一日に一日だけ此の心を懷いて、苦んでも悶えても生存へやうと思ふ此の僕の眞の意を汲んで呉れて、何様か僕を見放さずに居て呉れたまへ。長く此の僕に君等の友たる幸福を得させて置いて呉れたまへ。君等は皆優しく教へて呉れるし、自分でも氣が付いて居るし、自ら克たうとしたり自ら憤つたり、自ら争つたり自ら闘つたり、心の中の採めぬ日も無く、力も根も使ひ盡して今日まで來たが、何と無く行末が物怖しくて、知りつゝ、高い崖から深い淵に陥るやうな時が有りはせぬかと思ふ。必ずく其様なことにはならない様に、君等の厚意を空しくせぬやうにと、一生懸命に思つては居るが、萬一萬々一左様いふ目にあつても、屹度それきりにはならぬつもり、其點を水野だとして呉れて、あれほど論したのに云ひ甲斐の無い、とう／＼深みへ落ちた馬鹿な奴だと爪弾きして棄てるやうなことを爲て呉れたまふな。餘り愚な事をいふやうだが、たゞ何と無く僕の前途に恐ろしい不幸が手を擴げて、僕が行くのを待つて居るやうに思へる。何様も左様思へてならので、そ

れで如是なことも言ひ出すのだが、何様罷り間違つても本來の一心は、君等に對しても決して忘れぬ、其處をたゞ水野だと思つて交際つて呉れたまへ。人の運命の明日は分らぬが、君等の厚意は夢の間も忘れぬ。君等に負かぬやうにとは屹度努力する。』

と、心に張りのあるさまは猶見えながら、意氣は振はずして龍鍾と言ふ其の哀れなる様子を日方は見過しかね、

『なに！、何と無く行末が怖ろしくつて、不幸の運命が待て居るやうに思へるつて？。何其様なことが有つて堪るものか。我々の行末は皆輝いて居る！。我々七人の行末に暗黒は無いのた！。燃える火の前に暗黒が有るかい！。暗黒はたゞ過ぎた昨日の事！。生きて居る人間、燃えて居る火の、其前に暗黒が有るとは誰が言ふ？。そんな事を思ふのは氣の迷ひだ。悉皆汝の衰弱からだ。しつかり爲なくてはいかんぞ水野！。喇叭が進めと鳴りやあ敵はもう無いんだ。大丈夫の向つて行くところには不幸も何も無い。下らんことをいつてまだ撲られたいか。羽勝言に従つて努力して日を送れ。汝の前途の多幸なのは乃公

が受合ふ。』

と壯語の有る限りを盡して氣を引立てたる其時室外に人の氣色して、
忽ち間の襖は右左に大きく開かれたり。

其四十九

壽^{いのちなが}長^がければ智慧^{ちゑ}多^{おほ}し。吉右衛門^{きちゑもん}は眼^めに世^よの人のそれ^{ごと}くを見^み覺^{おぼ}えて、
 水野^{みづの}を今^{いま}に稀^{まれ}なる若者^{わかも}と悦^{よろこ}び、初^{はじ}はた、高田^{たかた}の依頼^{たのみ}によりて寄寓^{きぐう}を許^{ゆる}
 したるに過^すぎざりしが、後^{のち}後^{おく}には其^その品行^{おこなひ}を見^み、其^その人^{ひと}となりを知^し
 つて、之^{これ}を重^{おも}んずることは主^{しゅ}の如^{ごと}く、之^{これ}を思^{おも}ふことは子^この如^{ごと}く、他人^{たにん}
 あしらひにはせずして月日^{つきひ}を過^{すこ}し來^{きた}れる程^{ほど}なれば、今^{いま}本家^{ほんけ}より歸^{かへ}り來^{きた}
 りて、水野^{みづの}が許^{もと}に訪^よひ寄^よれる人々^{ひと々}の、いづれも表面^{うはべ}ばかりの友^{とも}にはあ
 らずして、水野^{みづの}のため^{あるひ}に或^{あるひ}は諫^{いさ}め或^{あるひ}は諭^{さと}す其^その一片^{かたはし}を、ちらく^みと耳^み
 に入^いる、につけ、特^{こと}には日方^{ひかた}といへるが如何^{いか}に振舞^{ふるま}ひて、また我^わが孫^{まご}
 のお濱^{はま}が日方^{ひかた}に對^{たい}して如何^{いか}に振舞^{ふるま}ひしかをも聞^ききて知^しるにつけ、たゞ
 其^そのままにはあり得^えぬ心地^{こゝち}して、不自由^{ふじゆう}なる田舎^{あな}の心^{こゝろ}には任^{まか}せねど、
 お濱^{はま}お鍋^{なべ}に指揮^{さしず}して酒肴^{しゅかう}を調^とへしめ、水野^{みづの}が命令^{いひつけ}の無^なきにも關^からず、
 其座^{そのざ}に其^{それ}を持出^{もちいだ}さしめたり。老人^{らうじん}の親切^{しんせつ}なる心^{こゝろ}より、此頃^{このころ}の水野^{みづの}の擧^{ふる}

動を憂ひ居し矢先に、我が心を得たる二人の客の物語をば、一ト方な
らず嬉しく思へる餘りなるべし。

何の馳走も無き饗應なれど、膳を配らせながら吉右衛門は笑みつ、

『どなだも邊鄙のところへ好く御來臨なさいました、私は此家の老夫
でございしますが、此の兀げたところをでも今後御覺え願ひます。島
木さんには御心易く願つて居ります、折角諸君が來臨下すつたので
から、』

と云ひかけて一寸水野を見て、

『お差圖も伺ひませんでした、御談話の繋ぎのためばかりに、一獻あ
げるやうに致しました。田舎の事ですから何もございませぬ。おまけ
に飲酒家の無い家の事でございしますから、御惣菜みたやうなものば
かりで、氣取も何もございませぬが、まあ何も御笑ひ草になすつて
飲つて下さいまし。日方さんへは御謝罪の印と申しまして宜いの
で、孫めが飛んだ失禮を致しますが、何様か御勘辨下さいまし、其代
り澤山御酌をさせますから、ハ、ハ、ハ。これお濱こ、へ來て御謝罪を

仕ろ。』

と云へば、其の背後に小くなり居しお濱は、面を染めて是非無く頭を下げんとす。日方は老父の言を心地快げに聞き居しが

『ハ、ハ、君、なに、謝罪らんでも可いさ。お濱さんといふかね、好い氣象の娘さんだ。日方八郎生れて初めて頭へ手を上げられたが、打たれて怒るどころではない、全然感心した。日本の婦女は誰も彼も、お濱さんのやうな氣合で居て欲しい。偉い娘さんだ、好い氣象だ。祖父さんに何か云はれたつて頭なんか下げてはいかん。其代り御酌は御遠慮無しに願はう。ハ、ハ、』

と無邪氣に制し止めたり。

『左様仰あつて下されば先づ老夫も助かります。何様か御機嫌好く御談しなすつて。元頭は古風物で時代違ひですから、御若い方の中では氣が退けてなりません。御免蒙りますから御寛りと。』

『イヤ左様で無い。君は中々話せる。い、ぢや無いか老翁、ここに居たまへナ。』

『ハ、ハ、ハ、有り難うございますが萬一何様な事でか叱られました、若し御卷骨を頂戴しますと、兀頭は特別に利きますからナ。まあ引退つて居る方が無難でございます。ハ、ハ、ハ、イヤこれは冗談を、失禮いたしました。』

吉右衛門は終に彼方へ去れば、日方は羽勝と相見て笑つて

『好い老夫だナ。如何にも奇麗な軽い調子で、そして親切に満ちて居る、透徹るやうな人だナ。』

『左様だ。まだ我々の及ばんところがある。』

と評し合つて樂しげに酒盞を擧げたり。

『ハ、ハ、ハ、乃公ぐらゐ能く飲む奴はあるまい。何だか老人が出て來たので甚く氣が和いで、何程でも悠然と飲めさうなやうな心持になつて來た。』

其五十

言はねども花あれば野は自から春なり。あどけ無きお濱一人の交りたるに一座は和ぎて理屈を離るれば談話に角無く、笑聲漸く起れば酒の味饒く、謹嚴の羽勝、沈鬱せる水野さへ、何時か六七年の往時に復りて、心は若く氣は易く語らへば、まして日方は興に入りて、羽勝の斥けたる天真爛漫、醉態淋漓として受けては飲み受けては飲み、島木、馬鹿野郎、一緒に來れば宜いのに。金儲に忙しがたつて何になるものか。』

と幾度か繰り返して罵つては、又餘念も無く二人を相手に談笑して盃を手にした。』

『お濱さん、その色の黒い眞面目老夫の羽勝に飲ませて遣つて呉れたまへ。コラ羽勝！、飲まんかい、水野の妹の酌だ。ハ、ハ船では成るべく酒を用ゐるん習慣を付けて居るから飲めんなぞといふのは虚言だら

う。船員は大抵善く飲むといふぞ。』

『イヤもういかん。虚言では無い、船では成るべく用ゐんやうにして居るのだ。執務の不確實になる基だから飲酒は忌む。これは海員の精神の進歩した趨勢で、古來の海員の飲酒に耽つた悪習を洗ふ任は我々の肩にあるのだ。だから實際僕などは餘り用ゐん。しかし非常な暴風雨の時、襯衣まで濡れ浸りながら困苦極まる勞働を仕た後などでは、水夫等にも少量の酒類を與へ、自分等もまた聊か用ゐる。その味はまた君等の知らんところだ。烈しい怖ろしい風、酷い痛い雨、眞黒な天、荒れ立つ水、造物主が其の偉大な働きを見せる大洋の上で、木の葉にも等しい孤舟に立つて、たゞ我が堅確な意志と智識の判斷とのみを我が味方にして、あらゆる試みに耐へて奮進して行つて、終に其の試みに打勝ち果せた時、ラムでもジンでも日本酒でも、一小杯を手にして自ら犒ふ其の一種の言ふべからざる感じは海員で無くては解らん。陸上の料理屋やなんぞで飲むのとは全然異ふ味とする。僕はたゞ其様いふ怖ろしい暴風雨の後なんぞに、濕氣拂ひのため、疲勞の回復のた

めに、飲む時ばかりは眞に酒を賞するが、其の他の時に左程好まん。もう澤山だ。大分酔つた。』

『然様固くばかりいふな、さあ一盃遣る。見ろ、お濱さんが眼を丸くして、一心に君の暴雨風の談話に聞き惚れて居る、其の罪の無い純潔な様子を見る。此の人が勧める酒を飲まんといふ事があるか。』

水野はこゝに至つて自から微笑を催し、

『羽勝君、まあ一つ過して呉れたまへ。魯敏孫漂流記を讀んで非常に感じて、魯敏孫と一處に棲みたいといったほどの崇拜者となつて居る、航海者好の其人の御酌だから。』

と前の夜の事を思ひ起して語り出づれば、

『あら、よくつてよ先生、餘計な事を。』

とお濱の打消さんとするが如く言へると同時に、日方は笑ましげに、
『何だ、魯敏孫の崇拜者だ！、こりや面白い。偉い！。然様來なくちやならん、其で無くちやいかん。實に愉快な人だ、頼もしい！。成程日方が頭を撲られたのも無理は無い。ハ、ハ、ハ、君のやうな人に

なら、もう少々打撲られても關はんは、あ、面白い。水野猪口を與せ、さあ魯敏孫夫人御酌を願ふ。』

と打興じたり。されど羽勝は冷然として、たゞお濱をば一瞥せしのみ、水野に對つて物靜かに、

『海國の日本の事だもの、魯敏孫漂流記に興味を感じるやうな女子の出て來て呉れるのは當然の事だ。僕は此席にさへ此様いふ婦人を見る世に、まだ海國の日本の詩にも小説にも、海に關したもの、甚だ少いのを遺憾に思ふ。水野！今年中には島木の船を何様しても出す。僕は無論全權を有つて出掛けるのだ。何様だ、君一つ奮發して海上に出んか。決して危険なんぞは有るもので無い。好い機會だ、大洋の美觀壯觀を君の眼に入れんか。茫々たる大洋の大な景氣の中へ出て、人間の紛々たる葛藤を逃れて、直接に造化の懷中に寢て見んか水野。たしかに君の知らん心持が爲やうぜ。』

と豫て考へ來りしことにやあらん、思ひのほかなる點を沈着いて云ひ出しぬ。

其五十一

水野の答へに答へかぬる時、羽勝はふたゝび言葉をつぎて、

『實は遠洋へ出る漁船などでは、便乗者を特のほかに迷惑がるのだ。しかし君が好むならば僕は勧めても乗せたい。君を大洋の中へ引出したい。いろ／＼の人爲の複雑な組織で、自然の眞趣を蔽ひ盡してゐる陸上から君を離れさせたい。直接に自然の前に出て貰ひたい。直接に自然の詩巻を讀んで見て貰ひたい。僕はよくは詩を知らん。しかし僕が知つて居る自然は、僕の知つて居る一切の詩とは甚だ遠いものだ。僕は自然の或者を解して居る點に於て詩人に勝つて居るとは信ぜぬ。たゞし海上に關する詩の甚だ淺薄なのは感じて居る。若し詩想のある人が大洋に浮んで、自然の廣大な背景の前で、人間の自から抱く感じを味つたら、在來の詩のやうなものばかりは出來て居まいと思ふ。まあ想つても見たまへ。彼方から此方へ歸る路の、太平洋の眞中あた

りで、僕がたゞ一人舷頭に立つて居たことがある。丁度月は眞珠を溶
 かしたやうな光を投げて一切を包んで居る。其の中を走つて居る自分
 の船は何處へ行くのだらう。行く先も見えん、来たところも見えん。
 たゞ淡い光の満ちて居る天水の中を歩いて居る。海は絹毛氈のやうに
 滑らかで美しく廣がつて居る。柔かい／＼しかも心の正しい貿易風
 は、恩愛の溢るゝばかりの慈母の手から出る團扇の風が、睡て居る
 嬰兒の顔へ當るやうに、そより／＼と後から吹いて居る。帆は一ぱい
 に張られたまゝでパタリとも動かぬ。休番のものは皆熟睡して居る。
 當番のものも、こくり／＼と遣つて居る。一切の用事は皆忘れられて
 居て、胸の中にも頭の中にも何も無い。何一つ耳に立つ音も爲無い。
 何も見えん天と水との間を茫然として見て居ると、何時かもう自分の
 身體も消えて仕舞つて、矢張眞珠の溶けたやうな月の光と一緒になつ
 て、大空の中に流れ瀾つて居るやうな氣がする。左様いふ心持の仕た
 ことがある。其の時の僕の心の中の味とふものは、とても僕の口では
 云ふ事が出来んが、あ、若し自分が水野であつたらば、屹度此の美し

い何とも云へぬ感じを、文字に現して人に示す事が出来るであらうものをと、深く其の時に僕は思った。何様だ君一つ海上に出て自然が君に何を與へるかを試みては見ないか。必らず君を益する事は少く無からう。凧は凧で面白い、暴風雨は暴風雨で面白い。海上の生活も半歳位は宜からう。小な屋根の下から飛び出して見ないか。大熊星の光は北で待つて居る、十字星の光は南で莞爾つて居る。大いこの天地では無いか。米粒に文字を書くやうに、細い事ばかり考へ込まずとも、其の米粒は姑く傍へ置いて、自然の大な景色に親しんで見ないか。何様だい水野、何と思ふ？。君が嫌なら仕方は無いが、学校の教師も既よからう、一つ遊んで見ては何様なものだ？。』

と、勉めて水野の意を動かさんと心長く説きたるは、全く心構へして來りしなるべし。

羽勝の意の解せぬ水野ならねば、少からず其の話に情を動かして、まことに趣味多かるべき海上の生活を試みたきやうの念も起る傍、羽勝が我がために思を費して、かゝる事を勧めくる、其意を感じて、嬉し

とも忝かたじけなしも胸むねの中には、幾度いくたびか感謝かんしゃしてまた感謝かんしゃしぬ。

されど水野みづのは今こいま、に其言そのことばに隨したがはんとも云いひ兼ねて、何なにと應こたへんと思おもひめぐらすを、見取りて羽勝はがちは言葉緩ことばゆるく、

『何も今君なにかの返辭へんじを求めるのでは無い。船ふねは凡およそ十二月じゅうにぐわつに出す心算つもりなの

だから、それまでは間あひだもある、ゆつくり考かんがへたまへ。若もし其それまでに何

様な事ことでもあつて、海うみへ出でたいと思おもふやうな事ことでもあつたら、いつで

も相談さうだんに乗のる、悦よろこんで應おうじる。大洋たいやうを見るのも宜よろからうと思おもふよ。』

と少しも無理強むりじひの氣味きみ無く云いへば、

『賛成さんせいだ、大賛成だいさんせいだ。大洋生活たいやうせいかくわつを遣やつて見ろ、水野みづの。女をんなの傍そばなんぞにへ

ばり着ついて居ゐないで、飛とび出だせ、羽勝はがちと一緒いっしょに行ゆけ、お濱はまさんでさへ

魯敏孫ろびんそんと同棲どうせいしやうといふ氣概きがいが有あるぢや無いなか。』

と日方ひかたは却かへつて強しひ立たてたり。

天うつ浪 第二終